

1089/25

獨乙 プライデレル 原著
日本 金森通倫 譯述



自由神學 全

明治廿五年七月刊行

序

自由基督教は近世文明の産兒なり、世の頑迷妄信者流が之に對する感情及行爲は、宛然繼母の繼子に於けるが如き觀あり、而して披れ生れて未だ幾歳ならず、其能力未だ發達せず、故に彼等は其の幼孩なるを機として、曠に之を迫害し、之を虐待し、たゞ其の至らざるを恐れ、彼等が將來の利害を慮る、是れ蓋し深く抑々自由基督教なるものは、現今猶幼少にして、未だ充分に其驥足を展ばし、未だ充分に其勢力を振ふこと能はず、唯、其發達を全ふするの日に於ては、從來の頑迷妄信の情眼を擲置し、宗教社會の面目を一新することあるは、刻を期して待つべければ、彼等が之を恐戰するも、豈に亦理なしとせんや。

余曩に現今并に將來の基督教てふ書冊を發し、聊か現時宗教上の所感を世の士君子に質せしが、彼の書僅々たる百有餘頁の小冊子にして、唯余が意見の一端を示すに過ぎず、加旃元これ余の自家一流の新説にあらず、近世歐米宗教學中に於て最も進歩し、且つ宗教上の議論に於て最も眞意を穿了したるものに就き、此潮流を我國の宗教界に疎通したるのみ。若し夫れ基督教の教義に關し、或は其歴史的發達に就き、深く講究せんと欲するものは、直ちに歐米宗教界の先達に就き、其所論を叩くに如かず。余が閱せし宗教書中に、獨乙伯林大學神學部教授博士フライデルル氏の近著宗教哲學と題するものあり、上下二冊に分ち、其上卷は鴻儒スピノザに筆を起し、ロフチエーに至るまで、近世哲學者の宗教上の意見を評論し、下卷には専ら歴史的講究法により、神

學上の重要な問題を詳論せり。余や素より其所説に咸く同意を表せる者にあらずと雖も、頗る余の會心を得たるもの多く、且つ此書ハ世の普通凡庸の神學者輩が、祖先傳來の遺教を墨守して、一寸一步と雖も其以外に出ることなく、小心翼翼亂劍の間を行くが如く、戰々慄々薄氷の上を踏むが如き感情を以て述作したるものと斷じて同日の論にあらざる也。余竊かに惟へらく、此書我國の基督教研究者を裨益すること少からざるべし、今や我國に於て新説を唱ふるものも、多くは未だ全く其新説の新説たる所を明にせず、僅かに新聞雜誌の評論によりて唯其門牆を知り、之に反對して頑然舊説を墨守するものは、未だ深く其新説を探究せずして、猥に之を辨難攻撃す、茲を以て厭ふ者は其厭ふべき所を知らず、喜ぶものも其喜ぶべき所を知らず、兩者共に未

だ其蘊奥を究めず、未だ其眞意を了せずして、徒に不知不明の間に論争紛議するのみ。余が此書を譯せしは、新舊宗教家に其研究の材料を供へんが爲なり、尙し一旦近世の所謂新神學の眞相を看破し得ば、如何に頑迷なる保守的宗教家と雖も、必ず豁然として貫通し、乍ち靈界の雲霧散じ、茲に始めて宗教の本躰赫たるを得ん。

原書は既に英に譯せられたり、英文に通するの諸賢、英譯に就き之を研究せば、余が和譯よりも遙に裨益する處多からん、蓋し英譯の如きは頗る完全にして、該翻譯中余も亦大に其力を假りたる事あり、而して余が和譯の如きは、務めて讀者に解し易からんことを主としたれば、其意を譯し文章辭句に拘泥せざる處多し、此故に或は原書の文章上の妙味を失ひ、玉を碎きて瓦と變ずる

の憾なき能はず、これ余が讀者諸賢に對し大愧措く處なき所以也。

此書譯し終りて余自らと雖も満足する能はず、況んや讀者諸賢をや、然りと雖も余の之を譯せし微意は以上の如し、また目下宗教界に於て、此書の需用甚だ急迫するところあり、余をして精密なる訂正に時日を費すを得ざらむるを以て、敢て余の不敏と此譯書の不精とを顧るに違あらず、早急の間之を世に公にせり、諸賢夫れ之を諒せよ。

明治廿五年七月中浣

金森 通倫 識

目次

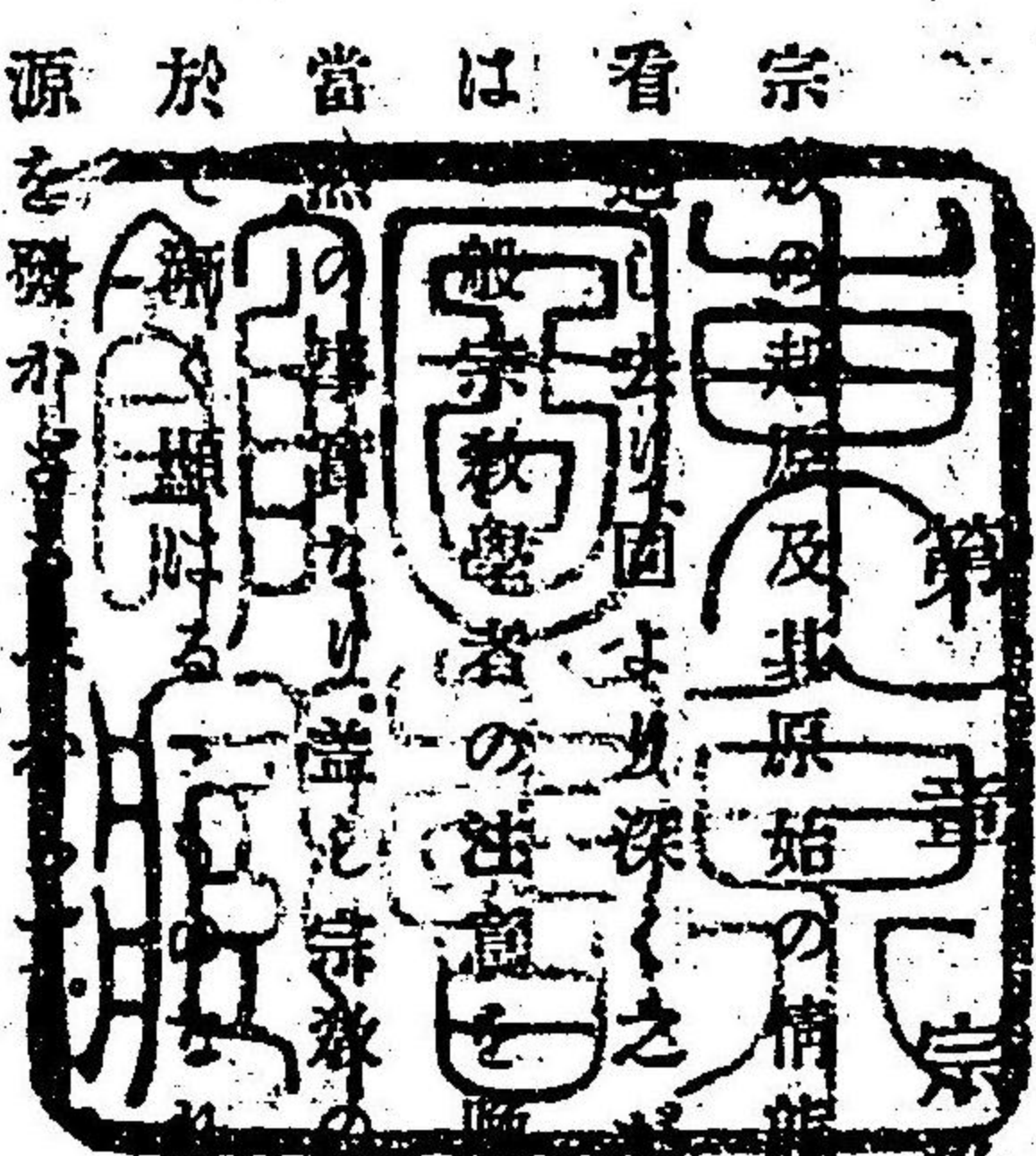
第一章	宗教起原論	一頁
第二章	上帝論	七五頁
第三章	天使及惡魔論	一九二頁
第四章	天地開闢論	二二〇頁
第五章	罪惡論	二七九頁
第六章	天啓及奇跡論	三五七頁
第七章	救濟及中保	四四一頁
第八章	人生の終局	五二二頁
第九章	禮拜及教會	五八二頁
第十章	宗教と道德	六四四頁
第十一章	宗教と理學	七〇四頁

宗教起原論

宗 教 起 原 論

自由神學

獨乙 プライデレル著
日本 金森通倫譯



宗教起原論

宗教起原論及其原始の情態に關する問題は、往古の宗教哲學者は概ね之を輕々に看過し去り固より深く之を探究を試みたるものなかりしが、近世に至りて該問題は一般宗教學者の注意を喚起し、終に宗教界の議論の燃點となりたるは、正にこれ當然の事なり。蓋し宗教の如き心理的現象の本質は、其發育進化の歴史の全跡に於て漸く顯れるものなれば、苟も之を了解せんと欲せば、必ず先づ其始に遡り其源を發かざるを得ず。

故に余輩は本論の始より歴史的講究と哲理的講究とを混合するの必要に遭遇せり。世には歴史上の口碑なるもの頗る多端なりと雖も、未だ曾て一個も人類の太古に達及したるものなきを以て、太古の宗教に關するの口碑なし。此を以て余輩は古來諸邦民族の間に傳りたる口碑中より、其最古なるを撰み、是等を比較的に研究し

二
て、漸く人類宗教心の起原を推知するに過ぎず。方今右の探究を補助するもの二個あり、一は比較言語學の結果にして、他は現今蠻族の間に行はるゝ宗教を観察して得たる結果なり。是等は太古の宗教歴史を探究するに、太だ緊要にして有益なる補助なりと雖も、現今の宗教學者間に右の問題に關する議論は、尙紛々として一定し能はざる點より考ふれば、是等の補助あるも確實なる結果を得ること頗る難澁なりと覺ふ。蓋し古代の口碑、比較言語學及人種學等は、分明に太古の宗教の情態を指示するものにあらず、僅に其痕跡及其片端を顯はすに過ぎざれば、現今の宗教學者は以て各自に其意義を解釋し、亦之を結合して漸く當時宗教の情態を想像するに止まれり。これ彼等の間に著しく意見の異同ある所以なり。而して宗教學者は、各人の宗教心の發起するには、其心の如何なる能力、感情が如何なる動作を爲すやに就ては、各自の持説に此解釋を牽引する所あるより、勢ひ其間に異同なきを免れず。是等の心理的問題に關し、余輩の議論は已に哲學上の區域に進入するに至れり。太古の宗教歴史の紛々雜々たる亂麻を裁斷する利刀は、自己及其周圍なる宗教的生活の實驗を反省考察するにあり。未開矇昧なる原始の宗教心と、大に發達したる現今

の宗教心とは、其間に天淵の差別ありと雖も、之を一貫する心靈の理法は更に異なる事なく、人の精神上の動作は之に従て順次に發興せられ、特種の刺戟物は其精神上之に應ずる特種の感動を惹起する也。則ち宗教發育の根底に存する理法は、古今を通じて同一軌なるは已に多數の假定する所にして、其根原は世界に關する哲理的觀解に基くなり。
去れば心理上より觀察して、最も能く其理に適し、同時に古代歴史上の事實を、最も自然的に解釋するの學説は、則ち宗教起原の問題を解釋するに、其の眞理に近き學説なりとす。余輩は先づ現今宗教論の正面に於て、正反對の位置を有する二個の學説、則ち純然たる墮落説と世人の所謂進化説とは、未だ以て前二個の要求を満足せしむるに足らざる事を示さん。蓋し前説によれば太古の宗教は最も完全なる唯一神教なりしが、漸く腐敗して終に偶像崇拜に陥れりと、又後説によれば宗教の起原は最下等の拜物宗 (Fetichism) にありしが、漸く進化して終に最高等に達したりと、世人後者に附するに進化説の名稱を以てすれども、余輩の思考に依れば此名稱は頗る不適當なり。蓋し眞誠の進化なるものは、最も特性的より通有性に達するの謂に

あらず寧ろ無限定の通有性が發して特種の限定に進む事情なり余の持説とする
は前兩説の中間に立ちて、不偏不黨の説なれば、進化の名稱は寧ろ取て以て余が説
に冠せしむるを適當なりと信ず。

宗教の起原問題に係る最古の答解は、之を以て原始に於ける神の天啓に歸す。蓋し
斯の如きは宗教心に最も了解し易き解釋なればなり。此解釋にも多少眞理の分子
なきにあらず、何となれば人類の神の意識は固より其本性の一部分にして、元質は
造化の本原と同一なるが故に、其中には神の天啓を抱含すること明白なり。然れど
も余輩は此天啓を如何に觀得すべきか、若し之を以て自然の方便に依り人心内部
に於て成就すると思考せば、これ人類は自然に神を知るに至るの力を有すると言
ふに外ならず。去れど如何なる歴史的事實、如何なる心理的事情により、人類の神の
意識の實際に於て現出せしやの問題に至りては、未だ以て解釋し得たるを爲すを
得ず。然れども目下の問題ハ唯其解釋法を採檢するにあり。若し神の天啓は純然た
る超自然的若しくは奇跡的にして、神は原始に於て外形的に宗教上の教義を人類
に授與したるとの説が、充分に吾人を満足せしむるを得ば、此問題は已に解釋せら

れたるを爲すを得べし。これ夫の天啓論者が常に唱導する所にして、一瞥甚だ簡明
なるが如しと雖も、深く之を講究する時に於てハ、夥多の難問は之に纏綿せるを發
見すべし。神の天啓果して斯の如んば、何故に古來萬邦民人の間に種々なる宗教散
布せる耶、亦古代に遡るに従ひ、其信仰純潔ならず、眞理に悖逆する所多き影跡ある
ば、甚だ了解し易からざる事情ならず哉。元來宗教は直接なる神の天啓に發したる
ものとせば、何故に其信仰は萬國民を通じて同一轍に出で、萬世に涉りて純潔眞誠
ならざる耶。此難問を避けんが爲に、或宗教家は一種の臆説を構へて曰く、原始に於
て神は人類に授くるに純粹なる眞理を以てせり。故に太古の人類は一般に同一な
る宗教を奉じ、其神に對するの信仰も亦完全なりしが、後に至りて其罪惡によりて、
原始の高等なる信仰より墮落し、竟に偶像崇拜に陥り、爲めに種々雜多なる迷信妄
説の起りて、不完全なる宗教を奉載するに至りし所以なりと。然れども神已に原始
に於て純潔なる眞理を以て人類に授けたりとせば、何故に神は同時に彼等をして
永久之を保持せしむるの道を授けざりし耶。原始に於て之を彼等に授けると、已に
授けたる以後に於て、彼等をして之を保持せしむる法を設くるとは、夫れ將た孰れ

か難事とする耶。太古の人類は未だ幼稚なり、未だ何事をも不經驗なり、然らば假令一旦純潔完全なる真理を授くるも、忽ち之を妄失し、忽ち之を紛雜ならしむるは、火を見るよりも明瞭なるにあらず耶。神も必ず其事あるを豫知せられしならん、然るに豫め其妨禦の計を講せず、大切なる宗教上の真理を未熟の人類に放任し、彼等をして數千年間黯黒迷霧の裡に彷徨せしめ、再び新規なる天啓を下し、以て原始の純潔なる信仰に歸らしめんとするが如きは、これ豈に完全なる神の智慧に基きたる教育法としては、甚だ不都合千萬なるにあらず耶。

右の難問は余輩をして稍前述の解釋に伴ふ疑團を懐かしむるに至れり、而のみならず神が自ら太古の人類に授くるに宗教上の智識を以てしたりとの説は、尙若干の難題之に附帶す。抑神を以て一個の教師の如く見做し、自ら太古の人類に顯れ、彼等を教育するの勞を取れりとするは、是則ち神人同形の最も甚しきものにして、余輩は之に向て論難すべき點頗る多端なりと雖も、今は暫く之を措き、茲に余輩が決して看過し去るべからざる要點あり。凡教育は、假令如何なる完全の方法に依るも、若し之を受くるものに於て、其授けられたる真理を知得し、之を了解する能力を有

せざれば、決して其効果を見ること能はず。去れば未熟幼稚なる太古の人類は、如何にして至高至難の觀念なる唯一絶對の神、若しくは唯一純靈なる神と言へる如きを了解するを得ん哉。凡そ學は已に了解し得たる諸の觀念により、亦是等を了解するに於て、稍熟達したる能力により、新觀念を知得するにあり。されば稍高尚なる觀念を知得するに當り、之が爲に、若干の豫備をかるべからず。太古の人類には、かかる豫備は、之を心理上より講究するも有得べしとは思惟せられず、亦之を歴史に徴するも更に其影跡を認る能はず。比較言語學の教ゆる處に依れば、後世に至り人類が高尚なる道義上及心理上の觀念を表證するに使用したる言語の根本は、大抵太古に於ては純然たる物質的現象、若しくは動作を表證したるものなるが、文明の進歩に従ひ、漸を追ふて其意義稍高尚となり、竟に心靈上の意義を含蓄するに至れりと。是に因て之を觀れば、太古の人類が言語の根本を形造しつゝ、ありし時は、彼等は未だ超感觸的の觀念を有せず、尙物質的現象中に生活し、其觀念の悉く物質的なりしは、恰も方今に於て吾人の小兒等の情態に等しかりしならん。方今に於て吾人の小兒等が、僅々數年の教育により、一躍して物質的境界より心靈的に進達し、種々の

高尚なる觀念を知得するに至るを得るは、蓋し彼等の爲に千百年來、彼等に代り思考し實驗したる祖先の賜物あるが故なり。然れども此便利を有せざる太古の人類に向て、是等の觀念を知得せしめんとするには、假令幾千年を経過するも、恐く其效果を見ること能はざるべし。かゝれば太古に在て神が天啓に依り宗教上の完全なる智識を人類に授けしとの説は、彼等太古人の能力之を受るに堪へざるの事實に接して、全く潰滅したりと言ふべし。

或論者は此簡明なる議論の尖鋒を避けんか爲め、イヌラエルの宗教を提出して曰く、アブラハムの家族に於ては、太古より累世神に對する真誠の信仰を持し、之を以て其遺教と爲せり。是豈に原始の天啓を證明する遺例にあらずやと然れども、夫のイヌラエルの祖先は神に對する真誠の信仰ありしと主張する説は、既に現今に於ては歴史的批評學の爲に、其拙劣を看破せられて殆ど剩す所なし。是等ハ夫の宗教の口碑には常に有うち、の事なる稍發達したる後世の信仰を直ちハ太古の祖先に推及し、彼等にも等しき信仰ありしと見做す。宗教心の想像より發したる結果なるに過ぎず。余輩は後章に至りイヌラエルに於ける、宗教心の發育を論ずるの段に於

て明に夫の國民古代の宗教は頗る劣等なる自然崇拜教なりしが、漸々進化して竟に高尚なる道義的宗教に達したれども、其間に在て種々なる障碍物の爲め其進路を妨害せられ、幸ふじて其發育を全ふしたる事實は、明に之を了解し得へし。譯者曰く、フ氏は別に一章を設け、精細に「イヌラエル」人宗教の發育を論じたれども、事頗る浩瀚に渉るを以て本譯書には之を省きたり。かゝれば偶々原始の天啓説を辨護せんか爲に提出したる引證も、却てこれ其反對を證明する遺例となれり。或人復説を爲して曰く、原始の天啓は神自ら奇跡的に宗教上の教義を人類に授けたりとの極端なる超自然的ならざるも、人類固有の觀念として、始より其本性に附着する自然的天啓にあらずざるなきを得んやと、かく天啓の説に冠せしむるに稍自然的の形狀を以てするは、一見甚だ前述の超自然的に優るか如しと雖も、綿密に之を穿鑿せば、心理及歴史に照し到底維持しかたき謬説たるを免れざるを發見すべし。それ人類の意識中に存する觀念には一個も生來固有のものあるにあらず、況んや其觀念中にて最高なる心靈的に於けるをや。是等は寧ろ人類の心靈が世界の客觀的理性に接し、其間に惹起したる原動及び反動によりて自ら主觀的理性と變

成する。長き進行に於て漸くに得たる所の結果なり。人性固有と稱すへきは唯能力の一あるのみ、則ち人性をして合理的と變成せしむる眞實の可能性と、内心の衝動力の外あらざるなり。如何にして是等能力が各個人に於て、實成するを得るやの問題は、單に其の可能性は人類固有なりと言ふのみにては、未だ以て解釋し得たりとすべからず、十八世紀の非歴史的なる文華(自然神論及正理論)十八世紀文華とは文運隆盛の時代の大誤謬は同じく此點にあり。彼等は理性を以て化成するもの、自ら天性の能力中より自然界の境遇及び社會の事情國體、邦土及び生活の模様等々に應じて進化し來れるものと思惟せず、却て完備したる合理的想念にして生來人類に附着したるもの、既に固定せる明瞭なる觀念の統計の如く見做せり。彼等は自己の文華せる理性、否寧ろ、彼等が理性と稱する抽象的形式の合理性を以て、原始より人類に存したりと思考せり。故に文華は普通の歴史殊に宗教歴史を正當に了解すること能はず。彼等は人類の理性は古今同一様にして、人皆等しく之を有せりと假定すれば、宗教歴史に於ける人類の種々なる觀念及動作を自然的に解釋するの道を得ざるものなり。則ち是等を以て宗教心發育に於て、自然及必然的の結果

なりと見ると能はざるなり。故に彼等は往古の詭辨論者の轍を蹈み、諸種の宗教の起原を非自然的に解釋するに至れり。彼等は之を以て祭司の欺罔、或は政治家の政畧の如き人爲に歸したり。則ち世の宗教中に彼等の主張したる頗る抽象的なる道理の信仰に適はざるものは、悉く人爲に出でたる迷信妄想なりと認めたり。されば宗教歴史に關する正理論者の見解は、夫の「オルソドックス」派の主張する所と同一對の認見たるを免れず。後者の「パイプ」以外の宗教は悉く「イデン」の樂園に於て、神の自ら授け給ひし天啓に基く、眞誠なる宗教より墮落したるものなりとす。然るに前者は「パイプ」の内外を問はず、世に存在する諸宗教は、道理に基く眞誠の宗教を、人類が故意に壞類腐敗せしめたるの結果なりといふ。此兩説共に歴史上及心理上に照して、甚だ其當を失したるの點に於ては、其間に毫も差異あることなし。第十九世紀の前世紀に比して大なる進歩と稱すべきは、總て是等の偏見を超越して、深く歴史の神髓を穿ち、人類の心靈的生活の發育を明了し得たるにあり。この大進歩に與る最有力者は、先哲ヘルデル(Herder)なり。世人が彼を評して近世歴史學の豫言者、殊に現今宗教學の鼻祖なりとして稱揚するは決して過稱にあらざるなり。

進化の
歴史
の
研究

神學史

進化の理法により人類の歴史を解釋する新法を開拓したるは、實にヘルダーを以て嚆矢と爲す。ライプニツ (Leibnitz) の如きも多少之が準備を爲すに與りて力ありしと雖も、超自然及正理論の謬見僻論を遂に超脱して、茲に進化主義宗教學の大本を建設したる功績、今日に至るも赫々として他に其光采を奪ふの匹敵を見ざるを以て、
進化の理法に依て宗教起原を解釋せんとするに當り、先づ第一に起るの疑問は從來世に進化説の名稱を專にしたる、拜物教 (Fetichism) 及拜靈教 (Animism) を以て原始の宗教なりと認むる學説は、果して之を解釋するに唯一若くは最良の學説なるや否やの一事なり、余輩は此疑問に對し歴史及心理上より之を否拒せざるを得ず、然れども從來世に勢力を逞したる唯心的宗教哲學が、常に輕視したる否、寧ろ忘却したる宗教歴史の重要なる諸點に向ひ、世人の注意を喚起したるは余輩之を以て所謂進化論者の功績に歸するを躊躇せざるなり、然と雖も宗教の起原は容易に拜物教、或は拜靈教若しくは此兩教を混淆するの學説に依て解釋し得らるものにあらず、今右の學説を評論するに當り、その困難を感ずるは其中に使用する總念の定義

宗教起原論

階だ漢乎とて、人に從り其意義に廣狹ある一事也、
「フエチス (Fetich) 」と言へる語は、元葡萄牙人が蠻族の間に崇拜せられたる偶像に附したる名稱なりしが、世人の熟知する如く元羅甸の「フラクチヨウス」 (Fetichina) より轉化し來りしものにして、其第一の意義は人工の肖像を表示するものなるが、これより轉じて守札、偶像等の如き魔力異能を有するものを表示するものとなれり、然るに「エフ、シニルチエー」 (Fschutze) 「メス、メエン」 (Peschel) 「カス、パリー」 (Capan) 「ヘン、ウワヤド」 (Hallwald) 「デー、ロル」 (Tylor) 「レフ、ロー」 (Lefevre) 及其他の人々が主張する拜物論に於ては、此簡明にして制限ある總念は廣漠となり、下は山川草木より上は日月星辰等、其他苟も人類以上に位し、若しくは神性なるものには、總て適用する所となれり、是等は夫の魔力ある偶像、守札の如きとは、甚だ縁故の迂遠なること明白なれども、前述の學者等は、概に「フエチス」の名稱を、是等に適用して更に顧みざりしなり、而して彼等が「フエチス」の名稱を濫用して、大に其簡明なる總念を錯雜ならしめたるものは、蓋し下の議論に基くならん、抑人類が神を信するの心を起したるは、人には一切の現象に對し其原因を要むるの傾向あるに基くもの也、原始の人類は其觀察の及

ぶ所狹隘にして、僅よ周囲の物體に限れば、彼等が目撃する事物の原由を其の日常観察する物體中にて其注意を喚起し、其好奇或は恐怖若しくは希望の心を起さしめたるものに歸したるならん、彼等は自己に接近して其觀察の目的となりたる山川泉石、其他動物若しくは人類の如きもの、中に、彼等が崇拜の目的則ち「フエチス」を設けたり、仰て天空の日月星辰を見ては之を其「フエチス」の席列に加へ、終に天を以て其至高の「フエチス」と爲すに至れり、然れども彼等が事物の原因を求むる感情は、是等有形のみを以て満足する能はず、然るに彼等は超感覺的の魂魄を崇拜するの經驗を有したるにより、進んで無形心靈的の神を以て至高の「フエチス」と崇め之を以て萬物の根本造物者なりと尊重するに至り、かくて拜物拜靈兩教の和合より終に唯一神教を生ずる事とはなれりと。

右の如く天然界の諸現象にまで「フエチス」の總念を適用せんとしたるは、頗る放蕩なる名稱の濫用なるが、尙之に加へて彼等が其總念を錯亂したる第二の誤謬あり、是等の學説に従へば「レニルチエー」及「ベスシエル」等の重に主張する所なり、人類が靈を拜するに至りしは、許多の物體を拜する階段を登り、其絶頂に達したるの時なり

と、然れども若し前陳の如くんば、人類は未だ其絶頂に達せざるの前に於て、業に己に靈(死者の)を崇拜しつゝありしにあらざや、是れ實に甚しき自家撞着の説なりと云ふべし、彼等若し當初より靈を拜するの道を知悉したらんには、何の必要かありて、至高無形の心靈的の神の觀念に達する前に、數多物體崇拜の長階段を経ざるを得ざりしや、又太古の人類が同時に單純なる無生の物體と無形の心靈とを拜したりとの説は、頗る了解しがたきものにあらず哉、何が故に太古人は單純なる非生の物體を「フエチス」として崇拜するに至りし耶、何が故に岩石、羽毛及人工の肖像等の如き死物に附するに、人類以上なる神の力と神の性とを以てしたる耶、これ亦了解し能はざる所也、若し活潑なる天然の諸現象中にて強く其心を感動したる者により、業に己に奇跡的神力の總念を知悉し居れば、直ちに之を前述の死物に推移し、彼等にも是等の力を憑託し、之を以て其居住と爲し、或は機具と爲すとの觀念を起したりとすれば、多少非生物體を拜崇するに至りし所以を了解するを得べしと雖も、直ちに始めよりして是等死物の中に其等の異能あることを認め、之を崇拜するに至りしとの説は、頗る之を會得するに苦む也、若し拜物と拜靈とは、其發達の最後に於

て相混同したるにあらず、最初より相提携して起り、則ち人類が一の物体を崇拜するに至りしは、之を以て或る心靈の居住或は其機具なりと思惟し、物体其者の爲めにあらず、之に居住する靈の爲め之を崇拜するに至りしと假定する時は、前述の點の稍減少する所あるが如しと雖も、かく拜物拜靈の二説を混合して、宗教の起原を解釋せんとするも、尙未だ之に附帶するの困難を全く除却すること難かるべし。是等は夫のチーレー (Tiele) 及デーロン (Tyron) 等の重に主張する所なり、此混合説に従へば抑人類がフェチス (Fetich) を崇拜するに至りしは單純なる物体とは全く異物なる魔力を有する心靈が、霎時其中に假住すると信じ、其住處なる物体を崇拜する者なりとなすにより、一見頗る釋然なるが如しと雖も、深く是を講究する時は其隱見たるや明白なり、何となれば活潑なる靈が死せる物体に假寓すると信ずる未前に於ては、彼等人類は形體なき物体に結托せられざる純靈が、世に存在することを知悉せざるべからず、是等の靈に魔力を歸する未前に於て、彼等は已に超感覺的にして、冥々不可思議の中に運動する能力あることを知悉せざるべからず、此二個の純然たる抽象的總念は、フェチス信仰の爲には、必然なる基礎と假定せざるべからず、然

れども是れ豈に幼稚なる太古人の企て及ぶ所ならんや。拜靈論者は右の如き抽象的總念を以て、フェチス崇拜の基礎なりと主張すれども、是等は太古人類の宗教心を見る寧ろ高尙に過ぎたと、恰も拜物論者が之を見るに劣等に過ぎたるか如し、拜物論者の説に依れば太古の神々、當時の人類が其狹隘なる觀察を以て、周圍の物體中より彼此を撰擇したる單純なる物質的の者なりしと、然れども拜靈論者の説に依れば太古の宗教心の形體なき靈、又冥々不可思議の能力と言ふが如き、頗る抽象的の觀念に發芽したりと、去れどかゝる高尙なる觀念は、幼稚純朴なる太古人が未だ了解知得し能はざる所也、蓋し是等は稍發達したる抽象的反省力の結果なればなり、太古の人類には赫灼として熱氣ある太陽の天に輝き、暴風雷鳴の空に轟き、狂浪怒濤の海に翻るが如き、彼等の耳目を聳動し大に彼等を感じしたる、活潑なる現象を以て活ける神と信じて崇拜すると、更に形体なく其活潑なる運動をも實驗する能はざる、單に妄想の一端に基く魂魄を崇拜すると、孰か最も自然に最も容易と爲すを得る乎、かく明瞭に此問題を開陳する時は、正當なる答解は自然其中に含有するを見る、然れども時に此問題をして不明ならしめ

其答解をして困難ならしむるものは、拜靈てふ總念の漠然たるにあり、譬へばテロ
 ルの如きは、此總念中に三種の異様なる分子を含有せしめたり、則ち萬有を以て悉
 く活潑なる靈を有する者と認めて之を崇拜すること、自然界の現象と全く獨立し
 て存在する純靈を崇拜すること、最後に、死せる人靈若しくは祖先の靈を崇拜する
 こと、是等の種々なる觀念は互に相通行し、混淆し、連環するに至りしは、余輩も亦之
 を否定するものにあらず、然れども宗教起原の問題を講究するに於ては、是等觀念
 の間に主要なる區分あるを忘るべからず、萬有の靈とは元來自然界の現象を離れ
 て獨立する靈の謂にあらず、寧ろ其現象の活氣活動を表示するに過ぎず、太古の人
 は是等の活潑なる諸現象を以て動物若しくは人類の如く意志感情を有し、目的に
 向て運動する者なりと思惟せり、然ども彼等未だ人類に於ても靈と体との區別を
 立てざりしにより、是等の現象に於ても亦然りしなり、されば萬有の靈とは無形な
 る獨立の靈にして、諸現象とは偶然的に關係せる者にあらず、彼等太古人の目以て
 見るべく耳以て聞くべく、其活潑なる運動は深く彼等の心を感動したる自然界の
 現象其物を指すなり、彼等の中にて最初より最も強く人心を感動したるは、自然界

の強大なる諸勢力なりし也、而して其力の莫大なるは人類に明白なり、彼等は多少
 之を感動し得るの希望を懷きたりしも、之を全く支配し自己の爲に之を使用せん
 とするの念は夢想にも及ぶべきにあらず、是等は通有の勢力にして各個人の爲に
 存するにあらず、亦彼等の私有に歸せしむべきものにあらず、是等は一切の爲に存
 在し、一切の共有するもの也、故に之を崇拜する人々の心を連環する鎖也、人類を結
 托する社會の漆灰なり、然れども人の周圍を飛舞蹠躑し、其好む所に棲止する無數
 の靈に至りては、全く前者と異なる所ありて、祖先の靈の如きは則ち此部類に屬す、
 かゝる魂魄の軍隊は、決して人類の知覺し得るものにあらず、故に各人各個其嗜好
 に従ひ其妄想を逞し、任意に是等の靈の品質を定むるを得、彼等の力は外に顯はれ
 て人類の觀察に觸れず、冥々不可思議の中に運動するなり、然ればとて自然界の強
 大なる諸勢力の如く、到底之を利用する望を絶たしむるにあらず、却て人類は之を
 自己の支配に歸せしめ自己の爲に其用たらしむるの希望を懷けり、彼等は唯各個
 有限的のものなれば各個の人類は之と特別なる關係を有するを得て、其所有とな
 し之を私用の具となせり、故に彼等は人類の間を彼我分別する方便となれり、右二

個の觀念は其本質に於て全く殊異ありて之を崇拜する人心にも區別あれば、余輩は太古の宗教問題を解釋するに當り、ア、レフ、非、レ、ー、(A. Reville)に倣ひ、活潑なる寓有を崇拜する所謂自然崇拜と、諸種の魂魄を信仰する所謂拜靈とを、明に區分するを以て便益ありと信ず。前者は最古の宗教にして、後者は之より發せしものならん、祖先の魂魄を崇拜するが如きは、則ち後者の部類に屬するものなり。

宗教の起原を以て魂魄崇拜に在りとするの學說ハ、決して近世の新論にはあらず。宗教學中の最古の說にして、寧ろ陳腐に屬せり。希臘の自由思想家、エ、ハ、ム、ス (Euhomeros) は世人の熟知する如く、神は古代の英雄豪傑を祭りしものにして、彼等が此等崇を得たる所以は、其武勇と智慧の殊勝する所あるに由ると主張せり。例せば、ゼ、ウ、ス (Zeus) の如きは、元、ク、レ、テ 國の王にして、今尚ほ此國に其墳墓を止めり。此神の戀愛に關する物語は、天地陰陽和合の理に基き、自然界の現象に關する事情を種々に變形せしこと明なるにも係らず、彼、エ、ハ、ム、ス は之を以て、ク、レ、テ の朝廷に於ける、私事戀情の醜狀を記したるものと云へり。彼が說に依れば、ダ、ナ、エ (Danae) 女神の名の如きは、黄金色に輝ける蒼の光が、豊に肥す地土に、あちで、ク、レ、テ の王が黄金もて買ひし

一個の美妃なりと、イ、ク、シ、オン (Ision) が、ヘ、テ (Hera) に代へて懷抱したる雲塊は、夕陽の射光に浮遊する雨雲にはあらず、これ亦、ネ、フ、エ、レ (Nephelo) と稱する婀娜呈嬌の宮女なりしと、其他、エ、ヘ、メ、レス の說には此類の解釋甚多し、余輩は右の學說が始て世に出で、朦朧として烟霧の間に包圍せられたる、太古の鬼神論に稍光明を與へたる如きの感情ありし爲め、一時大に世人の注意を喚起し、奇說卓論なりとの賞讃を得たりしは、さまで怪しむに足らざるなり。又十八世紀及十七世紀の鬼神論者の爲め、盛に歡迎せられたりしは、必ずしも了解しがたきにあらず。蓋し此淺薄なる學說は、能く當時文華の嗜好に投ずる所あればなり。然れども、かゝる淺薄なる議論が第十世紀の今日に再燃復活して、重を學者間に持し、夫の、ス、ペ、ン、セ、ン (Spencer) リ、フ、ペ、ル (Lippert) の如き、鴻儒碩學が熱心に主張するに至りしは、敢て余輩の怪訝に堪へざる所なり。此輩の大儒は巧にも古代の、エ、ヘ、メ、レス の如く、其學說を鬼神論の細條目にまで適用するの愚を避けたれども、其宗教の起原を以て祖先の魂魄を崇拜するにありとする大跡に於ては、古人と撰ぶ所なし。斯の如き奇々怪々の説は、余輩不思議の感に堪へざれども、若し強ひて之が理由を求めんと欲せば、必ずしも想像し能

はざるにはあらず。蓋し此輩の實驗哲學者は其考察概ね抽象的理論に偏するを以て、彼等は幼稚なる太古の人類若しくは現今の幼兒等に普通なる感情と妄想に満ちたる心を以て、詩歌的に万有の諸現象を感得するの道理を了解すること能はず。太古人の心情の如きは淡泊自然にして固より論理的にあらず。此情態を此輩の實驗哲學者流は自己の心に描出し能はざるを以て、彼等が詩歌的に天地を觀察するを想像すること能はず。故に此輩はかゝる事情は太古人に有得べからざるとして之か爲に苦心焦慮其宗教心の起原を解釋せんと試みたり。此輩は自己の解釋を以て最も太古の情態を切實に穿ちたりとすれども、實際は最も不切實なる解釋と言はざるを得ず。此を以て天然を活物と見做し、或は天地を以て人類に等しき性情を具備したるものと想像するが如き力は、太古人に未だ備はらざる所也。蓋し是等の想像には稍發達したる美術的感情及哲理的思想あるを要すればなりとの奇説を、熱心に揚言するは余輩往々目撃する所なり。然り、己を以て幼兒、蠻人若しくは詩人の如き位地に置き、彼等の眼孔を以て天地を觀察するの力を有せざる輩には、天然を活物視するが如き想像は、必ずしも美術的感情及哲理的思想の發達を待て然る

にあらず。彼等蠻人、幼兒輩には其の唯自然的の想像たることを證明すること或は難からん。然りと雖も此輩實驗哲學者は如何なる方法を以て吾人に向ひ、太古人は天日、風雨、颶風、雷鳴其他自然の諸現象の如きは、彼等が祖先の靈魂の所業なりと信するに至りし道理を證明するを得る耶。余輩は彌々太古に遡るに従ひ、是等自然の現象を以て、神の發現なりと信したる證據著しきを見れば、此輩恐く之を證明するに一層其難澁なるを感せん。

今や余輩は魂魄崇拜を以て、若しくは祖先の靈を崇拜するを以て、宗教の起原をりとする學說の歴史的根據を講究する問題に移れり。未だ世に比較言語學開けず、古代の鬼神論を講究するものは、概ね皆希臘、羅馬の鬼神論を探究するに止りし時は、之に含有する神及勇士の昔譚に關係することを悉く祖先崇拜の事實を以て之を解釋し、多少世人の満足を買ふが如きことありしは、左まで難事にあらざりしなり。然れども方今言語學大に發達し、諸宗教の神の名稱等しく天然の現象に基くことを明にしたる今日に於ては、事態全く一變するに至れり。ゼウス (Zeus)、ヂュピテル (Jupiter)、ディオ (Dion) の名稱は、印度の「デヤウス」(Dyaus) と其言語の根本を同ふし、則ち

天を意味すること明なり。又「デオス」(Deus)及「ダイウス」(Divus)は「夫の「デー」」(Deus)を同一にして其意義は輝く意なり。「プネート」(Pineon)「ペネウス」(Peneus)「ペネオン」(Peneon)「ボヘロフ」(Herophon)及「ハラクレス」(Hercules)の如きも「夫の「サムソン」」(Samson)「サムソン」(Samson)「サムソン」(Samson)「サムソン」(Samson)ニス」(Adonij)「オシリス」(Osiris)及「メルカント」(Melkart)等しく皆陽神にして彼等の苦心と行爲は、諸邦の昔譚に於ては種様なれども、其本を推尋せば皆等しく、太陽の東昇西没、四時の循環、四劫の變轉、生物の榮枯に關し、詩歌的に吟唱したるに異ならず。既に是等の事實明白となりし今日に於て、誰れか又吾人に向ひ「諸邦の鬼神論に於ける神は、往古の國王若しくは英傑にして、悉く皆同様の運命に遭遇したり」との妄説を、強ひて眞面目に之を信せしむるものあらん哉。近世の「ユヘレメスト」流の人が、偶々是等の事實を解釋するに、太だ奇怪なる論法を用ふることあり。譬へば「ヘルベルト」(Herbert)「スベンセル」の如きは自説を維持せんが爲め、其引證を「亞米利加の土人間に行はる「トテム」」(Totemism)と稱する慣例に取れり。此慣例は世人の熟知する如く、或一種の動物を以て其家族若しくは種族を鎮守する靈と奉崇し、中には自身等は其動物の子孫なりと唱ふることなり。「スベンセル」は之に自我流の解釋を下し其解釋

の誤謬なるは言を俟たず、是等種族の祖先には腕力の健勝若しくは疾足に於て或一種の動物に近似する所ありしを、以て、時人之に冠せしむるに其動物の名を以て其徳を稱せり。此を以て後世に至り其魂魄を祭るに其動物の名を附し、以て種族の守護靈と崇むるに至れりと。彼復其論歩を進め、斯の如きは獨り動物に限らず、天地間の他の現象、譬へば日光、電火、颶風、風雲に擬したることあり。また彼等の妻女を、月、明星に擬したることあり。かく是等の尊稱を其靈魂に冠せしめ、後世に至るも之を崇拜する時に於て此名稱を用ゆるに至れり。これ多く祖先崇拜に於て吾人が天然物の名稱を見出す所以なり。然るに言語學者ハ此簡明なる事實を誤解し、其名稱の天然物に等しき所より推究して、是等の神は元天然の諸現象なりとの謬説を唱ふるに至れりと。然れども諸邦民の間に傳はりたる鬼神論を講究し、其中に使用されたる名稱の根本を、言語學上より講究したる人々が、皆同一轍の誤解に陥りし事實ハ、豈喫驚すべきことならず哉。また諸邦民の「祖先」中にて太陽の尊稱を得たる豪傑及月の尊稱を得たる女傑等が、能くも同一の運命に遭遇したるものにて、殆ど彼等の物語は同一對の事情を種々なる方法を以て世に傳布したると世人をして思惟せ

もむるまでに相背たるの出来事起りしは、これ亦喫驚すべきことならず哉、また彌々古代の口碑を遡るに従ひ、神に附したる名稱は只自然の現象の名稱を形容的に使用したりとの思考は退き、却て最古より神と自然の現象とは同一躰として崇拜し、管に自然の名稱を以て神に附したるのみならず、自然の現象は神の名に依て顯はしたる如きは、これ亦喫驚すべきことならず哉、「ゼウス」「ヂュピテル」等の兩との關係の如きもの、「スベンセル」派の説に従ひ若し夫の「ゼウス」「ヂュピテル」を以て、元と種族の頭領にて其名稱と天との關係は、唯彼等の榮譽を表證するに止るものとすれば、如何にして前述の事實を正當に解釋するを得る耶、是等の點より考ふれば、ヘルムト、スベンセルが「ユヘメレスト」派の學説を支持せんが爲に主張したる説は、當時の思想界の傾向と其主唱者の高名とに依て、一時世上に流行したるにも係らず、此説の壽命は永續すべきものにあらずと言ふも、敢て臆言にあらざるを信ず。方今「ユヘメレスト」派の學説、概して拜靈説を主張するものは、其歴史的根據を古代文明國の最も發達したる鬼神論よりも、却て現今地球上に存在する野蠻人の劣等なる宗教的生活の中に求めんとす、彼等は是等の蠻人を以て太古人類の生活を描

寫し得たりと假定し、彼等の宗教は則ち太古の宗教を直寫するものと信ぜり。然れども此假定は未だ以て正確なりと爲すを得ず、夫のワイツ(Waitz)及ゲルランド(Gerl)の如きは、斯學に於ては最も精密なる穿鑿を遂げたるものなるが、彼等は澳太利及亞弗利加の蠻人の事情を觀察して左の如き成績を得たり、則ち彼等現今の情態は政治上言語上殊に宗教上より觀察するに、必ず古代の稍高等なる開明の情態より墮落したるものならん、當時開明の影跡は逸乎として、今尙彼等の中に散點するを發見し得べしと、去れば蠻族の間に行はるゝ現今の宗教は、概ね魂魄崇拜魔術信仰なること疑なしとするも、之と同時に頗る漠焉として、高等なる神の觀念、今尙は存することあるは、其證跡甚だ夥多にして、輕々看過し去るべきものにあらず、而して是等高等なる神の名稱及性質は、概ね天、日、月と關係する所なり、然れども亦是等の天然物と稍區別する所ありて、彼等は全世界の造化の源なりと認めらるゝことあり、是等高等なる神が、蠻人の現今の宗教に於て、夫の靈及「フェチス」等の背後に退却し、之に對する信仰殆ど消滅せんとするが如きは、疑ふべからざる事實也、而して蠻人は此事實を説明するに左の話を以てす、其詳細に至りては、澳太利、亞弗利加及

亞米利加の蠻人中にて多少異なる所ありと雖も、其の大体を示せば古代に在ては高等なる神は人類に接近したりしが、後に漸々天の遠隔に退き、地上の事は之を劣等なる靈に委任せり。故に今日に於ては是等の神に仕ふる必要なく、唯人は靈を祭るを以て足れりとなす。是等の説話を以て夫の太古天啓論者の如く、直ちに原始に於て純粹なる心靈的唯一神教の存在したる證據なりとなすは、頗る早計なる結論なりと雖も、夫の拜物若くは拜靈説を以ては、到底夫のポリネシア人の間に行はるゝ、高等なる神の崇拜ハ、祖先崇拜の爲に放逐せられたりとの事實を、正當に解釋すること能はざるべし。支那に於ては祖先崇拜は、古代の自然的鬼神論に基くものなり、而して其信仰は今尙國教の一部よして、祖先崇拜と並び行はるものなり。埃及に於ては祖先崇拜頗る發達し、國民間に其重を有したりと雖も、尙其崇拜は一般の神の崇拜の下に位せり。靈魂崇拜の最も盛なる亞弗利加の黒奴、亞米利加の赤人の間に於ても古代には高等なる神の勢力強大なりしが、終に數多の劣等なる靈の爲めに其地歩を奪はれたりとの記憶、今尙ほ幽に其痕を止むといふ。右の事實に依て考れば從來進化の名稱を專にしたる學説が宗教の起原を以て拜物及び拜靈教若

しくは祖先崇拜に歸せんとするが如きは、之を歴史に徵するも心理に照すも、其根據頗る薄弱なるを認め得べし。太古の宗教問題に關しては彼の純然たる墮落説と極端なる進化説とは、孰れも満足なる解釋を下す事能はざるは、余輩已に之を開陳せり。故に余輩は兩者の中央に位する中庸説を以て、之を解釋を試みんと欲す。此中庸説はマックス・ムルレル(Max Müller)、ハッペン(Happell)、ヘーゲン、フロン、シュニマンツ(Eugen v. Schmalz)、エッワルト、フレン、ハントマン(Ed. v. Hartmann)、アレフ、キレー等の齊しく唱導する所なり。右の學者輩は其議論の詳細に於ては、多少異同ありと雖も、夫の唯一神教或は拜物教等を以て原始の宗教とする説を排斥するに至りては皆同一轍に出たり。殊にマックス・ムルレルの如きは、敏銳當るべからざる論鋒を以て、拜物論者の證據を攻撃したり。彼れ曰く、拜物教を以て原始の宗教なりと信する者は、其證據を要すべきの論點を先定して其説を立るが如し。彼れ等は如何にして石片、貝殻、獅子の尾、髪、束、其の他の單純なる物体を活潑なる神なりと信じ、之を崇拜するに至りしや、是れ等の理由を先きに説明するの勢を取らずして直ちに之を假定したる者なり。又彼れ等は人

類が他の原因により一度超感觸的無限若しくは神性といふが如き總念を得たるの後に於ては、容易に之れを純然たる偶然的又は無價値物に移して其中にも是れ等の能力存するなりと思惟することある事實を全く看過したるなり、彼等は純然たる拜物教が現今若しくは過去に在て實存したりと假定す、又一方に在ては更に拜物の分子を加へざる宗教も、世に存することありと假定したるものなりとハツベルも其「人類の宗教性」と題する著書に、右に等しき説を述べ明瞭に之を解説したり。

マックス、ムルレルの宗教起原説は左の如し、人に有限を取ると同時に無限を感ずる能あり、是れ其宗教心の依て發する源なり、此感情は吾人が知覺の始めより多少提携して起るものなり、然れども其感情が現實の意識と變じ則ち無限てふ觀念に達及するに至るは遙かの後にあり、人類が茫乎として無限を慕ふの始より、終に明白なる宗教的觀念に達したる種々なる道程を擧れば大要左の如くならん、彼等が無限を慕ふ心は、始め山川の如き多少之を觸覺するを得れども、全面は之を理會し能はざる所より、次に已に觸覺し能はざるも尙耳目に訴ふることを得る、譬へば

天空の現象の如きものに移り、次に見ること能はず、亦觸るゝことも能はず、只其結果のみにて知得する、暴風の如きものに及ぶ、而して最後に於て是等ハ悉く左の總念中に包括せらるゝなり、例せば光輝物(デワ)活物(アノユラ)不滅者若しくは不變者(アマルタ又アガラ)といふが如きものなり、而して此點に達すれば已に神てふ總念を得たるものなり、デワ若しくは「デウス」てふ詞は、吾人の祖先が觸覺の世界より漸々進歩して觸覺し能はざる世界に移りたるの形跡を明示するなり、其道程は自然の自示する所にして、若し自然は「デワ」の形装したるものとすれば、其道程は自然よりも高且つ大なるものを示したるものならん、古代の「アリヤン」人を嚮導したる舊道は今尙ほ吾人を嚮導するものにして、則ち已知より不知に入り、自然より自然の神に達するの道なり、宗教心の元始に人類は其希望の向ふ所に従ひ、神に附するに此性質或は此名稱を以てし、或時は彼の性質彼の名稱を以てするが如きことあるれども、其時に於ては其神を以て至高と思惟し、其神の外に多種の神ありて、其神を制限するが如きことあるは、彼等崇拜者の心頭に浮ばざる事實を見て、マックス、ムルレルは最古の宗教を呼で「ヘノテイスム」(一神教)と言ひ、之を純然たる唯一神教及發達した

る多神教より區別せり。譯者曰く唯一神教と一神教との區別は、前者を奉ずるものは其奉ずる神の外更に他神あるを信せず、常に之を崇拜す、後者は其時に於ては一神を信すれど、後に其代として他神を信することあり。

ユング、フランク、シュミットは右の説に反對して曰く、神の總念の根本は無有限てふ總念にあらず、寧ろ世界を支配する勢力と言へる觀念にあり、且つ鬼神論の神は無有限といへる總念を現はすに適當なる言語を見出んことを欲して、研究したる結果として之を解釋すべきにあらず、寧ろ神てふ總念の漸々進歩したることより、すべし。世界を支配するの力は始め自然の現象則ち自然全体なりと信ぜり、而して後には其現象中に存在する魂魄なりと信ぜり、最後には其上に位する靈なりと信ぜり、然れども始の二者の間には必ずしも明白なる區分ありしにあらず、何とせば古代の鬼神論に在ては自然の現象は、則ち魂魄を有する生物なりと信じたればなり。また其魂魄を現象より區分するに至りし時も、未だ以て靈の純粹なる總念には達し得ざりしならん、只之に據り神を人類同視するの道を闢きたるのみ、此神人同形は多少神の總念を靈ならしむる階段となりたるも、未だ以て其純然たる靈の總念

を去ること遠しと、ムルレルに對するシュミットの批評の全豹を見るに、余輩はこれ寧ろ前者の往時の議論に向て能く適中する所なれども、余が前述したる、ロツペルト口述中に含有する、ムルレルの最近の説に對しては其正鵠を失したるものと、言はんのみ、ムルレルの自言に、神は始に在てハ無限と唱へられず、寧ろ勝つべからざる不朽、不壞、不生、不死、遍在、全智等と呼ばれたり、而して夫の無限といへるが如き頗る抽象的の名稱は、却てこれ最後に顯はれたらんと、ムルレルは世人が彼を以て神を信する基は、無限に關する意識的觀念にありとするとの誤解を避けん爲に、明瞭に此事を分疏せり、抑無限なる者は、始めより意識的觀念として人の心に存したるものにあらず、唯一種の感情として其中に存したるに外ならず、必然人類をして始より觸覺し得べき世界の現象の裏面には、是等の現象の爲に束縛せられざる、靈の靈たる高等なる實在者の存在することあるを推測せしめたるは、則ち其中に存する超感覺的無限若しくは神性と言ふが如き合理的本能なりしこと明なり、然れどもマツクス、ムルレルの主唱せし學說にも亦欠點なきにあらず、彼は觸覺的觀察と言語形造の二者を以て、宗教心發達の大動機なりと主張し、却て他に一個の之が

大動機なる者あるを忘却したり。何ぞや、世界の高大なる勢力と宗教的關係を存せんと欲する人心の實際的動機是れなり。

此欠點はエドワハルト、フロン、ハルトマンの遺補する所となり。彼は明示して原始の人類に宗教の目的となるべきものを與へたるは、彼等が萬有に對する幼兒の如き頂是なき詩歌的の觀察也。然れども彼等が實際に是等を神と崇むるに至りしは、實際的必要に迫られて然るもの也。されば禮拜は神の信仰に基づく雖も、又其信仰をして眞實ならしめたる者は、此實際的禮拜の必要に外ならずと云へり。是れ實に確論なり。然れどもフロン、ハルトマンが禮拜の動機は、主我的の主樂主義にありと言ふに至りては、大に其議論の堅壁を破碎せり。此點に於ては彼の宗教起源を以て、拜物的の魔術信仰にありとするの實驗學者と同一なり。而して彼に此説あるは、彼がマツクス、ムルレルと同じく拜物拜靈の如きハ、決して原始の宗教にあらず、却て原始の宗教たる一神教(Henotheism)の崩壊後の出來事ならんと唱ふる點より見れば頗る怪訝に堪へざる也。ハルトマンは同じく一神教の名稱を用ふれども、其意味する所はムルレルと稍異なるが如し。彼は此名稱を以て太古の自然宗教は唯一、多神

及凡神教等の諸分子が、尙ほ渾沌として未だ彼此の間に、明白なる區別ありざりし情態を表はす者と思惟したるが如し。彼れ亦其本質上より言へば一切の神は皆同一なりとの説を持せり。

一神教なる名稱は、太古に於ける甚だ不明了にして、變遷極りなかりし宗教に冠せしむるに、果して適切なるやは頗る疑團の蟠る所なり。余輩は寧ろ夫のア、レフキレー(Reville)と同じく之を以て自然宗教(Naturalism)と稱するの妥當なるに如かずと信す。蓋し余輩の解する所に依れば、自然とば複多の現象中に顯はれたる單一の生活にして、即ち一にして多なるものなればなり。一神教の名稱は、夫の已に多神教を超越したるも、尙ほ邦土に依て制限せられたる唯一神教中の、或一種の形狀に冠せしむ方適當ならん。斯の如き宗教は多く、セミチツク人種中に散見する所にして、イヌアエムに於ては大に發達して終に世界的唯一神教となれり。アヌムス(Anum)が一神教の名稱中に、インド、セルマン人種中に能く發達したる多神教をも加へ、何となれば彼等の神は互に相變通して、或る時は此の神となり、或時は彼の神となりて、形狀一定したる鬼神論の多神教とは、大に殊異あればなりと言ふが如きは、堪る意見なり。

と言はざるを得ず。彼は宗教の起原を拜物にありとせしかば終にかゝる誤謬に陥れり。殊に彼が其持説を證明せんが爲に「インド、セム、マン」人種の宗教を引用したるは頗る怪訝に堪へざる所なり。何となれば其宗教は更に彼の學説の助援となるべきものにあらず。却てアルベルト、レフキレーの拜物教に關する評論はムルレル、ハツペル、シユミット、ハルトマン等の諸説と符合する所あるを見る。彼は拜物を以て宗教心發達に於ける第二段の現象なり。アニミスム (Animism) は之に先じて顯はれたり。然れどもこれ亦以て宗教の最古なるものと許すべからずと云へり。レフキレーはハルトマンの如く拜物は太古の宗教の腐敗し崩壊したるの結果と言はず。彼は却て之を以て太古の自然宗教の發達を助くるに於て、一個の勢力たりしと思惟せり。此論は當らずと雖も蓋し眞理に遠からざるべし。

右の學者輩は其議論の詳細に至りては、多少異同あるを免れずと雖も、其宗教起原を論ずる大脉に於ては、彼等は悉く一致するものなり。而して其議論は後段に余輩が陳辨する如く、多少變更を要する所ありと雖も、其全体より評せば正確なりと言ふを得べし。余が此問題に關する意見は、前述諸學者に先じ余が前著宗教歴史と題

する者の中に公にせり。當時彼等は未だ其持説を發表せざりしか若しくは其説未だ現今の如く明白ならざりしならん。マックス、ムルレルの如きも其前著當時彼の書中よ余の見たるものは只此の書のみなりきによりて見れば、尙太古の鬼神論は純然たる心靈的(唯一神)の觀念を、故意に標號的に現はしたりと思惟したるが如し。余が宗教學を研究する發端よりして、必然眞理ならんと認めたる所が今日に至り、ムルレルを始め其他の學者にして、苟も其眼を「ドクマ」(Dogma)若しくは實驗學の爲に眩惑されざる人儕の共に唱導する所となりしは、余が實に喜躍に堪へざる所なり。

宗教の起原を了知せんと思せば、須く先づ其研究する問題を正當に開陳するを要す。從來世人は此問題を講究するに當り、太古人は神に對し如何なる感想を懷きし耶、彼等は此名稱に如何なる意味又如何なる性質を附したる耶、又何故に此の性質を附して夫の性質を附せざりし耶等の事を尋ねたりき。然れども斯の如きは是れ豈に太古人は神若しくは神性と云へる如き總念を始めより自然に抱懷したると假定するものにあらず耶、而して其總念は那邊より得たりしやは何人も之を明告する

こと能はざるべし、而のみならず已に神てふ觀念は昔も今も異なる事なく同一の意義を有する者の如く思惟するにより、太古人が神に附するに類する劣等にして且つ不適當なる性質を以てしたるを見實に怪訝の念に堪へざる也、然れども一たび起原問題を確實に開陳せば、是等の難問は立ろに霧散すべし、元人類は如何にして神若しくは神性といへる觀念に達することを得たりし耶、彼等は如何なるものにより、又如何にして神則ち神性の觀念を其心に發起するを得たりし耶、かく開陳せば宗教起原の問題は已に科學的講究の班列に加り、其理法に従て之を解釋すべきものとなるなり、余輩は宗教心の發達したる道理を、稍確實に探究して其形狀を想像するを得べし、唯茲に注意すべきは太古人の神の觀念は、決して吾人が今日に有する神の總念とは同様のものにあらざる事なり、太古人と今人との知識の程度は其間天淵の差別あれば、其の神の觀念にも同じく霄壤の差あるを免れざるを記憶せざるべからず。

神の觀念の本は太古人が万有に對して喚發したる感情にあり、彼等の理性未だ發達せざるにより、其万有を見るや、宛も小兒蠻人及詩人等の如き稱心の想像のみを以

てせり、詩人は万有を以て意志智覺を具へたる活物の如く唱ふ、そは唯自己の想像によりて、暫時く活物視したるのみ、其實万有は決して活靈物にあらざる事を識辨すれども、太古人に於ては然らず、彼等が万有を詩歌的に觀察する時に於て、單に之を想像に基くものとせず、真に万有其物は活物にして感情、知覺を具備せりと信じたるが如し、これ鬼神論と單純なる詩歌との區別ある所以にして、前者が宗教の根元となりて、人類に其崇拜の目的とすべきものを與へたる所以なり、幼稚なる人類の想像は万有全軀を以て、悉く活物なりと思惟せり、彼等は百般の現象殊に運動ある現象を以て、人類若しくは動物等に擬したり、(彼等は未だ人類と他動物の間に區別を立つを知らず) 彼等ハ天地間の現象は、悉く其目的を以て運動する活物の所業なりと思惟せり、彼等は外界に於ける百般の現象を解釋するに、自己の熟知せる道理を以てせり、彼等は自己の動作は悉く皆感情意志等の動作に基く者なるを以て、直ちに之を外界に移し、彼處にて觸知する現象も、亦等しく其中に存する意志感情に基くの動作なりと思惟せり、遠隔なる現象を解するにも、其接近に於て觀察する事物を以て之に推及するものなり、凡て天に於て起る事情、大氣間の現象、天軀の運行等を見て、

地上に起るの現象を張大にしたるものと思惟せり。彼等は電光の閃々たるを見ては、巨大の火蛇が天空に躍り、或る時は雲端に隠伏せる天の軍隊が鉄鎗を揮ひ、劍刃をひらめかすと思惟し。霹靂雷鳴を聞ては、天上の大聲、軍隊の吐賦罵聲、車馬騾々の響と思惟し。或時は天の獅子王及犢牛の叫喚と思惟し。風の颯々として吹き荒ぶを見ては、天上の獵犬の吠聲、天を横ぎる雲行を見ては、彼等各自の職業に依て判断し、或者は天の牧場の牧者(大陽)が飼ふ、乳汁を與ふる牝牛、羊、羊仔、或者は之を以て漁夫の船、天の海に浮遊する鱗族、又は龍蛇の如き、白鳥の如きと思惟し。暴風の慘烈なるを見ては、其有益なると否とにより其判断を異にせり。之を有益なる點よりすれば、命を賜はる天と命を産む地との婚姻、若し之を有害なる點よりすれば、人類の好友たる赫燦の天と、黯黒の妖魔、深淵の怪物、人類に敵害する巨人、若しくは龍蛇が天を破壊せんとする戦闘の如きものと思惟せり。又大陽の如きは或時は天に眉く眼、或る時は黄金の車を驅りて天邊を旅行し、日々夕に西方に沈みて且に東天を破り、秋期は死し或は遠隔に征行し、陽春に至りて復活又は歸順する勇士の如く思惟し、大陽の生活の有様は、地上の勇士の運命の摸型と認めり。

是等の躍ける活物(デリス、アンネラ、アスモス)は太古の鬼神談の中心なるが、彼等は果して現實の神なりや否やの問題には、其意義に依て可否の答を得べし。彼等は自由なる人性的にあらず、彼等は自然を支配し或は獨立し、また人事に關係するものにあらず、彼等は其本質に於ても動作に於ても、未だ全く自然に牽束せられたるものなり。彼等と自然の現象とは同昧にして、別つべからざること恰も幼時の意識には、人、豚と靈とは同一にして其間に區別なきを見るが如し。故に太古人が之に附したる形状も一定不變にあらず、彼等太古人は或る時ハ之を以て人類の如く、或る時は獸類の如く、或る時は侏儒の如く、或る時は巨人の如く見做したり。然れども是等の形状は互に變轉融通し、且夕歳々隱見出沒生死離合するは、外界の現象の情態に依て然るなり。彼等の動作は未だ直接に人事に干渉するものにあらず、彼等は人類と等しく種族なる職業を營むもあり、漁獵するもあり、戦闘するもあり、戀慕するもあり、婚姻するもあり、是等千態萬狀の所作は、彼等自己の爲に計るものにして、未だ人界とは直接の關係を有せざるなり。生命及光輝が黯黒及死の力と常に闘争するは人類の爲にあらずして、自己の生存を全ふせんが爲なり。

太古の鬼神談に於ける是等の自然物は、果して神の名稱を附するを得るものなるや否やは、頗る疑しき限なり。然れども諸宗教の神は、元是等の光明ある靈物より来りしは、已に疑を容るべきにあらず、只疑問とすべきは、如何にして宗教的信仰及禮拜の目的たる神は、是等の自然物より發芽したりやの一事なり。之には種々なる道理あれども、其重なる一を擧ぐれば、禮拜に於ける實際的動機なり。固より是にも亦新難題の發するを免れず、是等の單純なる自然の勢力は、如何にして禮拜の目的たるを得たる耶。若し夫れ禮拜を以て後世に意味したるか如く、神に對する宗教的尊崇なりとせば、此問題を解釋すること頗る難艱に至らん。然れども太古の歴史を研究するに當り、其事實の指示する所に依て考ふれば太古の禮拜なる者は、甚だ單純にして能く當時の人の意識に適合するものなるを知得すべし。然れども單純なると同時に宗教的行爲は彼等を導きて、此最下等なる程度より高尚なる神に對する眞誠の信仰に至らしむるの橋梁となれり。

諸邦國に傳りたる最古代の宗教的禮拜は、世人の常に思惟する如く犧牲を供する行事、若しくは祈禱を捧げて神に己の願望の採用を懇請するが如きものにあらず、

かゝる禮拜には太古の鬼神談中に存する宗教心よりも、稍高尚なる發達したる宗教心を要する也。太古の禮拜は頗る淡泊にして、利己の分子を含有するは、後世に比較して稀少なり。若し利己て文字を使用するを得ば、當時の禮拜は寧ろ高大なる勢力の行爲を倣ひ、或は彼等の事業を助け、之と共に運動せんとするが如きものなり。多の人民間に存する婚姻の儀式は、夫の暴風の際に顯はれたる天の聖き婚姻に模擬したるものなり。獨乙人の間に行はる「ポルテル、アーベンド」(Polterabend)の如きは、此種の意義を含有すること明白なり。譯者曰く「ポルテル、アーベンド」とは結婚の前夜の事なり。「ポルテル、アーベンド」とは獨乙語にて喧囂噪雜の意なり。獨乙の成地に於ては結婚の前夜には、今尙かゝる荒騒の儀式を執行するといふ。又諸邦國に行はる夏至及冬至の祭禮の如きは、概ね光と命の神の死生離合を表彰するものなり。是等の祭禮は始は單純虚空なる表號のみにあらず、是等の神の運命に干與し、又は彼等の生存を全ふする爲の戦闘に助援するとの事なり。獨乙に今尙存在する「聖なる十二夜」の慣行の如きは、則ち此の類なり。又諸邦民間に行はる「春季祭」希臘人の神秘祭の如きは、全く太古禮拜の大意に基くものなり。又劣等なる宗教に於ける魔術

の起原も亦此に外ならざる也。例せば雨を降すの魔術の如きは、雨神が實際に行ふ所を表鏡的に模擬すること也。人の動作を以て神に助授するとの觀念は、獨り波斯亞及日耳曼の宗教に見るのみならず、多種の蠻族間に於て、之に類する慣行あるを見る。例せば月月腐蝕の時に於て、彼等は怪物の爲に禍危に罹りたる神を助授せんと、吶喊を擧げ矢石を投つものなり。又サモエデス人の説話を聞くに、毎旦毎夕太陽に向ひ跪て曰く、爾ち起ちたれば我も亦起つべし、爾ち已に沈まんとすれば我も亦休に就くべしと、これ甚だ質朴なる禮拜の方式なれども、則ち太古に於ける人の心を動かして、高大なる自然の勢力を崇拜するに至らしめたる理由を明示するものなり。則ち人は自己の生活を以て世界を支配する勢力の生活と、連環せしめんことを希望するもの也。犠牲の始の意味も此に外ならず、太古に於ける犠牲は神に向ひ賄賂を奉り、若しくは贖罪するの意にあらず、寧ろ神と人とが會食する謂なり。則ち此共同の喫食により、神人の連合同盟を全ふす。或は其中に世の爲に禍害を及ぼす惡の勢力と戦ひ、以て世の安寧を全ふせんとする神の精神を鼓舞する意義をも含有するものあり。例せば印度の「ソーマ」の供物(Soma-offering)の如きは此類なり。

歴史の表示する所により余輩は、已に太古の崇拜の性質を了知するに至りしが、之によりて考ふれば左の二個の事情あるを見る。第一は太古の崇拜は未だ道義的動機より發せざる者、如し、良心の激動其要求を満足せしむるの必要或は自己の道義的品性を鞏固にし、或は之を高尙ならしむる等の觀念は、未だ其中に抱懷せざりしを見る。蓋し太古の神の性質の劣等なるや、恰も太古人彼自身の如き有様あるに、より右の如き高尙なる觀念、未だ之に附するの餘地あらざりしならん。第二は宗教の起原を以て單に主我的の主樂主義にありとするは、是又誤謬の解たるを免れず。蓋し主我的の主樂主義に於ては、神を以て自己の慾望を遂ぐる機具として之を利用するに過ぎず。此主義は夫の拜物教の魔術信仰に於ては實際に行はる、所也。然れども余輩が陳述したるが如く太古の宗教は斷じて拜物にあらず、拜物なる者は太古の宗教の崩壞より發生したるとは、後に論述するにより尙は一層明白なるを得べし。若し已に是等の事情を承認して、尙ほ宗教の起原を純然たる主我主義に歸するは、これ豈に撞着矛盾の甚しき者にあらずや。若し之を假定せんには余輩は世の宗教に道義的進歩あるの事實を解釋するに苦む。何となれば不道徳より道徳の

發生することあるは、理の許さざるを知らばなり。抑進化とは其始に含有する種子が漸々發育して發露し來るものなれば、後に顯はるゝ所は、種子として其始に存せざるべからず、發達の終りに於て其始に反對するが如き進化は、余輩の到底了解し能はざる所なり。されば一旦宗教の起原を以て、純然たる主我主義にありとすれば、論理上是非とも宗教の進化は主我主義の彌々進歩し彌々發達したるものなりとの結論に至らざるべからず。然れども斯の如きは徒に宗教の價値を滅却し、其威光を消滅するに過ぎずとせば、吾人は宗教の起原は人類に存する理性の發現にして、決して不理の發現にあらざるを認めざるべからず。然ればとて必ずしも太古時代の單純なる宗教を、強て理想的に牽強するにあらず、亦之を曲て低下視するにあらず、唯其現狀を認めて之を判斷するを要す。

宗教の起原は余輩が陳辨したるが如く、之を人類の不道德心にも亦道德心にも尋ねべからず、單に之を其宗教心に於てすべし。則ち人類の心情中に、始は甚だ素朴なるも之に含有する感情は、後來大に發達したる宗教心の敬虔を形造するものなり。果して諸宗教の通有する種子は、人類が世界を支配する勢力と關係を有し、之と

交通し同盟せんと欲するにありとせば、余輩は太古の最劣等なる宗教心の中に、已に其種子の存在するあるを認むるを得たり。固より彼等が宗教心の目的とするは、觸覺世界若しくは自然界より明瞭に區別せられたる靈にはあらず、其目的たる所は目以て見るべく、手以て觸るべく活ける自然の勢力其者なればなり。然れども是亦單純なる觸覺物にあらず、現今吾人が意味する所謂單純なる物質的現象にはあらざるなり。何となれば太古人の意識に顯れ其宗教的動作の目的となりたる、自然の現象は彼等の眼には感情あり、意志ある靈を有すること、恰も太古人彼等自身の如し、只異なるは其力の大に彼等に勝れたる所也。然れども是等の勢力は、未だ絶對全能と言ふが如き性質を有したるにはあらず、是等は自然の現象と同一昧なれば、神の制限は是等の現象中にありて、又彼等に反對する勢力の爲に抵抗せられ其動作を妨害せらるゝことあり、彼等は自己の存在と、世界の鞏固安寧とを維持せんが爲に、斷へず其敵と戦はざるを得ず。太古人は此制限あるにも係らず、此光物及活物等には大なる力ありて、世界は之に依て支配せられ、意の如くに趣くものと信ぜり。固より當時稱する世界は其區域狹隘なり、是等の勢力は大に勝るゝものなれば、人

類の力に比すべくもあらず、人類は是等に逆ひて何事をも爲すこと能はず、唯是等と共に事を謀るの道あるのみ、故に是等の面前には彼等は常に畏縮して、大力者の前に無力者の戦恐するが如し、されども是等の世界を支配する力に向ひ、始より之に憑依するの感情ありき、何となれば諸の佳美、有益なる賜物は、悉く是等より得るは一目瞭然たる所あればなり、雨の如き、兎の如き、田野の豊饒、牧場の蕃殖等ハ、悉く是等の勢力の授くる所と信じたればなり、半夜闇黒の怪物に恐懼すれば、忽ち朝暁の赫射するを見て、百鬼千魔を退散する好友、或は守護者として雀躍之を歓迎す、冬時嚴寒、積雪世界を埋むる時に、生物の枯凋落零して死の餌食となり、人類食に乏しく生に苦むの時に、一陽來復、長閑なる春の光に遇ひ、彼等は雀躍して命の神が遠國より歸來し、或は死の束縛を脱して復活し、或は彼等及人類の敵と戦ひ、之を降伏せしめて世界の鞏固安寧を全ふして、今や凱旋したるものと如く歓迎せり、又彼等は暴風荒雨に接し、天地翻亂の街となり、惡鬼(Demons)巨人(Giants)チタン(Titan)等が、天の一方に雲霧を築き、天を襲撃し、地を破壊せんとするが如きを見て、彼等は恐懼措く能はず、又天上の軍隊が閃かす劍光は虚空の稲妻となり、吶喊は雷鳴となりて乾坤

を震動するを見ては、愈戦慄爲す所を知らざる時に、忽ち黒雲の一角破れて、黒雲の敵軍敗衄し、彼等の俘虜たりし土壤を潤す驟雨一瀉して、忽ち快晴玲瓏たる天空は其麗しき跡を顯はすに至り、彼等は耀き活ける天の勢力が、暗黒と死の勢力の來襲を排撃して終に全勝を得たりとして喜べり、斯の如く常に自己等の爲のみならず、人類及其世界の爲に苦戦したる、是等の恩恵ある勢力を見て、争でか之に憑依するの心を起さ、らん、彼等は天の勢力が勝を得たるは、これ則ち世界の生命と存在とを鞏固ならしむるものなれば、彼等争でか之に對し感謝の意を表せざらん哉、かくして彼等が日々目撃するが如く其幸福は、全く是等の恩恵ある勢力に依頼するものなれば、彼等争でか是等に向ひ其保護を請はざらん哉、又之と交通して連合同盟以て相救援するの希望を起さざるものあらん哉、故に彼等の主たり、保護者たる是等の勢力の意志を以て、其生活と行爲を支配するの力なるを認めざらんとするも豈夫れ得べけん哉、彼等は單に是等の高大なる勢力の前に恐縮し、或は之に憑依するの感情に加へて、少くも愛に最も近き感情を起したらん、其感情とは太古人には甚だ自然なる是等の恩恵ある勢力と交通せんとするの心なり、是等に從順するの感

情なり是等と交通同盟して始て幸福を感ずることなり是等の感情より發するは、其神の憤怒に觸れんことを恐れ、或は其神との關係の破るゝを恐るの感情也若し斯の如きこと起る時は彼等煩悶措く能はず故に其交通の破綻を復修し再び其親和を温めんとめ常に其犯罪を償ふに汲々たるなり恩義の感情は之を人類間に存する關係に譬へば小兒が親に對し士卒が將校に對し臣民が主君に對し個人が社會に對し國民が國家に對する感情に等しからん。

抑恭順心より發する感情は子女若しくは臣民には最大なる満足の本源なれば是等は則ち主我的の主樂主義より發せりとせざるを得ざる乎却て是等は神聖なる道義的感情の根元にして吾人の本性に存する神聖なる理性の衝動力の發現したるものにあらず哉吾人は之により主我的なる狹隘なる區域を脱し亦各個は其全体に服従するの義務あるを悟り合理的宇宙の秩序に従ふべきを悟らしむるものにあらず哉若し人類間に於ける恭順心果して斯の如きとせば吾人は宗教上に於ける敬虔も之と同様の性質なりとするも將た何の妨かあらん哉蓋し小兒が親に對する恭順心の本質を組成するものは畏懼、憑依、愛慕の結合したる如く宗教的感

情の本質に於ても同じく然るものなり古代の宗教的動作の本原は悉く此感情より發したるものなり故に若し小兒が親に對し愛國者が國家に對するの感情を以て主我主義に出たるものにあらずとせば宗教の起原も亦之を主我的の主樂主義とするを得ざるべし彼此共に人類の理性が感情となりて顯はれ、不理なる利己的の感情を壓伏するの勢力たるなり然れども人類間の關係に於ては、理性の或一部分が恭順心若しくは愛國心の如き實際的感情となりて發現するものなれども宗教に在ては純然たる理性則ち萬有を網羅し世界を整理する神の理性が人類の心に宿り之を支配し宗教的敬虔の感情に於て人類の心の最強なる動機となり世界を動す勢力となりて發現するものなり斯の如く人の心と理性との一致和合を稱して神の理性が人心に在て化身したりと言ふを得べしこれ即ち宗教の神髓ともいふべきなり故に宗教を以て心を離れたる理性に關するのみにして唯腦髓を以て思考せる單純なる理論に存すといふは抑誤れり宗教は單純なる理論のみにして決して實際に人心を感動する力を有すること能はざれども亦宗教を以て單に感情に關するものにて其根本に理性あるを妄却し感情的のみに價值ありて世界に有

益なる動作を爲すと思惟するは、是又誤謬の甚しきものなり。蓋し理性に基かざる感情は利己的に陥り却て有害となれば也。されば眞理は前兩極端の中間に立ち、心と頭腦、感情と理性の一致和合する所に存す。則ち客觀的なる神の理性にして、世界を統轄するの理性たるものは、人心に在て其宗教的感情と幾じ、其生活の勢力となる也。人心は元來不從順にして怯弱なれども、世界を支配する神の理性と合し、茲に始て其一切の感情及意志は、眞誠なる合理的に變ずる也。これ則ち宗教の目的なり、固より其情態の完全に發現するは宗教心發達の最高點に於て見る所なれども、其始よりして之が發育を促す隱伏したる衝動力となりて其中に存する也。太古人が世界を支配する高大なる勢力に對して、恭敬心の發したるは、其形態に於ては頗る不完全にして素樸なりと雖も、已に其中に眞誠なる宗教の觀念を含有するを見る。故に余輩が原始の宗教は、神の天啓に係るなりといふも、敢て不當の言にあらざるを信ず。天啓ハ方便なき直接のものにあらざり、一方には自然界に顯はれたる客觀的理性の動作あり、他方に在ては人心に存する主觀的理性の動作あり、此兩者は互に相應照するものにして、彼の刺撃は此の感動を發するものにして、此兩分子の合同

一致の運動により神の天啓は始て成就するに至れり。パウロ曰くそれ人の見ることを得ざる神の永能と其神性とは、造られたる物により創世より以來、さとり得て明かに見べしと。

宗教心の太古に於ける自然崇拜の線界を超越して、稍進歩したるは余輩が前に闡述せし如く、一方に於ては實際的禮拜の必要に迫られ、他方に於ては人智の稍發達したるに據る。人類が天の廣大なる勢力に對し、恰も君父會長等に對するが如き感情を以てするに至れば、不知不覺の間に是等の勢力に附するに、亦人類間の道義の關係より生したるの形を以てせり。是れ神を以て人類同形視するの濫觴にして、從來神に附するに動物の形を以てすること多かりしに、今は漸く變じて其動物の形は、人類同形視せられたる神の屬性となるに至れり。而して是等の神は始め其本質に於て種々なる動物と同一なりしなり。例せば天神の鷲、白鳥、犢牛、風神「アテキ」(Aten)の鳥、光神の蛇及狼に於けるが如し。人類が恩惠ある天の廣大なる勢力に對し、之を以て充分己を保護するものとして信ずるに至りし時は、彼等世上の種々なる困難の爲に、其守護神に憑るの必要に迫り、假令彼等が目に見へ耳に觸れざる時に於て

も尙是等守護神に向ひ救護を求むるや明なり、大陽を以て守護神と信じたるものは、其必要に迫れば、夜間と雖も之に祈禱し、雲神を信するものは、青天一塊の雲翳なきに於ても之に祈禱し、風神を信するものは、大氣靜謐なるに係らず之に祈禱するが如し、既に是等の神に向ひ其祈願を捧ぐれば、果然神は之を受理して、肉眼の其形を見る能はざるも、冥々の中に祈願者を守護すべしとの信仰は、彼等太古人の心に發したらん、此信仰は超感覺的なる禮拜の神と、之を顯はす自然の現象との間に明に區分を爲したる結果也。太古の詩歌的の自然觀には、是等の現象は、神の觀念と彼等に對する宗教的關係の基礎たりし也。去れば太古人の神の觀念をして、變遷常ならざる自然界の現象より分離し、以て不變、自由、獨個、超感覺的の實在者に至らしめたるものは、則ち實際的禮拜守護神の己と共に存在して、斷へず其保護を下すの必要なり、單言せば從來自然界を以て神と崇めたる信仰一轉して、今は則ち之を支配する主たる神を信するに至れり。

此進歩を促したるもの、他の一方より其道を開きしことあり、太古人は外界を以て己と等しき活物なりと信じたり、去れば尙未だ自身に在て靈と軀とを識別せざり

し間は、活物なる外界の現象にも其區別あるを認めず、されども稍其反察力發達するに至れば、自己に此區別を認めざらんとするも能はざるに至れり、然り而して此區別を爲さしめたる二個の實驗上の觀察あり、其觀察は彼等をして其理由を研究するに至らしめたり、又此實驗は互に相助け、以て太古の心理説を惹起し、而して其心理説は大に自然崇拜の上に勢力を及ぼし、大に之を變更せしめたり、今其一を舉ぐれば、人類及動物の死を觀察することは是なり、人の死するや、其温なる呼吸彼を去り冷なる遺體を見て、太古人は惟へらく、死者を去りたる生命は、必ず呼吸ならん、或は火若しくは火の如き氣ならん、是等は暫時肉軀に宿りて血液にありしならん、何となれば血液の流出すると共に、生命も流出すればなりと、然れども此氣の如き人の靈は其體を去りて何邊に止るやの問題に關しては、肉眼の觀察する所を以て之に答解を與ふる能はず、此問題を解するには多少抽象的反察力を要すれども、余聲はかゝる反察力は、未だ太古人の有するとは容易に信を置く能はざるなり、されば夫の、ユヘメリス派の如く、宗教の起原を以て魂魄信仰にありとするは、これ宗教心發達の前後を顛倒したる謬論たるや明なり、魂魄信仰の如きは稍反察力の發達

したる宗教心の結果にして、寧ろ宗教進化の第二段の現象なりと信ず、則ち太古の自然崇拜よりして、已に發達したる鬼神論の多神教に推移する橋梁たりしを
 肉體を離れて飛散したる魂魄は、如何に落着するやの問題に答ふる材料は、他の一個の觀察によりて得ることあり、即ち夢中に見る所の現象及熱氣に襲はれ、若しくは精神錯亂したるが如き時に、殆ど無意識に働く心靈的に顯はるゝ現象なり、固より夢中の現象ハ純然たる無意識的妄想の結果にして、決して現實ならざるは吾人には明々白々、更に疑團を挟むべきにあらざれども、太古人に於ては未だ此見識を有せざるにより、之を以て悉く現實なりと思ひしならん、彼等が夢中に見し所、聞きし所の實際に之を経験したること、覺めたる平時に異ならずと信せり、彼等夢中に遠國に旅征すれば、實際に彼所に到りしと信せり、然れども少しく反察せば、彼等自己の身體ハ、夜間寢床を離れ自宅を去りたることなく、復た此肉體を以ては到底僅々數時間に、幾千里の遠路を往來するの難きを知れば、彼等惟らく夜間旅行したるは、肉體を離れて獨歩飛散したる魂魄ならんと、彼等は魂魄が自己の思想中に旅行し

たりとせず、現實に其家より遠路を飛行せりと信せり、其速力の著しき所以は、魂魄は肉體の如き重量なく、その氣の如き性質に好適する精撰の形體を備へたる故なりと信せり、生者の魂魄にして斯の如く、時々眠れる跡を脱離して、獨歩世界を漫遊するを得るとせば、其死せる魂魄に於ても、亦然らざるを得ざるハ當然の理なり、唯無形自在に彷徨するは、生者の魂魄に於ては臨時の出來事なれども、死者の魂魄に至りては其常態ならんと、二に此結論をして一層確實ならしむるは、彼等が夢中に於て靈に死したる親戚故舊に邂逅し、その生前の如き姿を見て相共に談笑するを得たるの事實なり、彼等之を以て單に其妄想到發したるものと思惟せず、現實に彼等故舊に會合したりと信せり、然れども彼等は故舊の腐朽したる地下の骸骨を脱起し、夢中に遇ひしは、肉體を離れたる死者の魂魄が、自在に空中に飛遊し再び宿るべき家を見出すまでは、彷徨躊躇するものと信せしならん、
 死と夢とを實驗上より觀察することより、茲に太古の魂魄説、若くは魂魄信仰起れり、而して此信仰は彼等の宗教心發達に於て與りて大に力ありしと信ず、然れども余輩が既に詳論せし如く、魂魄信仰を以て宗教心の起原若しくは根本なりとする

が如きは、決して其當を得たるの説にあらざるなり。一たび人類が其身に於て靈と
 軀との區別を爲し、肉體を離れて尙獨立することを得る靈の存在を知るに至れば、
 (無論未だ純然たる靈の概念にあらず)其第一の結果として彼等人類は已に活物を
 りと認めたる、自然界の現象にも亦等しく目以て見るべき物体と、目以て見るべ
 らざる活靈との區分を立つるに至りしならんか、る宗教心の進歩は余輩が已に
 陳述したるが如く、亦大に實際的禮拜の必要に迫促せられしや明なり。宗教發達の
 始に於て余輩は甚だ有益なる例證を見るを得たり、此事は宗教歴史に於て常に顯
 はる、現象なれども、從來宗教學者の未だ深く注意を惹かさざりし所なり。宗教心發
 達には實際と理論、感情と理屈と常に相提携して運動し、相互に補益し其功を全
 するものなれば、余輩は此兩者中、孰を以て重とし、孰を以て輕しとすべきを發見す
 るに苦む也。

一旦太古人の宗教心が、自然界を目前するに活物を以てしたる段階を超越し、觸覺世
 界の脊面に尙ほ祖先及自然物の靈の世界ありとの觀念に達するは、これ則ち宗教歴
 史に於て各邦民の間に於ける、各個の特質に従ひ人類の宗教が分派流化せし時にし

て、或は秩序ある道義的の多神教となり、或は不規律に理想なき拜靈となり、或は
 「モノテイズム」(一神教)ともなれり。其始に同一の自然崇拜教が、分派して三様の發達
 を爲すに當り、當初は彼此の間、明確なる區別なく、三者並立の情態ありしが、漸次に
 離峙して終に判然獨立し、人をして單一なる本原より出たるを疑はしむるに至れ
 り。故に之を知るは、宗教歴史の大問題を解釋するの鍵鑰也。而して此種々なる發達
 を得たる原由は、蓋し太古人が自然の現象と、其中に存在する靈を區分するに當り、
 其區分せられたる靈は、新にして高尚なる道義的の性質を得ることあり。又一定の
 性質なく人類の専恣なる妄想の玩具となり、徒しく空影に歸することあり。此兩者
 中孰れとなるやは、其國民間に存する道義及社交上の關係如何に由るもの也。社會
 の秩序整ひ、風俗漸く善良に進みし邦民に於ては、自然より分離したる靈をして高
 尙なる超自然的道義及心靈的と變ぜしむるの準備方に備れり。蓋し人類が理想に
 長するに速れ、其崇拜する神も彼等と共に長ずるもの也。之に反して文明の道徳塞
 し、高尚なる生活の理想没落し、其神をして道義的理想的たらしむる準備なき國民
 に在ては、自然より分離したるの靈は、實際的の必要少く、爲に多種劣等なる靈、即ち

一定の性質なく、確固たる目的なく、合理的の意味なきもの、爲に、其位地を覆没せらるゝに至れり。かゝる劣等なる靈は專恣の意志又は恣に利害を與ふるの勢力を代表するに過ぎず、かゝる靈は既に素樸自然の情態より脱離したるも、未だ以て文明の道端に到るを得ず。却て退歩して墮落したる野蠻人の專恣主我的の意志を表號し、又は之が機具たるに過ぎず。去れば宗教の發達に進歩と退歩の別ある所以は、その之を奉ずる國民の道義心、及社交心の發達如何に係るや明也。

發達したる多神教に至らしめたる鬼神論に於て、只管に純然たる進歩の一點のみを認めんとするは、これ甚しき僻見と言はざるを得ず。此發達には兩側面あれば其一を忘るゝ時は以て全面を知ること難し。然れども余輩は今多神教に於ける進歩の側面則ち太古の自然崇拜教を蟬脱したる、進歩の側面より論起すべし。廣大なる自然の勢力たる神を人類同視したるは、宗教心發達の爲に大なる利益たりしなり。何となれば之に依て人性的の神は、人類の道義的生活と關係を有するに至り、神人間の關係も亦道義的となれり。彼等の意志及動作は元自然界の現象の作用と同一なりしが、今や人類社會の利害得失に關與するに至り、是等も亦高尚なる性質と

目的とを有するに至れり。始め單純なる自然の勢力たりし神が、今は一變して社會の秩序習慣等を代表するものとなれり。天の光若しくは大氣間の現象と同一なりし至高なる天の靈も、今は一變して君父の元形となり、世界を支配し審判する大主宰、及一切人類間に存する機能の保護者となれり。彼と同伴したる地なる女神は、妻女の保護者、彼等の權理職分の保護者、黯黒の百鬼を退治する光明神は、今や文華天啓、神人和合及詩歌的感情の源となれり。天を清むる風雷の女神、パラスは、一切の野卑魯樸を拂ひて、技術學藝の師となれり。斯の如く發達したる鬼神論、殊に、インド、セルマン人の鬼神論に於ける自然神は、其自然の性質と共に、若しくは時として其代に國民の文明の程度社交的生活に對する心靈的の意義を有するに至れり。

宗教心の高尚なるに従ひ、之に伴ふ自然の結果は、崇拜者の道義心の成長なり。神を以て法律習慣等の保護者と認めれば、之を犯すは神意を無みするものなり。神の設け給ひし神聖なる制度に逆ふものなりと信ずるに至れり。故に道義上の惡は同時に宗教上の罪となり、神は之を不問に措くこと能はず。若し之を悔ひ之を贖はざれば、神罰競面に下るを免れずと、かく神の崇拜も亦斬新にして深奥なる意義を有す

るに至れり、始め神と交り之と親むのみを以て禮拜なりと認め、而して斯の如きは果して爲し得べきことなるや、或は爲すべきことなるやの問題は、更に太古人の腦中に浮ばざりし所なりしが、今や然らず一旦神人の關係を全ふし、其間に平和的友情を保たんと欲せば、必ず神に對する人類の義務を果さざるべからず、若し誤て神の憤怒を來すが如きあれば、人は万事を抛ち先づ之を悔悟し、神に謝罪して昔日の平和的友情を回復せざるべからず、これ贖罪の觀念と此世行の起りし所以なり、此時より贖罪は獨り禮拜の中心たりしのみならず、亦人類の道義的生活に於て至高至要となれり、固より其贖を要する罪科は、始めは純然たる道義的のみにはあらず、崇拜の儀式を誤り、若しくは懈怠したる如きも、其罪科の一として數へられしが、尙此中にも高遠なる道義的の意義を含有することあり、眞に罪科の觀念と連環する恩義責任義務の如きは、道義的總念の根本にして、法律上及道義上の觀念は其本源を茲に存す、假令之に含有する事態如何なるも、神に對して宗教的恩義責任等の感情の存在する事實、夫自身は人類の社交的關係に於ける義務の感覺を造詣するに於て、甚だ重大なる勢力を及ぼしたるもの也、是等の關係を以て神の保護中に置き、亦

之を以て其神意に發したると認る上は、道義上の義務を冒すは、宗教上より贖を要する罪科にして、神の憤怒と責罰を蒙ると信じたるは、必然の結果也、殊に僞誓、親族の血を流し及客待の禮を破る事、其他徳義上の關係を毀損するが如きは、悉く宗教上の罪惡と認めらる、茲に至りて余輩が陳述し來りし、宗教と道德との密着なる關係ありとの説は、愈々鞏固なるを覺ふ、神を以て人類視するに至り、宗教と道德と相應接して好果を生ぜり、則ち宗教は道德の爲めに實跡を得、道德は宗教の爲めに其の根基を得たり。

右ハ單に進歩の一方より觀察したるが、眼を轉じて其反面を覗へば、人類同視せられたる神は、彼と共に其弱點及不徳をも分つに到れり、神人の關係愈々接近して親密に越くに從ひ、神の尊嚴自ら銷滅す、人類は己を神に倣ふを努めず、却て神を以て己れに倣はしめんとせり、彼等惟へらく、神も亦己れに等しからんと、而して之に附するに彼等の弱點と情慾を以てし、彼を以て專横、虛戻、復讐、嫉妬ある者とし、神は禮拜等の儀式を行ふて己を尊敬する虚禮を喜び、或は賄賂を要し、阿諛を好むこと、俗界の國王若くは權威者の如きもの、と信ぜり、これ始め淡泊なりし崇拜に異様の儀式を

混入し、神の好意を得て其恩恵に浴せん爲に、必須の用具となれり。若し之を犯すが如きことあれば、其罪惡は社交的の慣行及權理を毀傷せしより、一層甚しきものと信せり。而して靈拜の儀式愈々綿密に趣き、愈々繁雜を加ふるに至り、特に之を主宰する人あるを要す。これ祭司の階級世に起りし所以也。彼等祭司は是等の儀式を管理するの權理を専有するを以て得策なりとし、彼等は愈々之を繁雜ならしめ、普通人民の容易に關與し能はざるものと爲せり。されば神人の間に立て禮拜の儀式を司り、或は神意を開通するの職務を有する人を見て、彼等人民の眼中には、何時となく神の摸型と認め、彼等祭司の過失、殊に貪欲心、名譽心、權威心の如きは寧ろ彼等が代表する神に屬すると思はざり、是れ諸種の宗教に於ける、神の言行及之を崇拜する儀式に於て、多く嫌忌すべき形跡を見る所以也。

多神教に存する不潔なる分子は、余輩之を神人同形説の本質に歸するを得れども、又一方より大に之が助援を爲したるは、鬼神論中に含有する詩歌的の分子也。後世詩人の妄想の玩具たりし鬼神論も、初めは太古の單純なる自然に發生し來れる結果なり。神が人類同視せられたる時に在て、元彼等が有したる自然的の性質は、未だ

全く忘遺せざりしが、此時に及で古代の自然神の性質及動作は已に人類の理想に適せざるに至れり。然るに詩歌的の想像は、其動作を此機に逞ふせり。第一に自然神の動作及苦惱は、元彼等の存在に常に隨伴せる要素なりしが、彼等詩人は之を太古に於ける神若しくは神子の身に起りし歴史上の事實に變ぜしめたり。彼等は亦同一なる自然神の性質及其發現の狀態を分ちて、以て多種の神及半神の類を製造し、而して彼等の崇拜は、各種族及各邦國に於て多少其趣を異にする所あれば、彼等は愈々獨立なる諸種の神と認めらるゝに至れり。又是等の神の昔譚及其崇拜と國土との關係より、彼等の理想的歴史と、古代に於ける人類間の現實の事態、或は人々の歴史と相連環するに至り、古代の武勇談に於て、神話と歴史的昔譚とは殆ど分別し難く混淆されたり。斯の如く太古に於ける幼稚なる人類が、自然界の事態を詩歌的の説明に基く素樸なる昔譚より、幾多の神及神子の行爲、苦惱、戰爭、戀慕等に係る長物語を生ずるに至れり。一旦太古の神話が、詩人の手よ落ち其昔譚の材料となるに至れば、其進歩は宗教及道義上の觀念に基くよりは、寧ろ純然たる美術的觀念に依りしは甚だ輕易き道理なり。詩人は其昔譚を述作するに、如何なる事が果して神

の威嚴に適應し、或は民人の風俗に有益なるやを顧慮するなく、彼等の主義たる、快樂を興ふるものは、悉く真理なりとに基き、自由自在に其材料を使用したる也、然れども彼等は自己の行爲は、古代の口碑の示す所を真摯に採捨し、只其碎片を蒐集して、之を叙事體に編纂するに過ぎずと思惟せり、例せば天神の后妃は國土に従て其名稱を異にし、或る土地にては「ヘラ」(Hera)と云ひ、他の地方にては「アヲネ」(Dione)又は「イヲ」(Io)、「タ」(Teta)、「ダナエ」(Danae)、「オイロペ」(Europa)と呼ぶことあり、彼等詩人は惟へらく、是等の名稱は必然天神の女皇と、其寵遇を争ふものと名稱ならんと、天父は多の嬖妃を貯へたりしかば、終に詩人の口に依て面白き物語に誦はるゝに至れり、而して天地和合の關係に基く、古代の平淡無心なるも意味深遠なる神秘談は、詩人の爲に諸の陰謀、戀愛の詮なき説話と變じ、諸神及人類の親、法律及道德の保護者たる天神の威嚴に對し、實に不倫の極となれり、太古の神秘談には更に道德と無關係なりし天の諸勢力、今は一變して一方には可笑の昔譚に於ける不道德の主公となり、他方には高尚なる道義的の理想、及宇宙の道義的秩序の保護者となれり、唯此一例によりて考ふるも、古代鬼神論の發達に兩側面ありて、之を素樸なる太古の神秘談より比

し、或は進歩とも退歩とも、又は利益とも損失とも言ふを得べし、而して鬼神論中の神話は、實際的宗教の上より左まで直接なる勢力を及ぼさず、却て理想的宗教心中に含有する有益なる信仰は、大に人類の感情及思想を涵養し、世の文明の進歩するに有力なる機具たりしは明白なりと雖も、余輩は亦道義の分子を抱懐せる多神教は假令、へ多の欠點ありとするも、之を太古の自然崇拜教に比すれば、著明なる進歩と言はざるを得ず、夫の拜靈教の如きは、全く前者と反對なるものなり、世人時に之を稱して拜物教とすれども、これ甚だ不適當の名稱也、蓋し拜物は未だ定りたる一種の宗教と稱するを得ず、唯簡樸なる太古の肖像崇拜たりしのみ、余輩が陳辨せし如く、心理及歴史に照し考ふれば、拜靈若くは魂魄信仰の如きを以て、太古の宗教と爲すの説は、到底維持し難し、去れば此陳辨に加ふるに是等魂魄信仰の起原を積極的に解説するを要す、然れどもこれ既に充分論述し盡したれば、今余輩が方に爲すべきは、説來したる議論の結果を蒐集して、以て其結論を示すにあり、

多種蠻族中には、往古は高尚なる天神を拜し、其禮拜は頗る緊要なる位地を占めた

六十八

りしが、漸々劣等なる靈の爲に放逐せらるゝに到りしとの記憶は、今尙ほ明瞭に存在するは、余輩が前にも陳辨せし所なり。然るに多數の人は此事實を否定せんとすれども、決して否定すべきにあらず、却て其説明を要するなり。若し夫れ拜靈若しくは拜物を以て宗教の起原なりとするに至りては、余輩は到底右の事實を解釋すること能はざるべし。若し又純粹なる唯一神教を以て其起原なりとせば、余輩は少くも之が解釋に苦む也。然れども前述の如く自然崇拜を以て太古の宗教とするに至りては、之を解明するに容易なるのみならず、大に前説の鞏固を加ふると信ず。太古人が崇拜せしは、天の現象中光ある可燃物なり、彼等は未だ其中に觸覺的現象と、超觸覺的靈魂の區別あるを認めざりし。然るに彼等其崇拜する神は、固断なく己等を守護する必要に迫られ、一方に「死と夢との現象を反察し、爲に無體の獨立なる靈魂の觀念に達するを得て、始て此區分を爲すに至れり。彼等活潑なる自然物の間に此區分を別つに至り、忽ち祖先及自然物の靈魂の觀念に達し、其數次第に増加する傾向を生ぜり。是れ余輩が何國に於ても其文明の或程度に於て常に見る所なり。多神教に於て斯く人類視せられたる高大なる自然の勢力、則ち天、太陽、雷雲等の靈は

六十九

他の群靈の上に位し、從來彼等の有せる世界を支配する權能は、常に失ふことなかりき。唯太古に在ては彼等は單純なる物質的勢力なりしが、今や、一變して高尚なる理想的性質を有し、其權能を運用するの有機も、稍變更するに至れるのみ。拜靈教に於ては然らず、天の勢力の靈は漸々實際的勢力を失ひ、劣等なる群靈の爲に其位地を奪奪せられ、其脊後に按排せらるゝに至る。而して彼等群靈は人眼に觸れず、一定の性質なく、存在の目的もなく、唯彼等が有する神性と稱すべきは、冥々不可思議に運動する力なり。されば一方に於ては高等なる靈は、世界を支配する權能を掌握し、愈々高尚に、愈々理想的に、愈々合理的に、愈々道義的に變遷せしむ。他の一方に於ては、不理劣等なる鬼神の爲に、其位地を奪奪せらるゝに至りしは、果して何等の理由に由る乎。此疑問は拜靈教を研究する學者が、將に答解すべき點なり。然れども斯く明瞭に其疑問を開陳せば、其答の半を得たるに等しからん。余を以て之を見れば、宗教發達の異同は、全然其國民の文明進歩の異同と比準するや、已に疑點を残す所にあらず。法律整頓せず、公義心の未だ發達せざる蠻族間には、其社交的生活を支配するの通有力に飲るを以て、世界を支配する權能を有する、高等なる神

の勢力漸次に消盡するに至るは最も親易き理也。國家の觀念なく、文明の理想なき蠻族間には、自然界の現象より分別せられたる天の靈は、新にして道義的高尙なる性質なきを以て、其以前の物質的性質に交代せしむる所をければ、彼等亦世界を支配する機能を永續する道なきや必せり。文明の進歩に依て風俗を善良にし、情慾を抑制し、公共の精神を發揮することなく、個々人々、唯私利これ營むの情態に墮落したる種族に在ては、是等利己一逼の人々、若しくは家族の如きは、種族一般の崇拜する高等なる神より離隔せられ、隨意に其周圍なる群靈中より、各個の神を撰拔せり。是等の靈の力は、其動作に於て、一定の規律なく、亦道理に基かされば利己一逼に墮落したる人類の不法専恣なる心に、全く符合するなり。斯の如く高等なる神の崇拜より隨落したる記憶は、明に夫の「ヅールー（Zoolu）」と稱する黒奴間に今尙存すといふ。彼等の祖先は素「ウンクレンクレン（Ungkunkun）」と稱する天の靈を、大なる父として崇拜したりしが、後世に至り此種族一般の神は、却て個々の劣等なる群靈の爲に其位地を横領せられたり。彼等黒奴は此理由を説明して曰く、今に及びては始に歸ることなし、人は漸々蕃殖し亦所々に散亂せり、故に各個の家族は各其關係を有すれば、何

人も、ウンクレンクレンの家族に屬するといふものなからんと。未開野蠻人の宗教たる拜靈を解説する理法は、余輩が數々文明の歴史に於て見る所なり。則ち宗教の腐敗は道德腐敗の結果也。社會墮亂して各利己に汲々たるに至れば、神に對する信仰も亦分離し、個々の劣等なる靈を崇拜するの迷信に陥るなり。余輩は宗教墮落の歴史を追跡して、其根源は實際的の動機に歸するを認めれば、是より進みて其進行の理論的階段を發見するは、敢て難事にあらずと信ず。固より彼等蠻族が、高等なる神の崇拜より墮落して、劣等なる靈を信するに至りしは、決して一朝一夕の出來事にあらず。宗教の變遷は他事の變遷に勝り、幾多の階級順序を経て漸々其形を變するなり。されば劣等なる靈の崇拜が、高等なる神の信仰を壓倒して、其上に出たるも幾多の階段を經過せざるべからず。彼等劣等なる靈は、元來神と人類との間に立つ中保者たりしのみ、彼等は神の機能に頼りて、人界の事物を執掌するが故に、人類に接近し、其利害に關する頗る切實なること、恰も政府の官吏が人民に接するは、却て政府より親密なるが如し、人類は己を守護する神と直接に交通し、常に其保護の下に安せんことを望むものなれば、是等中保者たる諸靈は、容易

此希望を人類に満足せしめ得るなり、然れども是等諸靈と人類との間に、かゝる親密なる関係を存したるは、鞏固なる道徳上の基礎なき宗教心には、大なる誘惑となり、之が爲に墮落腐敗に陥りたるが如し、其情態は官吏と人民との間に於ける事情と較相似たる所なり、至尊若しくは高位の顯官に對しては、敢て容易に爲し易からざる事も、其屬官隸僕等に向ひ、之を試みるは甚だ容易にして、事變に遇ひては、人民は直ちに彼等に贈賄し、或は脅迫し、其他種々の方便を以て、我意に従はしめんとするは、常に目撃する所あり、斯の如く始の間は蠻族等も高等なる神に對して恭敬心を持したりしが、神の位地漸く諸靈の爲に尊崇せらるゝに従ひ、其恭敬心も次第に輕薄に傾き、各自の意向に適する諸靈に對しては頗る放縱なるに至れり、始め神人の中間に立ち神の爲に使役せられたる屬靈も、今は漸く其勢力を増し、終に神の位地をも横領するに至れり、彼等は互に制限し、抑制し、或は壓倒し、或は廢棄するが如きことあり、かゝる小主神等の勢力は右の如く分裂せられ、制限せられ、不規律に、不常住なるより、人類は彼等小主神を掌中の物となし、以て各自の放肆なる志望を遂ぐるの機具たらしめんと懐へり、茲に問題たるは如何なる方略を以て、是等神の

中保者を掌中に轉輾せしめて、其力を牽束し自己の用たらしむるやにあり、若し其方便を知れりと自信し、或は之を他に吹聴するものあれば、一般の人々には既に靈界の冥々不可思議なる勢力を自在に運用するの道を知る者なりと認めらるゝに至れり、これ世に魔術の起りし所以にして、一般人民が神を去り靈を信すること愈々熾なるに従ひ、魔術の信仰も亦愈々熾なるに至れり、最後に於て余輩は拜物と靈の信仰及魔術とは、何邊に於ても常に相關渉するの道理を容易に了解するを得たり、諸靈の力を容易に使用する最便の道は、或る形状の器中に密閉し、自在に之を運搬し、亦必要に従ひ何時にても其力を使用すべき準備を爲すにあり、之が爲め人々の周圍なる物体中に、何物か其中に靈の不可思議なる魔力と關係ありと認むるものあれば、靈を密閉するは其物を以て足れりとす、現今の詞を借りて之を形容せば、或る觀念の連合により物体を観察する者をして、何物か靈と關係ありと認め、若しくは其表號たるべきものあれば、直ちに之を以て「フェチス」と信するに至るなり、「フェチス」は靈拜に用ゆる人工の肖像の最も粗なる形も過ぎず、則ち超觸覺物の表號、或は彼等と不可思議の關係を有し、或は其住居となり、或は超觸

覺の勢力の媒介者、或は魔術の手段となるべきものなり。拜物は最古の肖像崇拜を
 れども、直ちに之を以て太古の宗教と爲すは誤れり。何となれば肖像は神と同一と
 認められたる事なく、亦始に在ても神を崇拜するに肖像を用いたることなければ也。
 太古の自然崇拜教は何の必要ありて、人工の肖像を用ひん、蓋し彼等の神は活々と
 して自然界に運動し、其現象を支配するものにして、其形状は常に崇拜者の耳目に
 觸るゝ所なり。唯後世に至り超觸覺的の靈を自然の現象より區分し、之を以て其裏
 面若しくは其上に位すると思惟するに及び、始て人工の肖像を用ふる必用を感ずる
 を見る。太古人は物質的の現象より區分せられて、殆ど據る所なきが如く、諸靈には
 必然之を宿棲すべき住所なかるべからずと思惟し、茲に「フェチス」崇拜の源を開け
 り。去れば拜物及拜靈は、太古に於ける神人間に立ちて、中保の役務を爲せし諸靈を
 崇拜する事より、漸々墮落して顯はれたる形状なり。未開にして道德大に腐敗した
 る蠻族に於ては、中保者たる靈の信仰は愈々増長して、全く高等なる神の崇拜を壓
 伏撲滅するに至れり。

第二章 上帝論

曩に宗教の起原を講究するに當り、抑人類が神を信ずるに至りし所以は、萬有の現
 象が太古人に與へし感得と、是に従て彼等に發揮したる感情、則ち是等の高大なる
 勢力と實際的關係を有し、以て相互の康安を全ふせんと欲する心より起りたる
 は、余輩が已に認定せし所也。元太古人が其信仰の目的となせしは、視覺すべき萬有其
 物なりしなり、彼等太古人は萬有を以て己等と等しく、動機に従て動作する活潑なる
 勢力と想像したるが如し。太古人は己等に於て未だ靈魂と物質との區別を爲し得
 ざりき。されば萬有にも亦斯の區別を附する能はざりき。彼等の眼中には萬有は、唯こ
 れ視、聽、觸の感覺すべき實在者の集合にして、其中に現はるゝ諸般の事情は、互に連
 環すると認めり、則ち萬有は彼等が禍福安危の繫る活潑なる勢力にして、恰も彼等
 自身が意志の爲に動作する如き、同様の勢状ありと思惟せり。當初彼等は未だ萬有
 の裏面若しくは其上に位する、一個若しくは數個の人性的實在者ありと思惟せざ
 りし也。彼等は唯萬有全躰を以て、實在者にして假令正しくは人性的にあらざるも、
 尙動機に従て活動し、世界を支配する權力を有すと思惟せり。彼等は未だ唯一と積

多との間を明白に區別するの力を有せず、萬有は、唯種々雑多なる諸現象の集合として彼等の眼前に顯はれ、彼等は其現象中にて、彼此の間に明白の區別を立つるを知らざりき、その出沒變化極なき情態を以て、一個の神性なる實在者及其生活の景状と認めたり。是れ未だ多神教にも唯一神教にもあらざる、全く不明確なる萬有崇拜なりし、然れども尙其中には後來諸種の宗教と變化し來るべき種子を含有せり。此種子をして顯然たる諸種の宗教に發達せしめたるは、理想及實際上の種々なる動機の共同力なりしは、余輩が前に陳辨したるが如し、太古人が肉體と靈魂とを區別し、或は形體なき靈魂の觀念を得るに至り、彼等は非觸覺的神性の實在者と、觸覺的萬有の現象とを區別するを得て、茲に始めて前者を獨立せしめ、以て萬有神をして人類同形視するの濫觴を開けり。此傾向は實際的禮拜に於て實驗したる、その崇拜する神に附するに、一層明瞭なる景状を以てし、其現在を以て一層切實ならしむる必要の爲に強固ならしめたり。一旦觸覺的萬有の現象より分離せられて、獨立なるに至るや、禮拜の目的なる神は漸々人類社會の利害に密接し、爲に舊來の自然的性質に拘で、若しくば其代として新にして高尚なる性質を有するに至れり。俗間に行

はるゝ發達したる鬼神的多神教は、宗教心發達の結果にして、固より太古の宗教に比し、大なる進歩の差ありと雖も、亦同時に弊害の相伴ふものなきにあらず。然り、進歩は則ち進歩なり、舊來の萬有神は道義的となり、道德的生活の理想若しくは其保護者となれども、而して宗教的思想は、人類に於ける高尚なる理想及感情の本源となれども、然れども神を以て人類同視せしは、彼等をして人類の有する制限及弱點に拉没したるの不幸なる結果を生ぜり。未開不文の邦國に於ては、此傾向を阻遏するものなかりしかば、其速力の度は愈々急激を加へ、單純なる太古の宗教は、意味なき空虚なる魂魄崇拜及粗鄙なる肖像崇拜に陥らしめたり（拜靈教及拜物教）。
 譬に是等蠻族のみならず、希臘人の如き若しくは印度人の如き、大に文明の域に達し、神の世界は其人界の文明を反射するの國民に在ても、人類同形の神は尙未だ種々なる不完全あるを免かれず。今其一二を擧ぐれば、數多の神は、互に相制限し、天の父と尊崇せらるゝ「ゼウス」の如きも、其無上權を始終全ふする能はず、時々他神の陰謀及暴行の爲に其志行を妨げらるゝことあり、あらゆる諸神は到底運命の力に服従せざるを得ず。「ゼウス」と雖も之に逆ふて自己の意志を貫く能はず、ホーメルの詩

中にも、彼の運命の定法を尋ねて自ら處せざるを得ずと云へり。若し其定法にして彼が志望に孤負するが如きことあれば、彼は悲酸し心を任げて之に服従せざるを得ざるが如きことあり。然れども此運命の觀念を以て、太古の唯一神教の敗殘なりと認るは太だ誤れり。運命は人性的にあらず、亦合理的の意志にあらず、則ち妄妄なる勢力なり。然れども此觀念に存する感情は、或は世に萬有を網羅する客觀的必然、則ち特殊なる意志の上に位して、世界を支配するの理法に基くものならん。諸神の意志の如きも、唯各個專姿なるものなれば、必然其理法に服従せざるを得ざる也。夫の一元論者が夥多の神を、全一(All-one)に歸せしめんとするに當り、多少此總念に訴ふるを得べし。又俗間の神には道德上の欠點あり、神の嫉妬てふ觀念は、後世のソフキスト派(Sophists)懷疑論者の構造したるものなれば、始より鬼神論中に存在したるにあらずるも詩歌的鬼神論に於ては、諸神に附するに種々なる人類の弱點、情慾を以てし、彼等の行爲中には神の行爲として不都合なるもの鮮少ならず。故に道義心を有する人は、到底是等俗間の神を以て、自己の道德の純潔なる理想と爲すと能はざる也。

多神教の神の情態と、神性の完全てふ觀念との間に於ける不權衡は、深思家をして多神を排し、唯一なる無上の觀念に至らしめ、彼等は之を諸神の上に位する一個の最高なる神に求め、或は凡神的全一に求めたり。多神教を超越する此二個の道は、印度及希臘の兩國に於て、齊しく學者の採取する所となれり。印度に於て唯一神教的の傾向は、常に其痕を絶つことなく、或時は此神を以て無上と崇め、或時は彼神を以て無上と推したりしが、最後に無上權は、ブラガバチ(Brahma)と稱する造化の主に歸するに至れり。希臘に於ても詩人及哲學者は、ゼウスを以て有ゆる神の上に位せしめ、彼の名は殆ど唯一神教の神に等しき光榮を有し、他の諸神は恰も、パイプルの宗教に於ける天使の如く、神の意志の機具又は發現たるが如きものに零落せしめたり。此傾向と同時に「インド、セルマン」人の思想に有する、一元的傾向も顯はれ、哲理上より夥多なる萬有の現象を、唯一なる原理則ち萬物の基礎となり、萬物を網羅する唯一の實體に歸せしめんとする運動を創めたり。印度人ハ之を稱して大なる自己、又は世界の靈といふ、此靈は同時に人の自己及祈禱の靈にして、則ち、アトマン(Atman)及バラハ(Barahma)也。希臘の哲學者ゼノファネス(Zenophanes)パルメニデス(Parmenides)は之

を稱して、一にして同時に善なるもの、單一、不分、不變なる實在者、又想念にして其他に、世物の存するなしと、此凡神的世界觀 (Weltanschauung) は、即ち通俗多神教に反對して起りたる自然の結果として顯はれたり、哲學思想の漸く發達するに従ひ、其全力を擧げて唯一てふ觀念を唱ふるに至らしめたるは、俗間の多神説に對したる反動の結果なり、然れども是れ亦抽象的に過ぎ頗る偏隘にして、其中に當に神と世界とを區別するの餘地なきのみならず、漸々一切の區別をも排除するに至れり、加ふるに多神説の自然的基礎は尙ほ神と世界とを凡神的に同一ならしめたる哲學中に存するを見る。

印度及希臘に於て自然的凡神教より、無宇宙論、無神論に推移したる形跡を見るに、彼我共に同一轍に出で、其類似の様甚だ面白きものあり、彼我共に始は唯一の原理を以て元種子の如きものにして、多の元素を以て成立する現實の世界は、之より發射せりと思惟せり、然るに唯一及不變なる實在者といふが如き總念を、嚴密に講究し來り、終に複多にして變化あるものは實ならずとし、現在の世界は唯不實の現象、無知の幻影なりと主張するに至れり、是れ夫の「ウエダント」 (Upanishads) 及「パルキニ

デス」が等しく唱導せし所なり、若し世に唯一なる實在者のみ存在し、其物は完全にして永古不變とせば、何を以て觸覺の幻影若しくは無知に基く、不實の現象あるを解説し得べき耶、此疑問に對しては、「バラマ」の哲學も、エレアチック派の哲學も、共に一の答解だも與へざる也、故に印度に於ても希臘に於ても、現實の世界を以て虚空の幻影なりと主張しつゝ、其理を自ら解釋し得ざる抽象的一元論に反對し、抽象的多元説なるもの勃興せり、則ち無宇宙論に對し無神論なるもの起りたり、此兩論には各二個の反對點あり、第一は無宇宙論の唯一なる實在者に對し、無神論の複多なる實態を以てす、サンキヤ哲學に於ては、此實態を心靈的に解して、數多の靈と云へり

希臘の細分子論者 (Atomist) リニッポス (Leucippus) デモクリトス (Democritus) は之を物質的に見て、數多の細分子と斷せり、是等の細分子は不生不易の實態にして、恰もヘラクリトス (Heraclitus) の唯一なる實在者が多岐に分れたる如きものなり、其狀恰も「ウエダント」の唯一なる世界の靈が分散して、「サンキヤ」哲學の靈に變形したるが如し、第二は無宇宙論に於ける唯一なる實在者は、永遠靜寂にして萬古不易なれども無神論に於ては一切の實在者及實態は極りなき變化流轉の中に消滅し、剩す所

は唯其現象の流轉のみ此流轉に於て唯一なる永久不變の要素は相互の關係の理法若しくは因果の必然的理法あるのみ印度に於て佛教勃興して、バラマの絕對なる實在者に代ゆるに、絕對なる無實體的變化の理法を以てせし時に、エペソのヘラクリトスは、エレアチツク派の全一なる區別もなき運動もなき硬頑なる實在者に代ふるに、夫の萬物流轉則ち現象の無窮に變化轉轉するの事を以てせり。此變化轉轉の中に起る反對及衝突は、則ち現實の世界を組織するもの也。此無窮の變化中に唯一なる永存の要素は、唯神性なる理法、運命、通有の理性若しくは世界を支配する神のみと云へり。然れども若し現象流轉の上に位する、實體の本性の唯一なるものなしとせば、余輩は此世界を支配する理性は、果して何物に歸するを得る耶若し之を以て絕對なる主觀者の想念とすることなくば必然之を以て相對的主觀者の想念に索むる外其道を見出す能はず。然らば此理法は相對的不規則なる想念たるに過ぎず。斯の如く前陳の兩論互に相破壊し、其偏頗を顯したる結果として、茲に、ソフ 井スト派の懷疑的傾向を生ぜり。彼等の説を聞けば、人は萬物の尺度なり、一切の真理は唯主觀的相對的なるのみ、神に對する信仰の如きも、必竟人爲の構造及口禱の

結果たるに過ぎずと、懷疑説にして未だ全く神の存在を非定するに至らざりしも、彼等は神には人事に關與するの力ありやを疑ひ、甚しきは彼等神に善ありやをも疑へり。其結果は神の存在を否定すると更に異ならず、例せば夫の有名なる神の嫉妬といへるが如きは、必然紀元前五百年の比頃に、ソフ 井スト派の唱導したる所なり。希臘の、ソフ 井スト派に等しき懷疑説は、佛教の起りし時代に印度に汎く流行したるを見る。佛教の如きも實際に於ては、神及來世の問題に關し、稍懷疑的の位置に立てるが如し。

印度人の思想は元來強健の質に乏しく、動もすれば想像に漂流するの傾あるを以て、前述兩極端論(無宇宙及無神)を超越すること能はず。若しくは彼此共に正當なりとする無頓着なる懷疑の位置に止るを甘ぜり。之に反して希臘人の思想は、ソクラテス派の哲學に於て、一層深遠なる境域に進み、純潔なる神の觀念に達するを得たり。ソクラテスは世界の秩序肅然亂れず、自ら其中よ意匠の存するを見て、其原因たる者は必然全智十善なる實在者ならざるべからず、其理性は吾人の理性を超越すること、恰も神の住居たる世界の容體が、吾人の身体に比して遙に莫大超越するが

如し、其攝理は大小となく萬物を網羅し、一切の事物を開導して吾人に利便あらしむ、吾人は其開導に絶對的に服従すべきものといへり、彼は俗間多種の神を否定せず、却て是等を以て世界を統御する唯一なる神の政治を執行する傳達者と見做したり、プラトーンも亦其師に倣ひ同一の方針を取りしが、彼ハ一層深く進入せり、彼は神を稱して至高の理想にして、實在及知識の究竟なる基礎又は同時に究竟の目的或は善なりと云へり、プラトーンの説に従へば、善てふ觀念は世人が神に附する品性を量る眞誠なる標準なり、固より嫉妬の如きは、神の善と隔離すること遠し、善は自らを人に分與するを好み、一切人生の爲に最善なる道を量り、彼の智慧は萬の事物を整理するに、最も有益なる方法を以てす、彼の公義は善惡兩道共に酬はざれば止まず、彼の歡心を得て彼の同伴となり、共に交通し得るは其善なる點に相似たるもの而已と、神の性質及其動作につき右に述べたるプラトーンの見解は、頗る純潔にして彼の宗教的觀得に一層光彩を添えたり、然れども是等の品性と至高理想てふ總念とは、之を調和するや頗る難事也、蓋し至高理想の如きは、最も通有的にして實在にも知識にも兩ながら超越するものなればなり、かゝる極端なる抽象に於ては、あら

ゆる品性故に道義的の品性をも亦空虚茫漠の中に消盡せられたり、其中には獨立して存在する現實の主觀なければ、是等品性の附着するものあらざるなり、アリストートルに至り神の總念明白となれり、彼の説に依れば神は第一の原因にして、あらゆる運動は之より發す、彼亦曰く神は最大の善なり、あらゆる變化は之に遠するを以て其目的となす、神ハ完全、純粹なる活動にして其中には、一の苦痛も變化もなく、亦更に物質に憑依する所なし、神の目的は自己にあり、彼は總念中の總念也、神の完全及萬福は自己中に不變不動に安息する此自念中にありと、アリストートルの神は純粹なる心靈的にして、事物と隔離し遠く俗界の上に高懸して安息するや、其れ斯の如し、夫の超然神論の神に於けるが如く、更に世界と現實の關係を有する能はざるものとなれり、余輩は到底かゝる神を以て世界の原因と認る能はざるのみならず、是と實際的宗教上の關係を有することも能はざるべし、この抽象的超然たるアリストートルの神は、人類の爲に實際的の用なきこと、更に、エピキユリアン(Epictetus)の神と異なる所なし。

然れども此欠點は一般ソクラテス派哲學に伴ふ制限を顯はすものにして、此學派

の強點は唯心的にあり、然れども對峙説は則ち其弱點なり。唯心説により、ソクラテス派の哲學は、大に神の觀念に進歩を與へ、第一に彼等は明瞭に神の純然たる心靈的なるを教えり、是より從來俗間の神の觀念に附着する、觸覺的及心靈的兩素の混淆を絶滅せり。ソクラテス以前の哲學には、此兩素の混淆は其要部を占めたり。されば此混淆を絶滅したるは、ソクラテス派の哲學思想が、哲學上に與へたる一大偉績に相違なしと雖も、而して其唯心論ハ心靈的宗教の爲に最も有力の準備たるに相違なしと雖も、其缺點は靈を以て現象的世界に反對し、若しくは之と相容れざると思惟し、却て靈は其世界を支配するの勢力なるを認めざりしにあり、かゝる抽象的觀念に依て漸く進達したる神の觀念は、唯單純なる抽象的にして最も通有なる觀念純然たる總念たるに過ぎず。これには己を支配し乃至世界を支配する、靈に存する活潑なる實體を欠けり、而して此實體は單に論理的抽象の道に依て得らるべきにあらず、必ず現實上の經驗を要するなり。故に、此唯心的哲學は他の方面、則ち宗教上の實驗より來りし神の觀念を整理し、亦之を潔白ならしむる爲に、甚だ有益なる批評の標準を與へたりと雖も、未だ其觀念に代て立ち、或は其觀念を自ら産するの力を有せざる也。これ原造的動作に依て宗教心を満足せしむる能はず、又半死半生なる俗間の自然宗教に交代せしむべき宗教を與ふること能はざりし所以也。

此欠點及之を自ら補辨し能はざる事情は、早くも、ストイック派及、チヲ、プラト一派の感識する所となりたるもの、如し、彼等は哲理的辨想と、俗間の鬼神論とを混同せんことを力めたり。ストイック派の神に關する教説は、其本質に於て殆ど粗鄙なる凡神論に等しく、彼等はソクラテスの唯心論以前に逆流して自然論に陥りたるの傾あり、神は原物質又原勢力なり。原物質としては神は火の如き實體にして、各種の要素と變形するに至り、自體より現在の世界を發生し、再び其火熱を以て世界を回復す、原勢力としては、彼は活潑なる靈、理性、理法、攝理等なり。後世のストイック派は大にプラト一の感化を受けたりしかば、彼等の教説に於ては、神を勢力とするは大にその物質と見るに勝れり、彼等が神を見るや、唯一神論の神に於けるが如く、神は人類の善を遂ぐるを目的とし、世界を整理統轄するの靈なり。然れども、プラト一及アリストテールの如く、神をして現世界の反對に立てりと思惟せざりき、寧ろ神性なる理性は、世界に在在し、世界の運行を指導し、亦神性に等しき人類理性の原理なりとは、

これ則ち、ストイック學派の要領とする所なり。彼等は神と人とは互に相連環する同性を有するとの持説なりしかば、プラトニー派と等しく、神人は親子にして人類は同胞なりと主張する基督教の爲に、恰も其前備を爲したるものなり。プラトニー及アリストーテルの如きは、俗間の諸神を目して、詩歌的の想像物と認めたりしが、ストイック派は彼等を以て唯一なる神性の力の特別なる發現の景状なれば、第二流に位する神なりと云へり。蓋し彼等の哲學に於て、神の理性は自然界の現象中に含有せられたるとの説あるに基くならん。彼等は懷疑説及エピキュリアン學派に反對し、俗間の宗教を辨護するの位地に立ち、俗間に行はるゝ鬼神論は合理的なりと保庇するを力めたり。固より彼等は時々鬼神論の意味を變更するに、大膽なる作爲的の比喩法を用ひたりき。彼等をして此方針を取らしめたるは、嘗に其祖先の口碑及慣行を重じたるが故のみならず、彼等は之を以て宗教心に於ける缺乏を充さんと努めたり。蓋しプラトニー及アリストーテルの哲學は、神をして人智の遠及し得ざる遠隔に放逐したるが爲に、時の宗教心は之に満足すること能はざりし。彼等は彼の世界と此の世界との交通を爲すに、其中間に立て彼此の間を周施する、中保者の必要を感

ずるの宗教心を満足せしめんと力めたり。ネヲ、プラトニー派は、ストイック派に勝りて、此欠點を補充せんが爲に、尙前者よりも離隔たるが如し。固より彼等ハ其哲學プラトニーに基き、彼等の神は遂に人類界を超越し、人智の遠及し能はざる遠隔に在し、不_レ限定、不可思議なる實在者にして、想念及感情二つながら、之に達すること能はざるものなれば、宗教心の缺乏を感ずること尙一層切實也。故に彼等惟へらく世界は原實在者より、諸種の階壇を経て發射したれば、吾人が之に達するも、亦俗間の宗教に於ける中保者及其他の方便に頼り、順次に其道に至らざるべからずと、通俗宗教の神は、則ち神人の間を中保する鬼(Demon)なり、彼等は神人の交通を全ふし、或ハ之が準備を爲し、人をして神に達するの便利を得せしむる者なり。ネヲ、プラトニー派は其全力を擧げて、唯心哲學の最も抽象的總念と、通俗自然宗教の最も粗鄙なる信仰及儀式とを調和せんが爲に、其内部の連環物を作爲せんと力めり。故に其教説たるや、實に一種奇異なる混淆物にして、余輩は其中に古代の宗教と哲學とが、兩々破碎したるの一大活劇を見る。

萬有の神と總念の神とに代るべき、唯一神教的の信仰は、既にイメラエルの宗教に於

て成熟しつゝありし。此民にも唯一神教的の信仰は始めより存在したるにあらず、太古一般の宗教及天啓に基く口碑、又は「セミテック」人種の本能力の結果にもあらず、即ち此信仰は苦心經營より得たるものにして、此邦に於て數百年間神の人及神の民が、幾多の辛酸苦難を經過したる永き歴史の結果なり、而して其始は伯來人種が「ヤーフエー」(Jehovah)と稱する神を信仰したる國民的「ヘノタイズム」にあり、夫の「モーゼ」(Moses)は、之を以て狂悖にして諸邦を攻掠せし牧畜人種間に行はれし法律、制度と關係せしめしが、其始は他の種族、殊に南方に於ける「セミテック」人種と同様なる「ヘノタイズム」と、密着なる關係を有したりき、漸く「イスラエル」の豫言者により、素と國民的制限を有したる「ヤーフエー」の信仰は、長足の進歩を爲せり、彼等豫言者は「イスラエル」の聖者の威嚴を、唯其國の仇敵に向て顯はれ、之を罰する恐るべき勢力のみと思惟せず、一般の「イスラエル」人は之を以て斯の如き者と思惟したるも、却て重に「イスラエル」の内外を問はず、諸惡を罰する道義上の正義にあり、亦嚴密に其民を淘汰したるの後に於て其の約束を成就するにあり、而して此淘汰の爲には万國民をして其幫助たらしむるにありと思惟せり、斯の如く人類の歴史に於て、道徳の聖法

及道義上の意匠の存するとの觀念は、これ豫言者をして國民的の觀念より、世界的の觀念に達せしめたる者なり。然り「ユダヤ」教は豫言者の手に依り、大なる進歩を爲したるも尙ほ未だ全く國民的の制限を脱する能はざりき、「ユダヤ」人は「ヤーフエー」を以て、「イスラエル」と特別の關係を有する神と認めしのみならず、彼等は亦異邦人民の崇拜する諸神をも、未だ全く虚偽なりとは思はざりし、素より「イスラエル」の神に比すれば其力の劣等たること萬々なり、「ヤーフエー」は則ち神の神なり、彼と他の神との關係は、恰も國王と其候伯の如き關係なりと思惟せり、これ當時に於ては、實際的唯一神教的の信仰を全ふするに充分なり、又豫言者は人類歴史の將來に於て、萬邦民が「イスラエル」人と共に、「ヤーフエー」を唯一なる眞神と崇め、之を崇拜する時期あることを豫示せり、將來に於て「イスラエル」の神が世界の有ゆる勢力に打勝つとの希望には、必ず唯一神教的の信仰が結局人類間に勝を制するとの確信を含めり。古代の豫言者が有したる神の觀念は、未だ全くは心靈的にあらず、彼等は神を以て其形狀に於ても、亦心情に於ても人類に等しきと思惟せるを以て満足せし痕ある

は、決して蔽ふべからざる事實也。然れども神を以て人類に比したるは、「イスマラエルの神の觀念が、他の「セミテック」人種の粗鄙なる萬有神に、遙に超越するに至りし方便なりき。」セミテック「人種の自然崇拜は、數々神の形狀を動物に擬するものありき。然るに今や豫言者の手により、「イスマラエルの神は道義的意志を以て世界を支配し一切の被造者の弱點及不潔を超越せし聖者、其力は恐るべく其道義上の潔白なるは、更に一個の汚點なきとの觀念に達せしめたり。固より神の至聖てふ觀念は、始に積極的道義の要素を含まず、單に被造者に對する消極的關係を表彰するに過ぎざりしが、これ尙ほ常に神人同形説を隨伴せる弊を避くるに充分の效ありしが如し、「インド、セルマン」人の中にて、其萬有神が人類同視せられし時に至り、必然之に伴ひたる人類の弱點及不徳の分子を、神性に混入したるが如きは、「イスマラエルの神に加ふべからざる事なりき。蓋し「ヤーフエー」は聖者なるが故に人にあらず、亦人類の如く軟弱、感觸、情慾、無節等の分子を有せざるなり。これ神が人類の罪及無節を怒りて之を罰し、其好擇せし民に向ひ常に忠實にして寛容なる所以也。彼と「イスマラエル」人との契約上の關係に基く、神の觀念中に於ける忠實若しくは寛容の如き、則ち自ら進みて人類と交通を結ぶに至らしめたる彼の眷顧、善徳、恩惠の如きは、則ち神の靈の威嚴に對する半面にして、以て其全面を補充するもの也。豫言者中の最も大なる輩の心には、神の性質中の此兩側面は、常に密着に混淆して、容易に其輕重を分別するよ苦む。

「バビロン」謫寓後、「ユダヤ」教に於ける神の觀念には、前述兩側面中にて神聖なる超世界的の威嚴最も其重を持するに至れり、これ夫の「シナゴク」(「ユダヤ」の會堂なり)の神學に唱へし所なり。而して茲に至りし所以のものは「バビロン」謫寓中、「ユダヤ」教が異邦の多神教に對し、其特質を維持せんが爲に、嚴正なる反對の地位を有したるも、其一なれども、一方に於ては豫言者時代に屬する、活潑なる天啓感識の全く消失して、其信仰が漸く儀式的に陥るの傾向を生したるに由る。又一方より見れば、太古の神人同形及神人同情の分子を排除して、神の觀念を心靈的ならしめたるには與りて力あり、然れども同時に神をして抽象的遠隔に放置し、歴史に於て彼の動作を繼續すること、併せて彼が人類の間に活動して啓示を爲すは、到底考ふべからざるものとせしめり。而して此缺乏を補填せんとして、「ユダヤ」人は、神の屬性及其發現の情態等の人性視せら

れしものより種々なる中保者を形造せり、則ち神の智慧、詞榮光 (Shechinah) の如き是れなり。此に至りて「ユダヤ」人の思想は、希臘哲學の結果として現はれし「プラトーン」及「アレキサンデリア」に於て「ユダヤ」の宗教と希臘の學術が邂逅するに至り、「ユダヤ」教の超世界的神と「プラトーン」の至高理想なる神と混和し、亦「ユダヤ」教の中保者たる智慧及詞と「プラトーン」及「ストイック」派の主張したる世界形造者「ノウス」(Nous) 及「ローゴス」(Logos) と混和するに至りしは、自然の結果にして余輩が「フッロ」の哲學に於て見る所あり。然れども總念の世界より發したる影の如きものは、到底活神を景慕する人心の渴を醫するに由なきは、「フッロ」の哲學を見ても明なり。苟も是等にして人類の宗教心を満足せしめんと欲せば、必ずや歴史的動作、苦難及犠牲を有する、人生の温なる血に依り、生命と同一を賦與せらるゝに非ざれば能はざるべし。

耶蘇は古の豫言者の轍に倣ひ、「イメラエム」の聖者を以て彼の父及吾人衆生の父なりと教えたり。彼は神の愛を其心に實驗したれば、天國の方さに近にあるを知れり。彼が唱へし救の詞、彼の動作、苦難等により、其天國を世に顯はし之を建設せり。故に基

督教の信仰に於ては、古の豫言者が有したる神の總念中の兩側面を一層純潔なる形を以て結合せしめたり。第一の側面は神は超世界的神聖なる心靈的にして、自己の外更に憑依する所なく、亦有ゆる感觸の制限、故に國民的制限をも、絶對的に超越するもの也。第二は神は己を世に顯はし、人類中の最も卑賤なるものと交通和親せんとする愛、此愛の歴史的救の動作は、自然界に顯はれたる意匠よりも、意義に於ても價值に於ても、遙に優れる連環と意匠は、人靈の道義的生活にあるを顯はせり。故に神の總念に就て基督教は、異邦の宗教又は「ユダヤ」教に對しても全く斬新なりき。多神教の神の斷離、感觸的及凡神の茫漠空虚に對し、基督教は神の唯一及其道義上潔白なるを以てせり。「ユダヤ」人の狹隘にして傲慢なる信仰に對しては、神は世界を網羅し人心の深底に入りて、其要需を満足せしむる神の愛を以せり。此斬新なる信仰が之を顯はすにも斬新なる形狀を穿索し、當時文明の許す限の材料を以て、訖辨其要領の滿溢したるを顯はさんと努めたるは、蓋し避くべからざるの事なりき。希臘教會に於て三位一體の諍論は、近世の嗜好に甚だ適合せざるものなれども、或る皮相論者の言ふが如く、之を以て強ちに無用の贅論なりと放棄するを得ず。此諍

論は神の愛の歴史的な代表者たる中保者に神徳の充溢したるものが形體的に之に宿りしを見、亦之に依て人性と神性と交通和親するとの確知を得んと欲する宗教心の必要より起れば、此必要は兩つながら正當なりと言はざるべからず、然るに之をして新なる多神教を現出する基とならざらしめんには、須く基督の中に顯はれたる神、及び教會中に降り其信徒を感化する神（即ち子及聖靈）とは、天外に隱匿せる世界の基趾、造化の神（即ち父）とが同一躰なることを教義上より確定し、以て多神教及抽象的唯一神教に陥るの弊を拒がざるべからず、略言せば三位一躰の問題は、神の超世界的性質と内世界的又獨り自己中に存する事と、人類の歴史に入來せし事、又自然界の合理的不易の秩序に現はれたる神の必然的想念と、人類の救の爲に顯はれたる、救の歴史的動作及基督教會の進歩的救の生活に於て、自己を顯はす神の愛の自由の意志とを調和せんと欲するにあり、此兩側面には内心の結合をかるべからず、則ち此目的を遂げんと欲するの正當なるは、何人も疑問を置かざる所なり、然れども同時に之に對する基督教會の解釋の甚だ不完全なりしは決して之を拒否すること能はず、而してその何故に斯の如くなりしやを覺るは、敢て難事にあらず、蓋

し此解釋の事業には到底解除すべからざる撞着の分子を有する假定當初より附帯したれば也、則ち一方に於てはプラトール以來の定理たる神は、絶對的に單一なれば、其中には一の特異及限定をも許さず、故に神の性質より悉く眞實の生活を除去したる事、他方に於ては神なる「ローゴス」(Logos)と、耶穌の歴史的「ペルソナ」(Person)とを同一視するより、神の中の特異を著大ならしめ、殆ど三位一躰とは唯其作用若しくは實在及發現に就て言ふにあらず、寧ろ獨立なる三個の主觀、若しくは「ペルソナ」ありしとすに至りし也、教説上より此問題を解釋せんと試みたるものは、皆悉く此大なる撞着の爲に破碎し終れり、此時より基督教會の神に關する教義は救ふべからざる撞着の蜚集する所となり、則ち絶對的單一なる神にして、其中に一の特異若しくは限定をも許さず、亦一個の屬性をも明了に客觀的性質として附する能はざるが如き觀念と、他方に於ては、唯一なる神の中に三個の「ペルソナ」なる眞實の特異ありと唱ふる、三位一躰説との衝突撞着是れなり、教會の或る親父等(Fathers)は三位の區別を心理的に解し、神の智慧及意志の如きもの、區別なりと主張したれども、これ亦類似或は不實の比喩たるに過ぎず、かゝる企圖は何人も熱心に之を遂げたる

ことなきは、これ當に教會の基督に關する教義に撞着するのみならず、亦大に當時の神に關する教義に撞着する所あれば也。夫のプラトールが主張したる存在以上に位する單一の實體及アリストテールの純然なる活動の如きは、神の實在と其知識、其意志及其動作等の間に更に特異あるを許さず、徒に神をして空々漠々に歸せしめたり。煩瑣學派の名目論は此唯心説に反對したれども、これ亦一方の極端に陥り、その主張せし神の絶對的專恣の意志は、有ゆる永遠の眞理、故に道德の眞理を滅却し、亦善をして神の意志の告示に基く、偶然的の定法に墮落せしめ、以て神若しくは人類の本性と内心の關係を有することなきに至らしめたり。

名目論者の神に關する總念は、斯の如く非道義的にして「カトリック」教會の有ゆる迷信を維持する補助となりしかば、「プロテスタント」の神學者は大に之に反對し、再びプラトールの主張したる神の總念に歸反したり。オーゴスティン (Augustine) スキートス、エリゲナ (Scotus Erigena) トーイマス、アックサナス (Thomas Aquinas) を追跡して「ルター」派教會の神學者ゲルハルト (Gerhard) 及クレンシュタット (Krenstedt) 輩は、神の性質をして甚しき單一不動となしたれば、之を以て人性的實在者と見做すは愚か單に生けるも

のどさへ見做しがたきに至らしめたり。かゝる神の總念よりしてスピノザ (Spinoza) の實體に達するは、僅に數歩を剩すのみ。スピノザの實體には、意匠を設るの總念も意志も非定せられたり。何となれば是等は他の限定と等しく、神の無限てふ總念に撞着すれば也。スピノザの實體は無限は無限なりと雖も、是等の限定を非定せられたるが爲め、其空虚なる無限の中には、千狀萬体なる人性的及歴史的の生活の世界も影の如く消失せり。教會の唱ふる「プラトール」派の神の總念と、スピノザの絶對的一元論若しくは無宇宙論ハ、右の如く親密の間柄をれば、夫のシュライエム、ハル (Schleiermacher) は、スピノザの議論に基けるも、尙ほ教會の教義に近接したる教説を設け、教會の口碑の尻保中に於て宗教心には、甚だ不満足なる神の總念を建設するに至れり。

無限實體の抽象的一元論は、常に抽象的有神論と親しく提携するもの也。此抽象的有神論は「デイズム」 (Deism) 即ち超然神教と呼べり。蓋し右の欠點あるを以て、夫の眞誠なる唯一神教と區別せんが爲なり。超然神教は神を以て、想念あり意志ある至高實在者とすれども、之を遠隔に放置し、遂に世界の上に超然たるの威嚴を附し、一方

に於ては世界をして神に對し、全く獨立なる存在及動作あるものと思惟すれば、神は殆ど世界中の相對者と、同等の位地に立つが如き有様に陥る也。彼は全く己に憑依せざる世界の進行を、徒に袖手傍觀し、宗教上にも更に要用なきに至り、只時々奇跡を行ふて其自ら活ける事を表彰するに過ぎず。夫の「ソニニ」派(Socinian)の神の總念、ライプニツ(Liebniz)ウルフ(Wolf)等に基く文華、及カント(Kant)ヘンペルト(Herbart)等の正理論の神の總念は、則ち此類也。かゝる不活潑にして沈靜なる神より、想像の結果たる不實の神に達するは、僅に一步を剩すのみ。世界の統御者及立法者ハ、唯原始に於て要用なりしのみ、而して之を以て自己の外更に憑依すべき基址なき道義界及自然界の秩序を、單に人性視したると爲すや、敢て難きにあらず。果して然らば、これ唯自負自尊なる人類の心の主觀的妄想或は反照たるに過ぎず。斯様なる抽象的超然神論は、容易に「パンコスミスム」(Pantheism)及無神論に變ずること、余輩は歴史に徴し、カントの超然神論よりフヘテラーの唯心論に及び、フオイエルバ(Feuerbach)の「アンソロヂクスム」(Anthropologism)に移りたる事跡を見る、之と等しく英の超然神論より、佛の自然論に進み、而して現今の實驗哲學に到りたるが如し。

單に絶對なる實体あるを知りて、活潑なる主觀あるを知らざる抽象的單元論(凡神學的)と、單に至高主觀あるを知りて、絶對若しくは無限あるを知らざる抽象的有神論(超然神論)は、兩ながら偏頗の議論にして、彼此交來融通せり。右に關する近世哲學上の問題は、神の總念に於て一元論の絶對なる實体と、有神論の無碍的(Unconditional)の主觀とを、統一結合するにあり、これ夫の深奥なる大儒ベームー(Boehme)が朦朧と知了し得たる所なりき。然るにセルリング(Shelling)バアデナ(Bader)クラウゼー(Krause)ヘーゲル(Hegel)の輩は近世の論理法を以て之を結合せしめんと力めたりき。然れども彼等も亦論理的唯心説に拘泥したれば、ヘーゲルに至り終に「パンロヂクスム」(Panlogism)に陥り、其論法の行流に於て、神と世界を溶解して一に歸せしめたること、恰も希臘のヘラクリトスに於けるが如し。而して其結果は彼の學派に於て其師の意向に逆ひ、實体の變化的主觀は無神的「アンソロヂクスム」(Anthropologism)に陥りたり。セルリング及バアデルの卓見は能くも此病痛を看破し、論理的唯心論は意志實体論を待て始て其全を得、又無限なる主觀は有限者に對して、其原因と假定せざるべからざることを主張せり。然れども此觀念も終に彼等の神秘的神統の超然説の爲に、

其成熟を全ふること能はざりき、現今の哲學は是等の誤失を避けんが爲に、先づ意識の中に存する諸の事實を仔細に講究し、之より類證して其結論を得るを力め、神の總念より先天的に世界を構造せず、寧ろ自己に關する吾人の意識及世界に關する吾人の意識より論起し、神の總念に於て吾人の智性は、世界の基址及解明を得、又吾人の心情は其欲する生活の目的を得て、兩ながら満足すべき統一を索むる也、各其道を異にして、其結果も尙ほ未だ實驗中になれば、多少不確實を免れずと雖も、神の智識に關する問題を講究したる學者の多數は或る傾向に於て業に已に一致したりと云はざるべからず、則ち有神論と一元論との調和是れ也、グロウゼー及パアデルは、之を稱して「パネンハイム」(Pantheism)と云ひ、セルリングは之を實體的唯一神論と云へり、これ則ち神の總念に關する「セミテック」入種の超世界的と「インド」ゼルマン」入種の在世界的とを、萬物の上になり萬物を通じ、萬物の中なる基督教の神の總念に於て結合せしめんとする位地なり。

余輩は已に神の信仰の起原より、其歴史的發達の重なる景狀を追跡したりき、左れば是より其信仰の客觀的眞理なるを證せんと欲す、固より此信仰に附帶する一切

の觀念を論ずるにあらず、唯其主眼なる要處をのみ舉げんとす、又た神の觀念は專恣なる觀念若しくハ人心の軟弱に發したるものにして、人智の開發に従ひ消失すべきものにあらず、却て神の觀念は吾人が意識中の主要必然の景狀也、吾人は是に依て自己に關する意識と、世界に關する意識の統一を見る、これ吾人が理性は自ら唯一にして、また唯一なる理法に従ひ思慮するものなれば、必然之を索めざるを得ざるを示さん、去れば是より吾人が爲す所は、世に所謂神の存在の證據也、此證據は時々其價值を異にしたり、現今に於ては世に頗る冷遇せらるゝ所あり、或人は之を以て全く不必用なりといふ、何とせればかゝる證據は、未だ神を信するの心を人には、全く無効力なればなりと、或人は之を全く成立し得べきものにあらず、何となれば吾人の實驗以内の事實より、到底天外無何有に存すといふ世界の本原に達すること能はざればなりと。

余輩を以て之を見れば、當時の潮流たる證據論冷遇は、世人が唯其弊害の一端を見て、其善美をも併せて放棄する大早計の一例なりと信ず、之を冷遇するは證據論に於ける頽瑣學派の外裝と、其中に抱括する貴重の想念との區別を識辨し得ざる爲

めなり。苟も人類の歴史を重ずる心ある人は、左の一事に依るも此證據論の忽緒輕視すべからざるを悟るに至らん。凡人類が自己の直接なる宗教心を反察し得るに至れば、其形状は異なるも、必ず此證據論を提出せざるはなかりき。而してカントの批評あるに係らず、證據論は常に人類の心を占領して止まざるハ、これ至當の事なり。固より之を以て心情の信仰を發生すること能はず、亦其目的も茲にあらざるなり。唯其要とする所は、信仰と思想とを調和せしめんとする。吾人が理性の必要を満足せしむるにあるのみ、殊に現今の如く世界に關する合理的觀察と、心情に基く信仰とが、動もすれば衝突するの時機には、吾人が理性は自己の統一を保持せんが爲に、此衝突を調停するの道を索めざるを得ず。若し此調停なき時は、實に理性の満足を得ざるのみならず、亦心情に發せし信仰をも全ふすること能はざるべし。若し此證據の不可能なるにつき、彼等の言ふ所、如何なる點に於て正當にして、如何なる點に於て誤謬なるかは、節を追ふて詳論する時に明白なるべし。夫の實驗超越若しくば相對的思想の制限といへるが如き詞は、何時も實際の効力あるものと思惟するに足らず、總て思想の動作は直接なる實驗を超越せざるはなく、是等は唯思想の

爲に感觸的の粗なる材料を與ふるに過ぎず。總て通有性總念、殊に學理思想根本の總念たる理法といふが如きは、有得的(Conditional)の現象に超越する無得的(Unconditional)のもの也。又思想の動作中に於て各個の事物に對し、有限を明了する時は、己に有限的の制限を超越して、有限の思想と共に其對念たる無限の總念を其中に包含するもの也。カントの批評哲學は、己に歴史上の事實となりしが、彼の詞は未だ是等の問題に關する結局の言にあらず。故に哲學は彼に依て其局を結びたるが如く思惟し、事々物々彼の教權に訴へんとするは抑誤れり。殊に神の觀念の客觀的たるの問題に至りては、彼は徹頭徹尾自家撞着たる也。彼が實理批評に於て論せし所は、其純理批評に唱へし所と大に相反するものあり。余はヘルデルと共に批評學の元祖を尊ぶ正當なる道は、彼をして新ドクマ(Dogma)の教權たらしめず、寧ろ彼の批評學を批評的に適用するにありと云はんとす。

神の存在の證據の實際に歸着する所ハ、始め人類が感情的想像的に神を感識するに至りし其行路を、思想中に追跡するにあり。若し人類の歴史に理性あるを許さば、吾人は宗教思想の歴史に於て、之を發見せんとするは正當なる事也。理性の特質は

自己を覺知するにありとせば、其歴史に於て直接に行ふたるの事情を、思想に於て之を追跡し、以て其歴史上の業は自己の業たるを知るは、必ず理性の爲し得べき所と信ずるを得べし。蓋に神の信仰の發達を評論せし時に、余輩は之に二個の起因ありと云へり。則ち一は自己に關する意識、他は世界に關する意識なり。而して後者は想像的に之を観察したるものと、思想的に之を観察したるの二種を含有せり。前者は、セミチック人種に専ら勢力を有し、後者は、インド、セルマン人種に勢力を專にせり。而して基督教の神の信仰ハ、恰も此兩者の折衷平均なるもの、如し、何となれば伯來の宗教心と、ヘレニック人種の宗教心とは、其發達の源泉互に支離する所ありと雖も、今や基督教に在て二線同して、唯一を形造するに至ればなり。斯く神の觀念の歴史的發達は吾人をして其觀念の眞理を證するの道を明瞭に指道するもの也。原由論 (Cosmological argument) 及結局原因論 (Teleological argument) 其間密着の關係ありて、兩ながら吾人を施て世界に關する意識より、種々雑多なる偶然的現象中に存する、唯一絶大なる心靈的勢力に達せしむ。道義的證據論 (Moral argument) は、吾人の道義的自覺により、前述の心靈的勢力は、吾人に向ひ道義的必然、或は自由の理法と

して顯はる、善と同一なるを示す、最後に本體論 (Ontological argument) は、ヘーゲー (Hegel) と、世界の關係より其唯一の基趾に達せしむるなり。此二個の意識中、自己及世界に關する意識に、此基趾の觀念の進入するは、之を唯一和合せしむるものにして、則ち神の觀念となる也。是等の證據論中の第一第二原由論及結局原因論の議論は、インド、セルマン人種の神の意識の特質に好適し、第三(道義的)の議論は、伯來人種の宗教心に適し、第四(本體論)は、基督教の神に關する意識に適す。是等諸種の議論は互に連環し、後者は前者の假定に基き、前者は後者に依て、補填せられ、兩々連鎖して相救ふを以て其目的を達し、其結果愈々深遠愈々著明となるなり。

アリストテールの主張したる最古の原由論は、世界の運動より其第一の發動者に推及せり。教會の親父 (Fathers) 等も其論法悉く之と大同小異なりき。ウルフの學派に至り多少此議論に變形を與へたり、其說に依れば世界の事物は皆悉く偶然的にして、其充全の原因は事物其の物にあらず、故に世界の必然的原因は之を天外の神に歸せざるを得ず。カントハ之に對して二個の異論を提せり。第一抑も原由の理法は單に現象の世界に適用すべきに、之を以て世界以外に存する第一の原因に應用

百八

するは、これ理法の誤用なり、第二世界は偶然的なるが故に其必然的原因は、之を世界以外の最も完全なる實在者、則ち天外の神に索めざるべからずとの假定は之を證明するの道なし、何となれば世界の各個の現象は偶然的にして、他の現象の爲に限定せらるゝも、必ずしも世界全体にして、斯の如く其原因自己以外にあらざるべからずと主張するを得ず、世界は實に必然的にして、其原因自己中に存するといふも敢て不當の言にあらざるを信ずと、是等の異論は稍正當なりと雖も、未だ以て原由論の眞理を打破するに足らず、寧ろ余輩の爲に其論法をして一層明確ならしむるの道を開きたるに過ぎず、夫れ世界は偶然的特殊物の偶然的集合也、故に此原因を世界以外に要めざるべからずとの假定は、實に之を證明するに苦むのみならず、不當の議論たるや明々地なり、却て世界は秩序整然、理法圓滿なる總體にして、其各部は互に連環して破るべからず、其各部の實在及動作の原因は、他の各部との關係則ち全體の綜合的秩序の中にある、世界の現象は、吾人をして直に天外の原因に達せしめざるも、彼等を唯一なる總體の部分として、互に連環せしむる理法及連鎖は、吾人を驅りて其原因世界以内にありて、總體の理法秩序の基址たるべしとの結論

百九

に至らざるを得ざらしむる也、世界を智識上より觀察して要求せられたる右の結論は、敢て原由の理法の否定すべきに非るを信ず、然り、若し其理法の總念に含有する所を考察せば、其結果は余輩をして右と同一の點に達せしむるを知る、抑原由の理法が第一に主張する所は、總て變化ハ先行變化の必然的結果にして、後行變化の必然的緣由也、原由の理法は世界の諸現象を、時間及空間の中に結合する、破るべからざる連環を顯はすなり、然れども此現象の總體も亦一個にして、必ず其始ありて其發端は、世界に存する各個の事物の變化と等しく、外より來りし先行の衝動力の結果なりとするは、原由の理法の示さざる所、寧ろ彼の理法はかゝる假定に撞着するものゝ如し、何となれば若し世界總體にしてかゝる衝動力の結果とせば、必ず其發端ハ時間の中に於てせざるべからず、されば世界の存在せざる以前に、已に時間ありしを假定せざるべからず、然れども世界を爲したる原因は、其原始以前に存在すべきもの、若し然らざれば現世界の發生すべきの理由なし、故に世界の原因は現世界の存在以前に於て、已に結果なくして獨り自ら存したるものと云はざる可からず、然れども斯の如きは、假令如何なる意義を其の原因に附するも、到底原由の理

法に撞着するを免れず、されば原由の理法は吾人を率て、世界以外の原因に到らしむることなし、何となれば其の原因を要むるといへる世界の發端其物すら、亦決して證明し得べきものにあらずれば也、これ則ちカントの批評中に含有する眞理なり、原由の理法は實驗し得べき世界の中に在て適用すべきも、之を世界以外に應用すべからずとの議論は此點に就ては正當なりと信ず、然れども此論法を以て吾人の思想ハ、吾人の實驗を以て得たる粗なる材料たる世界の現象以外に超越して其超感觸的基趾に達する能はずとの意なりとするに至りては、前者と全く異なる所あり、吾人の思想にかゝる制限を附するは、原由てふ總念に於て己に破れりと云ふを得べし、此理法は吾人が知覺の直接なる目的として、現象中の何物に依て直ちに之を實驗し得る耶、或は現象より抽象したる吾人が智識中に存する諸現象を連環する單純なる主觀的規法なりとする耶、カントは此理法を右の如き主觀的に見做したること明なるが、かゝる主觀的概念は、之を論理的に考察するも、若しくは百般學術の基礎たる點より考ふるも、原由の理法てふ實際的總念には決して適應すべきものにあらず、吾人が普通に解する所に依れば、原由の理法は現象の連環中に存す

る客觀的必然にして、原因結果の關係中に存する主觀的必然に應答するもの也、若し諸種現象の間に存する必然的連環の思想、これ則ち原由の理法てふ總念なりを、一層綿密に講究せば、吾人は下の如き結論に到らざるを得ず、余輩は將に問はん、抑甲に於ての變化は、直ちに乙丙丁の上に必然的に變化を生じ、亦是等の變化の形狀は、全く其先行變化の指定するに由るを以て一旦其理を悟れば、吾人は第一に興へられたる原因より、之に伴ふ諸結果を豫測し得るが如きは、如何なる理由より來りし耶、若し之に答ふるに、唯甲乙丙丁なる活動ある諸勢力の本質然らしむるにありと云はば、余輩は固より其理を知ると雖も、これ未だ此問題を解釋し得たるものにあらず、却て之を一層遠奥に運提し去りたるに過ぎず、何となれば若し是等流動ある諸勢力にして、元と互に連環する所なき複多の物件とすれば、如何にして彼此の間に其感動を授受するをる耶、或は彼に起りし原動は、一定の反動を之に惹起するを得る耶、是等は甚だ了解し難き點なるが、殊に其難中の難とも稱すべきは、かゝる無數の原動及反動は、何故に世界をして渾沌たる形狀に陥れず、秩序整然たる總躰を組織するに至りしやの疑問也、而して是等の疑問を解する道只一あるのみ、則

ち無数の活潑なる勢力は元と複多なる獨立の現實體、若しくは實在者にあらず、唯現實なる唯一則ち原勢力の異種異様に發現したる景狀也。此原勢力は宇宙間あらゆる特種なるもの、基礎又は各特殊者中に於て、他と共同連環して動作せしむる連鎖なり。單言せし、其理法たるものとの假定を爲すにあり、夫の原因論の目的とせし所は、則ち此理法に達するにありて、固より世界の偶然たるより之より推論するにあらず、寧ろ世界總體の性質を組成する理法に依て然るもの也。

世界の配置に意匠あるを見て、その之を設けたる者に推論するを結局原因論といふ。これ往古にもソクラテスより「ストイック」派に至るまで、諸種の學者が慣用せし論法なり。カントは之を稱して最も舊く最も明に、最も人類の理性に好適する議論にして、常に世の尊敬を受くべき價值ありと云へり。然れどもカント及其他の輩も之に對ひ、頗る重大なる異論を呈せり。結局原因論は獨り事物の形式を論ずるに止りたれば、唯此形式の原發者、世界の建築者あるを示す而已にして、其造物者に達する能はずとの難問には、多く注意を置くに足らず、何となれば若し此點に於て欠くる所あれば、それは先の原由論に依て全く補填するを得たれば也。又實驗に依て考ふれば、

世界には常に有益の事物ある而已ならず、之に反對するものも少からずとの難問は、神を人類同形視し、其動作は宛然人類が諸の目的を定めて之に達せんと欲するが如しと思惟するに就て、頗る難題なれども、これ未だ以て其議論の要所に對するものにあらず。去れば之に關する最要の點は、吾人が萬有を結局原因的に觀察するに、果して正當なるや否やの點にあり、萬有を以て斯の如く觀察するは、これ豈に單純なる主觀的妄想にして、其運用を人類の動作に比し、彼等が常に目的を以て動作するを見て、忽ち之を萬有に牽強するなきを得ん哉。何ぞ知らん自然界に於ては、萬物悉く原由の機制的に由るものにして、更に其中に目的なるものを有せざるを、此難問中には眞理と誤謬と、密着に纏綿しければ、本問題の爲に此兩者を明快に裁斷するは、その甚だ必要なるを信ず。

原因結果の理法が、自然界を嚴密に支配するは、余輩が曩に原由論に於て明に認定せし所なり。故に吾人の問題とすべきは、原由と結局原因とは、果して双方相容れざるの反對物なるや否やを講究するにあり。普通の解釋に依れば、前者は妄言的に働く機制的運動の理法、則ち最少分子の位地變更也。後者は規定の意匠に従ひ、外形の

意志が特殊物を配置するにあり、斯の如く解する時は、原由と結局原因とは、到底相容るゝ餘地なきや明なり。吾人は現世界を解説する爲に、彼此其一を撰ばざるべからず。然れども此二者の見解は共に誤れり、原由及結局原因を正當に了解する時は、互に調和すべき者なるは、左の事實に照して之を證するを得べし、吾人は萬有を靜思する時の、彼此共に度外視す可からざるを知る。カントは最も強固に之を主張せり。彼は萬有に關する機制的及結局原因的解釋の原理は、二ながら正當にして亦二ながら必須欠くからずと云へり。彼曰く、機制的原理のみを主張せんが爲に、結局原因的を排却し、假令實理の存するに疑なく、又之が爲には多種の原由の存すると明なる時と雖も、尙強て機制的のみを認んとするが如きは、吾人が理性をして自然の勢力中の影の如き類似物の間、傍徨せしむるものにして、これ豈に吾人が思想の許す所ならん哉。又單に結局原因的の解釋に拘泥し、自然の機制的分子を顧みざる時は、これ豈に吾人の理性をして妄想に陥らしむる者に非ずやと。カントは此二個の原理を調和せんが爲に、先づ主觀的の道を取り、此二者は齊しく只吾人の思想を整理する主觀的規法に過ぎざると云へり。然れ共斯の如く兩者を結合する主觀的原

理の吾人に存するは、正しく結局原因と原由の兩者の歸すべき、唯一なる客觀的原理あるを示すは、カントと雖も尙ほ之を知了せざるを得ざりしもの、如し。彼惟へらくかゝる客觀的の原理は、萬有の超感觸的眞實の基趾中に存するならん、而して此基趾の點より之を觀察する時は、總体と部分とは全く別離したるものにあらず、却て一致するものやも量る可らずと。カントが其老熟せる著書中に唱へし所は、カント以後の思辨哲學の等しく唱導する所となれり。セルリングは其「ツランセンデンタル、アイデアリスム」(Transcendental Idealism)に於て左の如く云へり。萬有の特質は其全軀機制的なるも、尙ほ其中に目的の充積せる事實にあり、人造物と自然物との差違は、前者に於ては其意匠は僅に其物の表面のみに押捺すれども、後者は其意匠は其物の内底に刻みて、決して之を分別すべからざる者なりと。彼ハ有機物の此特質を以て其中に存する世界の理性の動作に歸せり。ヘーゲルも亦カントと等しく、アリストテールの確言、則ち總て生命ある者は、一個の目的に従て動作するとの説を採用せり。彼曰く、唯自製力を有する者は活物なり、活物は進行する目的也、而して目的其物は結果也、世界は有機物なり、活潑なる組織軀なり、萬物は唯一なる主觀的機關

たり、太陽の周邊を運行する行星の如きは、此組織牀中の大なる肢條たるに過ぎず、然れどもこれ唯世界の活動なるを示すのみにして、世界の靈は其生命と全く異なる獨立の靈といふにあらざり。シュウペンハウエル(Schopenhauer)の哲學は、其全牀より云へば、徹頭徹尾セルリング及ヘーゲルに反對するもの也。然れども單に機制的の一方より、萬有を解釋するの說を排斥する點に於ては、全く前哲學者と符合する所あり。彼ハ特に重きを内部の結局原因に歸して曰く、之を解釋するの道は、唯形而上の唯心的の原理に依る外なし。凡て健全にして善美なる頭腦を有する者は、有機的萬有を觀察するに當り、必然結局原因に達せざるを得ざるべし。然れども先入師となり之を誘導するの僻說を有せざる限は、必ず亦スピノザの排斥したる「フキシコ、メテオロギー」(Physico-theology)若しくは「マンソロボ、テレオロギー」(Anthropo-teleology)に達するの必要なしと、ハルトマン(Hartmann)の「メテオロギー、フキシコ、メテオロギー」(Philosophy of Unconscious)は之を稱して、純理結局論(Metaphysic of Teleology)と云ふも不可なきもの、如し、彼は多の實驗的材料を用いて、結局原因の理を歸納的に説明したりき。ハルトマンの說に依れば、結局原因則ち内部の結局原因なる者は、決して原由の理

と抵觸するにあらず、寧ろ必然的に之を假定するもの也。何となれば其根本に於ては此兩原理は、單に論理的過程の要素にして、各獨立の形狀を裝ふなり。それ論理的必然は一個の原理なるが、或る側面より之を望めば、自然の機制的原由の理法なれども、亦他の側面より之を見れば、結局原因の理法たるなりと、マイヒェルセルも其「ダルゲ、非ニスム、アンデ、フキロソフ、フキ」(Darwinism and Philosophy)と稱する書に曰く、萬要素の交叉運動は、各個の要素の存在以前に存し、而して是等の一切を統一の中に網羅するの理法あるを假定するもの也。故に何人も一旦自然の理法あるを假定せば、併せて其理法の組織体あるを假定せざるべからず、而して亦各種の理法を以て究竟なる統一、若しくは究竟なる目的に歸せしめざるべからず。故に科學者にして苟も自然の理法を研究するものは、同時に結局原因論者たるを免れず、彼は則ち統一若しくは究竟なる目的を假定して、此最も單純なる原理を以て、一切の理法を解釋するものなりと、チェルレル(Zeller)も亦曰く、世界の萬物は自然の理法に従ひ、自然の原因より發生す、而して自然に異なる目的の干渉に依り、特別なる結果を生じたるものとして、之を解釋し得べきものにあらずと雖も、吾人は此自然的原因を以

て、純粹なる機制的と見做すべからず、蓋し機制的は決して世に有機物及自覺物あるを説明し能はざればなり、又生命の點より云へば、吾人は世界全體を以て其中に自然の必然的理法が之を支配することあるにも係らず、否、却て此必然あるが爲に之を絶對理性の所業なりと云はざるべからず。

上來叙述したる哲學者が、其全體の議論に大差あるにも係はらず、右の重大なる問題に關し、皆同一轍に出たるは思想界に於ける一大奇觀と云はざるを得ず、彼等一方に於ては外形的結局原因の觀念を排斥し、又他方に於ては異口同音に單純なる機制的理法を以ては、到底萬有を解する事能はざること主張せり、蓋し前者は萬有をして外形的建築者の業の如くに見做し、後者は亦之を以て細分子の偶然不規則に結合したると見做せり、部分の結合は以て有機的總脈を解釋するに足らず、有機物の本質は其總脈の統一が各部の特質を限定するの力を有す、然れば部分合して總脈を作為するに非ず、寧ろ一の總脈諸部分を使用して自製自作するなり、而して其部分の位地及性質等は、これ總脈の制定する所あり、空間に於ける機制的運動は、世に感覺若しくは意識の類あるを解説すること能はず、意識の特質と稱すべき

は、其中心の統一が自己を以て情態若しくは其部分の限定と區別し是等を以て自己の動作となし、自己に基くとするにあり、斯の如く彼我の間を區別し、其區別せられたる彼を以て我有なりと爲すの業に於て、自己を顯はす統一は、夫の空間にて各個獨立する部分の單純なる集合脈とは、其間莫大なる徑庭あるもの也、今や世界は間斷なく、有機感觸及自覺物を發生す、而してその之を發するや、固より偶然的にあらずして必ず一定の傾向あり、有ゆる變化は悉く此結果を目的として運動するが如き點より見れば、世界の原因は必然此結果に應ずべきものたらざるべからず、故に余輩ハ之を以て不活潑なる物質若しくは妄言なる勢力と見做すを得ず、却て目的を有する理性及其目的を成就するの意志、換言せば吾人が神と稱する全能の理性と見做さるべからず、近世學術界の思想を支配しつゝある、進化の總念を愈々深く考究するに従ひ、吾人は神の觀念を假定せざるを得ざるに至る、それ進化なるものは、或る實在者の情態の變化にして、其變化は一定の目的に達せんとする發達の理法に依て指導せらるゝなり、此理法は各實在者の中に附植せられ、而して其實在者の動作に依て顯れ、且つ其目的を達するや明なりと雖も、此理法の原因は、吾人之

を各個の實在者に索むるを得ず、何となれば各個の實在者は、かゝる進化の理法の其中に存するを自覺せざればなり。凡自然物は更に此理法あるを自覺することなく、亦人類も自然物として之を悟るを得ず、唯心靈的として漸く其僅少の部分を覺知し得るなり。然れども一切の實在者は自己を支配する進化の理法に従はざるを得ず、果して然らば此理法は外より彼等に與へ彼等に示されたるに相違なければども、これ何者の業なる乎。

各個の實在者に其進化の理法を授けたるもの、其物以外なる諸實在者の共同力に依る耶、然れども彼等諸實在者も皆悉く同等の位地に立つもの也、彼等は自己の進化の理法すら知る能はず、去れば彼等假令共同するも、争でか相互に此理法を授け得るものならん、亦彼等争でか各種の實在者の各種の理法を、斯くも驚くべき共同の智能を以て編成し、以て吾人が實驗する世界の如き秩序整然たるものを製作するを得ん、各實在者は其自ら知らざる一定の結果に至らしむるの理法に従て進化するとの單純なる事實にして、若し吾人の怪訝を喚起するとせば、其各個の實在者は唯自己生活の理法に従ふの外、他の爲に施す所なきが如くなるにも係らず、彼

等は不知不識の間に、之と交叉運動の關係を有する、他の實在者が其の目的に達するの用たるものにして、則ち劣等の實在者は、高等なる實在者の用と爲り、上下相和して始て世界全軀の究竟なる目的を達するの業を爲すが如きは、實に怪訝中の怪訝と云はざる可からず、若し是等のものを偶然なりと見做し、以て全く世界に關する合理的解明を放棄するに非れば、余輩は必然的に斯の如く相互の交叉運動の間に、各一定の理法と目的に従ひて進化する諸實在者の全軀を以て本軀の心靈の統一に歸せしめざるべからず、將た進化の理法を以て目的を設くる統一の思想に基き、又進化の勢力を以て其目的を成就するの意志に基くものとせざる可からず、かゝる進化の總念は一旦其中に含有する意義を綿密に講究する時は、吾人をして進化の根本神性なる世界の基趾に達せしむるもの也、夫の道義的證據論の基礎も、唯此思想を殊更に高等なる生活の上に適用したるに過ぎざる也。

道義的證據ハ之を二個の論點に分つを得、第一は吾人の意識中に絕對的道義法の存するより、絕對なる立法者たる神に推及すること也、第二は世界に於て道義の法の實成せらるべき道あるにより、世界を主宰する絕對に論及することなり、第一の結

論に對する普通の異論は、抑道義法なる者は他より授けられたる命令と見做すを得ず、何となればこれ寧ろ人の本性に属し、其自主權 (Autonomy) より發するを以て、始て實際に道義的に到る。若し之を外邊の立法者に歸するが如きは、則ち道義の自己限定を破壊するものにして、之と同時に人類の正常なる威嚴をも潰滅するなりと。余輩ハ此異論を以て正當なりと爲すを得、然とも若し之を認定するが如きことあらば、道義證據の普通なる論法は、必然之を排斥せざる可からず、されど其大体の點のみは尙之を維持し得るを疑はざるなり。道義法は人類固有の合理性の發表したるものにして、歴史的事情の變遷すると共に、此も亦變易することあるは、余輩が認定する所なれども、かゝる道義性の人類に存し、又世に之を實成せしむるの道備はるの道理は、余輩之を以て世界を創造し、且つ之を支配する神の意志中に尋ねざるを得ず。

抑人の自由を無碍的に制限する理法は、其本源は那邊に存する耶、人類の自由より來りしと爲し得る耶、人の自由は數々此法に制限せられ、其牽束に堪へざれば、若し能ふべくんば其羈絆を脱せんと希望するに非ず耶、而して此法は自己の上に位す

る無碍的の權力なるを知るに非ず耶、人類の自由は決して此法を作為したるにみらず、然らば之を以て其下等なる性情より發したりと爲すを得る耶、道義法は人類の劣等なる非靈的自然の情慾の羈絆を脱し、却て彼等が主となり宰となりて彼等を制御せんと要求するものにあらず耶、果して然らば如何にして其上に牽揚せんと欲する、劣等なる情慾より此法の發したりとするを得る耶、或は其源を社會に發したりとするを得る耶、社會の安全を維持せんが爲に方案したる制度方便なりとするを得る耶、固より道義法は社會を待て、始て吾人の意識中に發現し來り、其現狀は時々社會の變遷と共に其趣を異にするものなり、然れども其社會は道義法の原因となりて、自ら之を産出したるものにあらず、却て社會の律法が吾人に對し、道義上より之に服従するの義務を負はしむるを得るは、業に已に吾人に道義心の存するが故也、豈に之を以て淺近なる社會の律法の如きものに存すると云ふを得んや、蓋し社會の律法の如きは人類が世界に存する、絶對至聖の意志に對し下したる種々様々なる解釋及方式たるに過ぎざる也、社會の客觀的律法及各個人の良心の主觀的理法は、二ながら歴史的及自然的制限を受けたれば、爲に不完全たるを免れず、

何となれば此二者は常に相提携して發達し、亦互に其發達を助援するものなれば、一方の不完全及制限は之を他に及ぼし、各個人の良心は其周邊を圍繞する社會の不完全なる道德の狀態の爲に、大に災害せらるゝことあり、又社會の律法は各個人の道義心の軟弱及道義的判斷の不明なるが爲に、數々中傷せらるゝことあり、然れども斯の如く社會及各個人に於ける道德不完全なるを免れざるが故に、若し道義法をして多衆に對し、絶對的の義務を負はしむるの權威あらしめんと欲せば、吾人は殊に其權威の源を、一層深遠の地に索めざるべからず、其權威は時間中に存する社會の發達の有ゆる形狀の上に位し、無碍的に各個人を超越し、世界に於て一定の目的を有する至高の機能より發せざるべからず、人或は云はん、かゝる權威は之を人類の合理性に素むるを得べし、蓋し此合理性なるものは、人類全体の發達故に其道義的發達の基本にして、其進化の傾向を限定するの理法なればなりと、然れども茲に看過すべからざるは、此議論は未だ以て道義法の充全なる原因に關する問題を解釋し得たるものにあらず、唯之を一層後邊に推遷したるに過ぎず、何となれば吾人は直ちに云はん、とす、人類をして自然の原態を離れて文明の行路に進み、社會

を組織し、道義法を設くるに至らしめたる合理的衝動力は、彼等何邊より之を得たりとする耶、此道義法は各個人の意志及動作に就て無碍的の權力を有す、而して一切の人類は悉く皆其權威に服従する也、此法ハ文明の進歩と共に其容量を變易し、愈々潔白に、愈々活達に進行すれども、其大要は少時社會の墜落したる時期を除くの外、古今を通して重きを社會に有すること更に異なることなし、此事實は世界歴史の神髓を組成するものなるが、宗教心は常に之に左の如き解釋を與へたり、萬國の律法は世界を支配する神の意志の發現也、又各個の良心は其心に印したる神の律法、若しくは其聲なりと、此解釋ハ古陳に屬すと雖も、余は之を以て眞誠の解釋なりと信じ、近世學術の進歩は頗る莫大なりと雖も、未だ以て此解釋に易ゆべき價值あるものを發見し能はざるなり、余輩は神の意志の發現を以て、超自然なる奇跡的動作と思惟せず、寧ろ人類の合理性及其歴史的發展より、自然の方法を以て成就するものなりと信ず、然れども、這は格段の差違を生せず、其見解は何れに見做すも、公平なる宗教心が社會及良心に顯はるゝ、道義法を以て、齊しく神の啓示なりと認めんと欲するは、蓋し正當なりと信ず、見よ、神は天空の辰星に其行路を示し、人類の

心に其律法を識すものにあらずや。

道義的證據の第二は、現象的世界に於て道義法の實成を完ふする爲に、世界の主宰たる神の存在を假定すると也。此證據に關するカントの論法は、頗る不完全なりと云はざるを得ず。彼ハ吾人の實理は最大なる善の實成の爲に、神の存在を假定するものと主張せり。彼亦曰く最大なる善は完全なる善徳と、完全なる幸福との和一にあり、前者を全ふするは人類の義務也、後者に至りては之を得るの力人類に存せず、是れ寧ろ吾人の善徳に對し、全能なる神の授くる所なりと、世人が之を評して、此議論に於ては純理批評者と、無上大法(Categorical Imperative)の嚴格なる論者(カント)とは、果敢なくも其痕を雲煙に収めたるが如く、前後撞着したりと云へるハ、敢て不當の言にあらずと信ず。フヒテールはかゝる主義主義の議論に對し、嬌激なる反對を試みたり。抑人類以上の勢力者の手に頼りて幸福を干めんと欲するは、これ偶像崇拜なり、かゝる欲望を満足せしむるの神は、唾賤して可也、何となれば彼は人心の腐敗と、理性の墮落を永久に保持するものなれば也。若し夫れ自己の幸福を以て魚骨、鳥毛に望み、或は之を全智全能の造物者に望むも、此兩者は其名稱こそ異なれ、これ齊しく

偶像たるのみ、其本質に至りては二ながら認解にして、亦二ながら人心を壞類するものなりと、余輩はフヒテールの如く、極端なる批評に左袒するものに非されども、夫のシェレン(Schiller)がカントの説を評して、善徳を行ふの道愈々難澁なれば、其究極に於ては神の攝理により、之に酬ゆるに幸福を以てせらるべしとは、これ奴隸の爲に設けられたる道徳なりと、駁し去りたるは頗る妥當痛快なりと信ず。スピノザも嘗て云へることあり、救は善徳の報酬にあらず、寧ろ善徳其物なりと、蓋し救は神に向ふの愛なり、世人は道徳宗教及其他人類の心靈の正脈に屬する一切は頗る重擔なり、之を運搬するの辛勞の爲には、死後に至りて神より其報酬を受くるの權あり、若し然らざんば、人は寧ろ其情慾を満すの便益なるに如かずと思惟するが如きも、這は悖理の最も甚しきものと云はざる可からずと、セルリグ云へり、善徳と幸福とを猶反對なるが如く思惟する間は、未だ道徳と稱するを得ず、何となれば道徳は人の心靈を無限に至らしむるにあり、既に茲に達すれば自由と憑依、善徳と幸福に於ける反對の質は全く消滅し、幸福は已に善徳の附屬若しくは結果にあらず、則ち善徳其物なりと、ヘーゲルも亦カントの議論に反對して、凡道徳は動作にあり、然れ

ども其動作は道義の目的を實成ならしむる事なり。故に道義の觀念と實際の間に於ける調和を回復するの謂なり。此目的を以て行ふ動作に於ては、幸福は直ちに隨伴し來るものにして、満足も亦其中にありと。

善徳と幸福との外形的調和を全ふせんが爲に、世界主宰者を假定するの説は、必竟不潔なる主樂主義に基く所あれば、到底維持しがたきもの也。然れども余輩は前述の諸批評により、此議論の方針を少しく轉するの道を學べり、則ち現象的世界に於て、道義の目的の實成せらるべき道あるは、則ち此世界は道義の觀念を實成するの目的を以て、其始に組織せられたることを證す、故に道義法と自然界の基址は同一なるを示せり。蓋し善は此世界に於て至高の權理を有すれば、世界の上に無上の權威を有すべき者と爲すべし。然れども斯の如く絶對的に勝を制するの力は、各個善人の常に制限せられたる意志中に在せざるや明なり。されば善をして最終の凱旋に達せしむるの保險は、世界の事物を支配する至高なる神の力に要めざるべからず。道は單純明白なる議論にして、何人も之を非義する所なし。唯疑問とすべき點は、善の目的を成就するを保險するの力につき、吾人は如何に之を思考して可なるや也。

フ・ヒテールはカントの議論に、前述の改竄を加へて、大に其論法を轉化したる第一着の人なり。彼は、世界の神政を信ずる理由と題する論文に於て、左の如き説を爲せり。世界に於て獨り神聖なるものは唯道義政あるのみ、吾人ハ之を越へて其實地に達すること能はず、否、強て之に達せんと欲するは、これ内なる人を殺し、則ち吾人の道義上の自主權を失ふもの也。後記の主説は、テヲ、カント派のヘルマン (Hermann) が例の得意なる奇妙の論法を以て再び之を提出せり。此法外なる然かも維持し難き主説中にも、亦一片の眞理を認めざるべからず、世界を整理するの力を以て、善人に幸む悪人に禍せんが爲に、恣に人靈の道義的行爲に干渉する天外の神と認むべからざるや明也。這は世間普通の説なりと雖も、一旦之を實驗の事實に照らせば其謬たるや明なり。何となれば善人は往々不運に遭遇して苦患を受け、却て悪人は僥倖を得て繁榮するが如きことあるは、世に甚だ著明なる事實なれば也。又世界の神政を斯く機制的超自然に觀得するは、道義心の潔白及強健には、寧ろ有害無益なるのみ。善惡共に神の手を假り外形の運命よりて酬はれんことを望むは、必然道徳心の潔白を害し、報酬を望むの主樂心を培養するの患あり。若し其報酬にして其希望に

満足と欲する行為を無益にし、又は懶惰輩は神の救助を望むを恰好の口實となして、自己の懶惰懈慢を隠蔽せんと欲す。是等の點より考ふれば、フヒターの如き強健なる道義的唯心論者が、神を以て世界の道義的秩序と、實際に於て相異なりとするの假定に對し、大なる異論を唱へ、又た吾人は道義的秩序を越えて、其遠奥に達するの要なしと云ひしは、實に道理ある言と信ず。

然れどもかゝる單純なる形式的原理を以て、世界を支配し善の必勝を保障する力なりと認めんとする議論は、其不充分なること著明にして、フヒター自身すら長く之に満足すること能はざりき。夫れ秩序は獨立なる實體の存在にあらず、唯其存在の關係たるに過ぎざれば、之を以て自動自持するの力なりと思惟すべからず。理法は或る活物の中に其性質の作用として運動するの時に至り、始て、其動作を顯はすもの也。故に道義法も人類の意識に於て、其獨特なる發達及動作を促す合理的衝動力として感せらるゝに至り、始て能力たるを得るなり。若し實驗によりて得たる

此衝動力の現在(良心の現在)を以て、單純なる一個の心理的事實と認め、更に其遠奥に入りて之が解釋又は證據を搜索する能はずとせば、吾人が善の必勝に關する信仰、則ち善は人心中の強大なる私慾、私情に打勝つべしとの信仰は、果して實成せらるゝ、耶、否耶、更に之を確むるの道なし。果して然らば夫の厭世主義の自暴自棄、善を以て唯善人の麗はしき理想のみにして、實際世界に於て實成せらるべきものにあらざるとの主義に打勝ち得べき耶、善の惡を制するといへるは、吾人の實驗に照して得たる證據頗る不充分なり。否、時に全く其反對の證據を見るが如きことなきにあらず。然れども一旦吾人の心に無上の權威を有し、吾人をして之に服従せしめんと欲する善の理法を以て、無碍的則ち人類以上の實在者、造化の本根、人性及世界の真なる基趾、則ち神に歸する時は、事態全く一變する也。然れば彼に頼り當に道義法の世に存する所以及吾人の良心に在て其權威の無上なる所以の解釋を得るのみならず、亦世界を支配する神に頼り、吾人の良心の要求する所は、必ず亦世界よ於て實施せらるべきもの、亦世界の大勢の歸する所遂に彼等の必勝たるべき確かなる保障を得たり。かく吾人の信仰は、絶對先天的確實を得、又世界歴史の發達中の諸大

段落に於て、實際上より之を確實ならしむるを得たり。うれ歴史は世界に於ける善悪競争の活劇也。而して終局に於ては悪は自己の毒果の爲に自滅し、善は勝利を得て世界を支配するに至るが如きは、歴史の諸段落に於て吾人の實驗する所也。然れども善の勝利も最終全尾にあらず、動もすれば惡の爲に逆襲せらるゝ、患なきを保せず。

かゝれば道義證據論の第二なる世界を道義的に支配するものありとの説も、正當に其意を解する時は、其中に一個の真理を含有するや明也。若し此真理を以て前の議論原由及結局原因論の結果と連帶せしめ、又之を以て人類理性の發達の理法に關係せしむる時は、一層確實なるを認るに至る。人類の理性は通有なる結局原因的世界秩序を組成するを助け、亦神の道義的發現の景狀たり。人類に此合理性存するにより、神は自らを聖なる立法者、又は造物者として顯はし、又其理法を權力を維持し、其動作をして世界に勝しむる業により、神は自らを人類歴史の義にして恩恵なる主宰者たるを顯はす。

アンセルム(Anselm)デカート(Descartes)の徒が主張したる煩瑣學派の本跡論ハ、神は最

も完全なる實在者てふ總念により、其存在は則ち此總念中に含有する品質中の一個とせり。カントは頗る切實なる理由を以て是等の議論は、無用なる煩瑣學派の空論として斥けたり。アンセルムと同時代の「モンク」(僧)ゴットロ(Gottlo)も同じき抗論を提出せり。現今に至りては何人も、此に關する煩瑣學派の論式を回復せんと思ふものなかるべし。ヘーゲルは右に關するカントの批評を評論するに當り、稍此議論を蘇活せしめたるが如き觀なき能はず。然れどもこれ唯其要領につきて云ふのみにして、固より維持すべからざる煩瑣學派の形式を云ふには非ざる也。ヘーゲルに依れば、理想若しくは概念は則ち絶對也。去れば其中に實在を含むや明白也。彼曰く理想なるものは、實在の如き最も下等なる形質を供ふる能はざるまでに貧なる者にあらずと。これ實に及を以て糸の結目を裁ちたるもの也。斯く概念を以て直ちに絶對なりと主張する唯心的「パンロヂスム」の結果は、造物者なる神の概念と被造物なる人の概念との間の區別を滅却するに至れり。故にフテヘルバロ(Fueterbach)及スツラウス(Strauss)の徒は、之が爲にヘーゲルの説を無神的に誤解し、以て其師の心を得たりと爲せり。彼等の説に依れば、絶對は獨り人類の概念に存す。故に彼處に在て始て發作せ

百三十四

られたるものあり、されば吾人の想念は、是れ則ち絶對なりと、これ實に濫用誤解の甚しきものと云はざるを得ず、ヘーゲルの唯心説の如きは、かゝる人類崇拜を去るや甚だ遠し。人類の想念の絶對ならざるハ明々白々なり。人類の想念を制限するものは四角八面にあり。人類の想念は、自然の賜物及世界に憑依せざるを得ず、而して世界は其想念の働く目的なれども、人類は自ら之を形造したるものにあらず、現在の儘に他より彼等に與へられたるもの也。人類の想念ハ辛苦經營して、漸く其目的たる眞理に達するを得。人類の想念は常に誤謬と戦ひ、又數々誤謬の民に陥ることあり。斯の如きの想念は豈に完全なりといふべけん哉、豈に絶對なりといふべけん哉。然れども想念は人類の心靈的の動作也、之に依て人類は靈なるものにして、觸覺の世界を超越する者たるを證するなり、是れ夫の本体論に關するヘーゲルの議論中に含有する眞理也。若し感覺及意識の如きは物質則ち細分子の機制的運動に依て、解釋し得ざるの情態なりとせば、夫の「エーゴ」自我の爲め、又「エーゴ」に依て通有性を設くる正當なる想念は、總て物質的機制に最も直接なる反對にして、後者の外形的性質を其の「エーゴ」に於て、之を理想的に綜合するの作用によりて非認す

百三十五

るもの也。吾人の思想は吾人の物性より發し、また之に由らずして其動作を爲すこと能はざるものなれども、直ちに之を以て總の物質的及感觸的を全く超越する心靈的動作の充全なる原因と爲す能はざるや明白也。人類の心靈的動作の究竟なる基趾は、必ずや心靈的原理中に存せざるべからず、而して此原理は同時に自然の基趾なり、これ則ち無限絶對の靈なり。余輩は又他の一方より考察を下すも、齊しく此點に達するを得。抑想念は「エーゴ」の自發動作にして、始より「エーゴ」の中に存する自己の論理的理法に従ふもの也。然れども此理法は知覺力に依り、外界より得たるものにあらず、凡實驗は世界に關する秩然たる連環あるの知識にして、感觸は之が爲に粗なる材料を與へ、想念は論理的理法に依て之を製作するもの也。此理法は吾人の意識中に存する、一切の容量を連環する必然的先天の形式にして、決して實驗上より得べきものにあらず、否、實驗は此理法を待て始て其動作を爲すもの也。然れども想念は其中の固有に存する形式、若しくは理法に従ひて諸の材料を結合するに於て客觀的眞理をも知得するを得、則ち實に世界の現象を個々別々に知るのみならず、又其相互の間に存する關係の形式及理法をも了知するもの也。これ吾

人をして意識の現象を理想的に連環するの主観的必然の形式(論理法)は、現實の事物を實際に連環する客観的必然なる形式(形而下及形而上實在の理法)と相符合するものと思惟せしむるに至る。若し然らざれば想念ハ、假令自己の理法と全く相符合する所あるも、果して實際の事物と眞實に符合する耶、否耶、更に之を保險するものなし。若し想念の理法にして實在の理法と符合せざるに於ては、吾人は全く實際の知識を得るの希望を放棄せざるべからず。然れども實際の示す所大に之に反するものあり、吾人の思想は自己の理法を以て、外界の現象に適用するに、皆悉く彼處に於ても實際に符合する所あるを見る。若し吾人が既知する理法に基き、將來に起るべき現象を豫測する時に於て、必ず其豫測の如く其現象の發現するや、之を大にしては天空行星の交會、小にしては日用時器の進行の如き、若々主観的理法と客観的現象の符合する所あるを見る。故に外界より得たるにあらざる吾人が想念の理想的理法及吾人が想念により作爲したるに非ざる、實在の實際的理法との一致は、決して拒否すべからざる實驗上の事實也。吾人が智識を確實ならしむるの道も唯此一點に存す。然れども吾人は此一致を見て之に如何なる理由を附するを得る耶。

余輩は吾人の想念と世界との一致を了解するの道は、只一あるのみ、則ち此兩者の基趾は同一なるを假定する事にして、此同一の基趾に於ては、想念と實在とは全く同一なるものなり。或は實際的世界の基趾ハ、同時に吾人が心靈の理想的基趾たるなり。故に絶對なる靈造化の理性は、世界の理法に在ては、其實際の側面を顯はし、想念の理法に在ては、其理想の側面を顯はすものなり。相對なる心靈的實在者に於る、想念と實在、主観と客観との關係は、無限絶對なる靈、吾人が心靈の基趾及原形たるものに在ては、兩者の唯一なるを示す。これ即ち本論に含有する意義なり。余輩は信ず、プラトーンも亦已に之を豫知したりと、彼が至高の理想若しくは神なるものは、實在及知識の原因なりと云ひしが如きは、則ち此意を顯はすものなるべし。オースチンも亦彼の轍に倣ひて、吾人が眞理を知るの力は、神と關與するに基く、彼は即ち眞理なり、世界と吾人が想念との不易の理法なりと云へり。近世に於て此思想は、思辨哲學の基礎及其邊隅の主礎となれり。余が曩にカントを論ずる段に於て陳辨せし如く、智識論の批評も夫の宗教心と等しく、爾の光に於て我等光を見るを得べしとの假定によりて、漸く其正當なる解釋を得べし。

本論の神論は斯の如く一般智識の理論に屬す。今其要領を擧ぐれば、吾人が思想の誠なるを保險し、且つ其基礎を得んが爲には、必ず神の實在を假定せざる可からずといふにあり。是れ夫の宗教心を刺戟して、常に止まざりし真理也。然れども宗教は一般の智識論に關係するものにあらざるを以て、此真理を専ら自己の爲に適用し、吾人が有する神の智識は神の天啓に基くが故に、此中には神の存在に關する最も直接なる證據を含有すると主張せり。此宗教的證據論と夫の智識の理論及本論との關係甚だ密着なるは一目瞭然たり。實に兩者は固と一個なりし事は、夫のオリゴステンの自白又はアンヘルムのモノロギオン(Monologion)及「プロロギオン」(Prologion)に照すも明白也。唯後世に至り本論が煩瑣學派の論式に凝冷したる時に至り、始て宗教的證據論彼より分別し、終には外形的超自然の形狀を裝ふに至れり。例せばデカールトは吾人の有する神の智識は、之を直接なる神の天啓に歸するに非ざれば、到底解釋し能はずと思惟せり。此議論に對しベーレー(Bayle)は甚だ明晰なる反對論を主張して曰く、抑神の意識は更に其超自然的發現の存在を示すものにあらず。寧ろ人心自然の本性に依て、充分に解釋し得べしと。此主説は近世の宗教學の確定す

る處となれり。近世の宗教學は進化の理法に基き、宗教思想の發現及進化は、人類本性の發達なる理法の結果なりと主張す。然れども一たび此議論を認許するに至れば、神の意識は更に天啓に關係するものに非ざると云ふべき耶。斯の如きは夫の淺薄なる超然神論の外、恐くは何人も之に左袒するものなかるべし。宗教心は世の深遠なる思想と共に、之を發揮したる諸の動機、則ち内心の動機及外界の刺戟誘引は、唯これ相關的方便にして、必ず唯一の基礎及目的あるを指示す。而してこれ則ち萬有及人類の造化の本原たるに外ならず。抑造化の客觀的妙理の中に、造物主の永遠の力及神性を認得する主觀的理性を、人類の本性に賦與し、以て神に對するの意識を喚起せしむるは、これ則ち神の業なり。世界歴史の深意なる記號及奇異なる勢力により往古より時々種々なる方便を以て、人類に存する神の意識を愈々高尙に、愈々潔白に發達せしめたるも亦神の業なり。鬼神論に於ける奇跡的昔話の如きも、必竟幼稚なる古人が訖辨的に右の真理を表證せんと試みたるに過ぎず。現今に於て吾人は古人に勝り、人類をして神を信ずるに至らしめたる、直接なる心理的動機を、一層正確に知覺するを得たるは、決して神の觀念の誠なるを疑ふべき理由と爲すこ

と能はず、却て一層深く世界秩序の嚴密なる、結局原因的連環をも觀得し、總て自然的必要及慾望には、必ず之を満足せしむべき目的の、世に存在することを覺悟せしむるに至りたれば、最も深く最も通有する人心の慾望、則ち生ける神を欽慕するの希望に對し、必ず之を満足せしむべきの目的あるを確知せしめざるを得ず、此目的たるや、則ち至高の眞理、神の現在これ也、又吾人は祖先に勝り、人類の有する神の意識が現今の程度に達したる歴史的階段を一層明白に悟得したれば、必然諸邦民の運命及各個人の心の實驗の紛雜したる絲を以て、吾人が稱して人類の宗教歴史てふ、驚くべき織物に經緯したる、神の萬種なる智慧は、吾人の心に一層深き感覺を與ふべきなり。

上來の論辨によりて達したるの結論は、曩に外界の事情を講究するに當り、得たる所と更に異なることなし、唯勢力の先よりも一層強大なるを見るのみ、則ち吾人は智識の燦爛たる光を避け、吾人の信仰を暗黒に隠し、以て其安全を計るの必要なく、吾人は安易して學術の基礎に立ち、忌憚なく近世進化説の原理を採用し得べし、如何に學術の發達あるにも係らず、否、却て其發達ありしが爲に余輩は自然界及人類界

の何邊の點を考ふるも、等しく必然的に、萬物の歸すべき一の基礎、あらゆる進化の一の目的なる神に達せざるを得ず、萬物は神より出て神に賴り、又神に歸すべきものなり。

されば是等の議論の結果は、神の信仰は客觀的眞理なるを證するにあり、則ち嘗に神ありとの確信のみならず、又其神は、如何なるものなるやの知識を得ると也、此兩者は往々區別するものあれども、其實決して區別すべきものにあらず、若し一個の目的につき其物は如何なるものなるや、如何なる性質を有するやを知る能はざれば、吾人は如何にして其物あるを知るを得ん、又其物あるを知るに至りし所以は、則ち其物の結果を實驗したるに由る、然れども結果は則ち本質の發現なり、故に其物顯はれたる也、若し夫れ發現に於て其性質を顯さず、却て其物の實體 (Thing-in-itself) 若しくは其發現と全く異なる X として、發現の後側に隱匿するとせば、其發現も亦徒に空現たるに過ぎず、余輩は之より其原因に達すること能はざるべし、然らば其物の實體の存在を其現象の原因として主張することをも能はざるべし、斯の如き抽象的象煩瑣學派の空論に於ては、吾人の思想は自己の周圍を間斷なく無益に轉

轉するのみ、其容態實に抱腹に堪へざる也。若し意識中の事實として顯はれたる諸現象を以て、單純なる空現ならずとせば、余輩は是等を以て吾人を以て獨立なる實在者に示し、亦實在者を吾人に知らしむるの記號なりとせざるを得ず。然り此實在者は吾人が意識中の現象と全く符合せざるや明白なり、何となれば是等は大に吾人の觸官の組織に關する所あれば也。薔薇の紅色、樂器の音聲等は吾人の外に在りて、かゝる知覺として存するものにあらず。唯吾人の視官及聽官の動作に發作するもの也。然れども此聲色の諸感覺は空現なるにあらず、必ず其物に存する或特別なる關係を示すの記號にして、是等の關係は吾人が知識の目的たるを得る也。直接なる現象の裏面に到り、其基礎は如何なるやを講究する思想に依らざれば、吾人は一の知識をも得ること能はざる也。然れども萬物は思想の爲に知識の目的たるを得、或程度に於て絶對的制限を設け、知識の動作は是より寸歩も越ゆべからず、有ゆる知識は輒を卷き兜を脱し、跪きて其前に降伏せざるべからずと云ふが如きは、實に專横なる斷言なりと云はざるを得ず。夫の神の性質は吾人の智識の及ばざる所、何となれば彼は吾人の實驗以外にあればなりといふが如きも、其意の那邊に存する

耶、殆ど了解するに苦む。若し直ちに此説を轉用せんか、吾人はこれ自己以外に存する他の人類の性質否、其存在をも了知するの力をなきに至らん。他人の本性、思想、感情意志の如きは、吾人は一つも直接に實驗し得べきものにあらず、僅に吾人が實驗する所は或る景狀、色相の音聲及諸知覺が、吾人の前に於て自己と等しき形体に結合して運動するが如くなるに過ぎず。是等の繪畫に應ずる實在其れ自身(Being-in-itself)なるものありて自己に等しき活靈を有し、又是等の靈は自己の實驗によりて、直接に知得したる感情、思想及欲望等に等しきものを有するとの事は、決して吾人が直接に實驗し得たるにあらず。單に余輩は自己の心に實驗するものを以て、他に類推し、彼等にも之に等しき狀態ありと信ずるに過ぎず。此推究は吾人が始より常に實驗し來りしものにして、又其結果の吾人を欺くもの甚だ稀なるより、殆ど其推究たるを感ぜざるに至れり。神は超感觸的にして、吾人が實驗以外に立つを以て、吾人之を知るの力なしといふが如きは、これ頗る淺薄粗鄙なる議論にして、只管に感觸の力を偏重するの過に坐するのみ、日常吾人交通間に於ても感觸の實驗上より知得する所は單に記號に過ぎず、吾人は自己の思力により是等を解釋し、以て他人の存

在及其狀勢を知得するの眞理に遇ひては、到底維持し難きもの也。若し總の知識は吾人が内驗、及外驗に於て得たる記號を解釋し、若くは結合するに基くとせば、直ちに此方法に一步を進めて、人類の實驗上に得たる記號の全脈を解釋し、若くは結合し以て現象世界全脈の基礎たる神に推及するに、何ぞ之を不當とするの理あらん哉。

上述の如く吾人の知識は、到底神に達する能はずとの難問に連帶する、一個の理學に基く異論あり、其起原は遠くプラトーンに發し、又シェンクライエルマールの神學に於ても往々見る所なり。其說に曰く、神は單純なる無限絕對者なり、吾人の思想は多の異殊及關係の中に働き得れども、神は總の反對、異殊及限定以上に位すれば、到底吾人の知識は神に達する能はずと。然れども此假定は無限絕對及實在の總念に於て、二ながら錯誤したるの見解に基けり。抑無限絕對は一の限定を有せざる抽象的通有性にあらざる。若し然らば絕對は限定ある相對的の基礎たる能はず、將た相對者をも自己中に含有する能はず、即ち自己以外に溢かざるべからず、果して神は已に此相對者に制限せらるゝとせば、彼自らも亦有限相對者たらざるべからず、眞誠な

る無限絕對は唯總體にして、有ゆる限定及異殊の基礎なり、故に其中に糾羅する一切の特殊相對者の基礎たり。夫の虛妄の絕對則ち抽象的通有性に就ては、吾人は之よ存在をも附すること能はず、若し實在にして作用、性質及關係等の如き想像的にあらず、眞に獨立なる現在の實脈とせば、余輩はかゝる實在は業に已に熟知せるもの也、即ち吾人の「エーゴ」(自我)を自ら實驗するに於て之を知れり。此「エーゴ」は人類が早くより熟知せる所にして、其中には一般實在の總念を測るべきの定規を有せり、何となれば吾人は自己の實驗に於て、直接に知得したる實在を以て、自己以外に應用せざるを得ず、蓋し自ら有せざる所を以て他を推測し能はざれば也。今此定規により考ふれば、一の限定を有せざる空虚なる通有性は、實在の總念に甚だ不充分なるや明々地なり。「エーゴ」は其中に於る複多なる動作及狀態を區別し或は結合する充塞せる統一なり。「エーゴ」は自己の觀念、感情、慾望及動作の中に常に存すれども、又彼等の中に自ら混入して消失するものにあらず、寧ろ是等以上に位し、之を結合する獨立の統一なるを顯す。「エーゴ」は其狀態の變化は、則ち自己の變化として實驗すれども、尙ほ其變化の中に永久同一を維持するもの也。「エーゴ」は尙ほ

自己に過去の状態を記憶中に止め、自己生活の一要素として永久に保持するもの也。エーゴは斯の如く奇警なりと雖も、吾人は之を總の知識の原事實及總の實在の原形として疑はざる也。

是を以て之を觀れば、プラトー以來の無限絶對てふ觀念に基き、吾人の知識の到底神に達し得ずとの異論は、二個の誤解に基くや明白也。蓋し第一には眞誠なる絶對は、空虚なる通有性にあらず、寧ろ充塞遍滿の總体也。眞誠なる實在は凝頑なる單一にあらず、寧ろ自主自立の統一にして、複多なる動作の中に在りて、自己を主持するもの也。かゝれば思想上より神の知識に達するの道已に明白なりと信ず、若し此研究にして好結果に達せしめんと欲せば、吾人は己が「エーゴ」即ち吾人が直接に知覺し得る實体なるものより、類推して茲に至るべき也。吾人の「エーゴ」は制限ある總体なれども、自ら其中に一小天地を含有す、故に吾人は是よりして世界万有を網羅する原「エーゴ」たる神に達するを得べし。茲に吾人が注意を要すべき二個の危殆あり、一方に於ては吾人は神を以て諸種の總体中の一若しくは吾人と等しき一個の特殊者にして、自己の外に之と並立する許多の特殊者を有すると看做すべからざるや明白也。若し然らざれば世界の特殊者を連環網羅する、統一なる總体にはあらずして、却て彼等と並立し、許多の特殊者と、自らも亦一層高等なる總体中に結合せらるべきものなればなり。然れども他方に於ては吾人が自己の「エーゴ」中に發見する諸の限定を神に於て否定し、其の絶對を維持せん爲に、諸の區別を除却し、殆ど無變化なる單一とならしむべからず、後者の危殆は理想的神の總念に伴ひ、前者は通俗的に伴ふ。然れども神に依て世界の基址及目的を得んとする思想の要求を満足せしめ、又彼により實際的生活の至大至高なる目的に達せんと欲する、宗教心の要求を満足せしむる神の總念は、必ず一方に於てはその万有を網羅する總体の性質を傷はず、他方に於てはその獨立なる「エーゴ」たるを抱懐する者ならざる可からず。若し後者獨立なる「エーゴ」に附するに、靈の觀念を以てするとせば、神は絶對なる靈と稱するも、敢て不當の言にあらず。然れども茲に注意を要すべきは、かゝる字句に伴ふ諸種の誤解也。夫の不充分にして茫漠たる總念、則ち活ける原由、妄言なる意志、無意識、夢中なる世界の靈或は論理的理想、則ち單純なる思想にして、固より實体ならざるものを以て、其意義を冥晦ならしむべからず。

是等の諸説に反對し、余輩ハ神の性質を知るの道は、吾人の「エーゴ」より推論するの方針に従ひ、之を固持して動かざるを要す。世人の熟知するが如く、「エーゴ」の特質は其自覺にあり、則ち自ら自己の状態を確知し得るにあり、「エーゴ」の自覺は其人の状態の變化するに連れ、時々明晦あるを免れずと雖も、未だ曾て全く之を安失することなし、これ實に諸状態及動作の變化中に在て、「エーゴ」が自己の統一を主持し得る所以なり。斯の如く自覺は假令其程度を異にするあるも、吾人が「エーゴ」の本質とは、決して分別せらるべきものに非ず、然るに吾人は斯の如き自覺力は、無限なる神の元「エーゴ」に屬するものならず、或は假令之あるも、夢中の意識の如く、甚だ低度なるものと爲すを得るや、余輩は決して其然らざるを知る、神の自覺力は必然完全無限たらざるべからず、而して神に完全なる自覺力あるは、宗教心の敢て疑團を容れざる所也、何となれば無意識なる神ハ、吾人が宗教心の目的たる能はざれば也。世にハ神の意識を否定するものなきに非ざれども、彼等が議論は宗教に基くよりは、寧ろ理論に偏重し、或ハ唯心的假定若しくは唯物論に基くもの多し、フヒテ「エーゴ」の意識は只非「エーゴ」と對峙して始て發する也、故にか

ゝる對峙を有するもの、則ち制限ある實在者に非ざれば、以て意識あることなしと、然れどもクラウゼー(Krause)及ロツチニー(Lotze)の徒は、之に向ひ明快なる批評を下して曰く、抑も非「エーゴ」を自己より區別するには、必ずや其以前に於て「エーゴ」あるを知得せざるべからず、而して之を知得するの道只一、則ち他に憑托せずして之を直覺するのみと、斯の如く「エーゴ」を直覺するは、總の智識則ち「エーゴ」以外の事物を知得するに必然の状態なり、苟も「エーゴ」の自覺につき精密なる注意を下したるものは、必ず其外形の對峙者に基かざるを悟るべし、否、是等の對峙者は寧ろ思想の動作に依て、「エーゴ」の自ら設くる所なり、然れども其自覺に到りてハ唯不動なる自己と、變遷極りなき諸の動作及状態を區別する内心の動作に由るを知るべし、自覺は則ち此内心に於ける彼我の間を區別するに基くものにして、決して外來の反對の力を假りて然るにあらず、却て其反對は内部に於ける此區別の結果たるを知べし、是に因て考ふれば、神を以て單純なる統一、不限定なる實在者若しくは純然たる想念中の想念の如く見做す時は、吾人は其中に自覺あるを假定すること能はざるべし、是に反して一旦彼に想念及意志の如き複多あるを認定する時は、

吾人は神の自覺を假定せずんばならず、若し然らざれば此兩者(想念及意志)は更に相
 關涉する所なくして、各分離孤立するに至らん、若し此兩者にして「エーゴ」の統一
 の中に互に相連環せざれば意志は想念に係りては更に知る所なく、想念も亦意志
 に係りては更に知る所なきに至らん、「エーゴ」は想念及意志中に在て常に同一な
 るものなり、又其同一たるを確知せる也、吾人は状態及變化に伴はれざるの自覺あ
 るを了解するに苦めり、蓋し其動作は其實在と同一にして、等しく不變不易なれば
 也、然れども一旦神の不變なる實在と、其變易する動作及状態との間に區別を設く
 る時は、神の自覺を假定するは必然たるに至るべし、何となれば其實在の統一を状
 態の變化中にありて維持することを得るは、これ此統一に由れば也、若し然らざれ
 ば其統一は變化の流轉中に亡失消滅するに至らん、エドワルト、フラン、ハルトマ
 ンが上述の原理を認定しつつ、尙ほ神の意識を否定せしは、これ彼が細密に是等の
 理由を講究せざりしによるのみ、彼亦唯物論に基き神には記憶なしと云へり、何とな
 れば實驗に照し吾人の記憶は、腦髓細胞の感得に係ればなりと、これ亦ハルトマン
 が夫の唯物論者の間に、普通なる機關の助動的作用と、「エーゴ」の主動的作用との

區別を混亂したる謬見に陥りたるや明白也、彼は須く先づ如何にして腦髓の細胞
 が、各個の感得を互に交通し、以て吾人が記憶と稱する意識中に於ける過去、現在の
 状態とを不斷連環せしめ得るやを解説すべき也、若し奇跡にあらざれば、腦髓の細
 胞は自らかゝる奇驚なる動作を爲すこと能はずとせば、吾人は之を以て物質的腦
 髓の動作に歸せず、却て超感觸的「エーゴ」に歸し、以て記憶の眞誠なる基址及解説
 を得たりと爲さざるべからず、果して斯の如くんば吾人の「エーゴ」の如く腦髓の
 牽束を蒙らざる神の「エーゴ」も尙記憶ありと云ふを拒否するの道理、夫れ將た何
 邊に存する耶、况んや世界を創造し、之を統御する完全なる智慧、ハルトマンの無意
 識は斯の如きもの也を以て、意識なき記憶なきものとするは、甚しき不倫の言にあ
 らざるなきを得ん哉、凡一定の目的に向ふ動作は、必ず其方便と目的、前者と後者と
 を連環結合するに基く、然れども斯の如きは意識の總合力に依らざれば、爲し得べ
 からざる所也、去れば余輩がハルトマンの所謂る全智なる「無意識」を以て、全く出來
 損にして、哲學も宗教も之に關涉するを要せざる幽靈と稱するも、敢て不當の言に
 あらざるべし。

若し神を以て自覺ある「エーゴ」なりと假定せば、余輩は敢て其中に含有する結論を避くべからず、自覺は唯一不動なる「エーゴ」と、變遷常なき諸の狀態及動作との相關對峙に基くとせば、神に於ても亦然が云はざるを得ず、然れども神の意識を以て、夫のアリストートルが神を以て想念中の想念と稱へし如く、單純なる想念にして、其容量ハ自己自身なりと思惟すべからず、斯の如きは諸の觀念、感情、慾望及動作の千象万態を以て、吾人の意識を充塞する活潑なる容量に代へて、最も空虚なる、最も不變なる抽象を以てする也、斯の如きハ神を以て「エーゴ」の最も完全なる模倣とせず、却て之を以て憐むべきの片影と爲すものなり、好し世界の理想を以て神の思想の容量と假定するも、更に助成する所あることなし、何となれば世界の理想は總の可能的目的の理想及永遠の眞理を含有する總體にして、許多の部分を有すと雖も、又是が爲に少くも理想的區別を有すと雖も、然れども是等の區別は唯これ理想的たるのみ、彼等は單に可能的實體の繪畫たるのみ未だ實體其者にはあらざる也、未だ夫の理想と意志の動機の関係より發する、滿塞せる活力に達する能はず、未だ神の意識中に於ける狀態の變化に達するを能はず、何となれば世界の理想的繪

畫は同様不變なれば也、されば吾人が自覺ある「エーゴ」の類似を以て直ちに神に適用するは果して正當なるやは疑問の蟠る點也、加ふるに一旦偏頗なる唯心的神の總念より論起する時は、決して現實世界を解釋すること能はざるべし、何となれば凡想念の限定は唯これ總念たり、如何にして單純なる總念は、自ら變じて實體たるやの問題につき、フヒテールが適評せし如く、未だ之に向ひて正當なる答解を與へたるものなし、此欠點こそ古代の希臘唯心論者が、純然たる理想若しくは神の總念に伴はしむるに無限非實在、可能性及其他の名稱を附したる物質を以てせし所以、又夫のスピノザをして本體てふ名稱中に、濶大と想念とを同伴せしめたる所以也、固より是等は更に其助援たるに足らず、何となれば物質を以て假令如何なる「エーテル」然たるものと思惟するも、想念に對しては尙全く外物、無關係物、固頑物にして、之を以て何物をも形造すること能はざれば、世界をも形造すること能はざるべし。

上述世界に關する難問を解釋するの道も、余輩が曩に神の「エーゴ」の觀念を講究するに當りて採撰したるの方向にありて存するとは、實に一奇觀と謂つべし、此難

問を解する爲に、必ず假定せざるべからざる神の意識の容量の多種にして且つ變易すべきものたる事は、單純なる神の想念によりて解釋し得られざる事、恰も單純なる世界の觀念より眞實の世界に遷る事能はざると同一なり、直接には吾人自らの實体なることを感識し、又間接には吾人以外の實体を感識するに、全く吾人の意志及其原動、受動の動作を實驗するに由れるは、吾人が批評的に自己を觀察して得たるもの也。されば神に於ても其實体を組成するの要素は、其意志にありと信ずるは、これ即ち吾人自己の「エーゴ」より類推して、神の性質に迷するの論法なり。然れども唯心論者の主張する如く、吾人は神の意志を以て、單に其想念の變形若しくは傾向なりと思惟するにあらず、神の意志は其「エーゴ」の特別なる作用にして、全く想念と異なり、否、寧ろ之と對峙せるもの也。それ想念は實体の模型若しくは其模寫を設くるの動作なり、唯意志は元實体にして總ての實体の本源たり、意志は觀念を待て始て其容量を明にし、觀念は意志を待て始て實体に達するを得、意志は想念をして實在に至らしむるの活能なり、想念は唯想念としては未だ能力にあらず、また能力は唯能力としては未だ想念にあらず、然れば能力なきの想念は、決して現實なる

實在に達する能はず、又想念なき能力は決して定限ある實在に達する能はず、前者を忘却したるはプラトニーよりヘーゲルに至る、總の唯心論の誤謬也、後者を忘却したるは、デモクリトスより現今の實驗理學に至る、總の唯物論の誤失也、此兩者を混合するの必要は、夫の「フ・ロソフラス、チヌトニコス」(Philosophus Teutonius)なるヤコブ・ベーナー(Jacob Bohme)の炯眼の始て看破する所也、去れば現今哲學者の方に務むべきハ、此眞誠なる實体——唯心的一元論を成就し、以て從來墻に闘ぎし兄弟を和睦せしむるの道を發見するにある耳。

然れども吾人は眞に神に意志ありといふを得るや如何、若し然りとせばこれ神をして相對的ならしむるにあらず耶、蓋し意志は一個の慾望にして即ち欠乏する處あるを示すそは、外界の事物に向ひて働き、始て満足を得るものあればなりと、これスピノザが唱へたる異論也、之をフヒテーの神の意識に對し提出したるものに比せば、更に劣らざる道理あるが如し、然れども余輩は是等の異論に遇ふも更に恐るゝに足らず、若し之を靜思默考して、從來吾人を指導し來れる推理法を忘れざる時は、余輩は直ちに此異論は一見其だ堅牢なるが如しと雖も、其實直接と間接、原來的と他

來的とを混亂したるに基くを看破し得べし、余輩は曩に神の意識に關する反對論を排斥するに當り、抑「エーゴ」の意識は純然たる原來的及直接の知覺にして、更に「非エーゴ」に關する意識に憑托するものにあらず、却て後者は前者に憑托するなるを以てせり、今や神の意志に對するの新しい異論を排斥するにも、亦同様の論法を用ゆるを得べし、吾人は吾人の自己に關する實驗の原來的事實として顯はるゝ、意志の直接なる内心の發動と、諸現象と等しく外界の事物に向ひて働く原因として、間接に吾人に知られたる意志の間接なる外形的發現とを區別せざるべからず、前様の意義に於ては意志は、ライブニツが簡明適切に解釋したるが如く、唯これ觀念に向ふの發動たるに過ぎず、之を積極の點より云はゞ、慾望なり、之を消極の點より云はゞ、厭惡也、前者には快樂の感情伴ひ、後者には苦痛の感情を伴へり、此内心の意志には此感情は密接に隨伴せり、是等の感情は慾望と、時に其前に顯はるゝ、觀念との關係を表證するもの也、此内心の意志及感情(余輩は之を外形的の動作より區別せんか爲に情若しくば心と稱すべし)は吾人の自己に關する原來的の實驗として直接に知覺するもの也、然れども此實驗に於ては吾人は尙未だ外界の教授に依らず

して獨り自ら存す、何となれば吾人の意志を動し、其感情を發するは、唯吾人の心中に存する諸の觀念の力なれば也、されば今此點に止り斯の如き直接なる意志の動作を以て、神にも尙ほ之ありとするは、是れ豈に不法の言ならずやと問はば、余は更に之に對する確實の異論あるを知らず、神にかゝる發動ありて常に其中に存する觀念若しくば思想繪畫に向ひて動き、又之に伴ふ感情ありとするは、果して神の性質を相對的たらしむるの假定といふを得る乎、余輩の見に依れば、只之に向ひて然と答へ得るは、自ら總の限定ある作用は、其中に實在者を制限するの分子を含むと故意に假定したるもの、みぢらん、これプラトー及スピノザの説に伴ふ誤謬にして、余輩は業に已に其妄謬なるを説盡せり、而して余輩は神の心に存すてふ意志及感情につき、今一層綿密なる研究を遂ぐるを得べし、夫れ神の意志は其智性の觀念を實成せんが爲に働く、故に此觀念は其意志に關係する所あるを以て之を稱して目的觀念と呼ぶ、是等是一個の組織的總体の中に結合せらる、何となれば彼等は皆神の「エーゴ」に於て、一の基址及目的に歸する所あれば也、神の「エーゴ」は此總体則ち世界の觀念に於て、自己の完全なる生

活の容量を描寫し且つ之を發達せしむる也。世界の觀念は神の智性に描かれたる、神の完全なる實在の反影なり、これ神の意志の目的たるにより、將に實成せらるべき完全なる世界の原型也。それ完全なる觀念を實成せん爲に働く意志は善の意志也。神の意志の働は専ら此點にあり、何となれば之が目的たるものは、唯其智性に描かれたる世界の觀念に外ならず、されば余輩は完全なる善を以て神の意志の根本なる限定と云はん。又神の意志は原實體なれば、原來無制無盡の能力也。故に余輩は之に附するに其目的を實成する完全なる能力を以てせん、蓋し總の力は唯之より發したれば、其目的を成就するに、敢て他に之を妨くるの力あらず、神の意志は其目的を實成し得るを確知し、亦其目的の甚だ重要なるを感得するにより、之に一種の快樂を伴ふ故に意志には必ず圓滿なる幸福の感情相伴ふ也。斯く神の意志及智性の内心の性質及相互の關係より發する、是等の限定は則ち神に於ける必然的不變の屬性なりといふを得べし。

然れども此内心の意志と、其外形の舉動に依て顯はるゝ意志の動作とは、余輩が上述せし如く必ず綿密に區別し置かざる可からず、此區別は如何なるものなりやは、

論 神 由 自

論 帝 上

余輩は之を自己の實驗に照して知るを得ん、吾人は敢て其欲する所を實際に成就する能はず、又實際の行爲を内心に於て欲せざることあるは、これ意志の動作に内外の區別あるを示すもの也。而して此兩側の關係につき吾人の注意を要するは、吾人が直接なる實驗に於て確知する所は、唯内心の意志、感情の發動あるのみ、其動作に顯はれて働く意志に至りては、吾人が身軀の運動を知覺し及是等の運動に依て外界の事物に發生する、諸の變化より生ずる繪畫の媒介によりて漸く知るを得、又他人の意志の動作の如きは、吾人は、漸く二重の媒介によりて之を知る、則ち己の身体の動作と己の意志發動の關係より、類推して他の身軀に於ける動作も、亦之に對する意志の發動其心に存せざるべからずと結論すること也。而して意志の内心の動作は、如何にして吾人が耳目に觸るゝ結果を生ずるを得るや、余輩は其過程に就きては、殆ど無知と答ふるの外他に辨辭あるを知らず、唯知る意志の働は直ちに外形に顯はるゝものにあらず、必ず常に神經及筋肉の機關の複雑なる運動に伴ふ所たり、是等の運動は意志の最も小なる動作、譬へば文字を記すにも必要ある也。然らば如何にして意志は是等の運動を起すやと問は、意志は是等の身体の機關を唯

其機械として使用すとは、これ普通の見解なれども、此語は唯其外相を形容したるまでにして、其實を解するに到らず、否、却て人をして誤謬に陥らしむるの患あり、筆は文字を寫すの機具たるや、猶手に等し、然れども意志に對する前者と後者との關係に至りては、其差甚だ大なるものあり、前者筆の如きは自動の力なく受動的に働くのみ、然るに後者則ち神經及筋肉の機關に至りては自動の力を有す、各部其働に必要なる力を消費す、故に久しく是等の機關を使用する時は、忽ち疲勞を覺ゆるが如きとあり、されば這は寧ろ單純なる内心の意志が身軀諸機關の種々様々なる特殊の作用に自ら變形し、是等の機關は一致和齊して、各其必要の動作を爲し、以て内心の意志の動作を實際に發現せしむると云ふの勝れるに如かずと信ず、然れども亦意志の内心の動作は、之を實際に成就する諸機關の諸動作中に混入して、其形を失するものにあらず、意志は常に自覺ある、「エーゴ」の深奥に坐し、一切の助動的動作の基趾及目的となりて、彼等を支配しつゝあるもの也、然れども此基趾、目的なる意志は、自ら其外形的動作中に混入し、諸機關の動作と共に運動するが如きものにあらず、意志は猶軍隊に於ける大將の位置の如し、深く帷幕の中に坐して三軍を進

退し、勝を千里の外に制することあるも、自ら軍卒と伍し一舉一動の勞を共にする者にあらず。

今是等の所論を以て、神の意志の發現に適用するに至り、吾人は其類似の頗る適切にして、亦以て大に學ぶ所あるを知る、吾人の内心の意志は決して自ら直接に外に顯はれず、唯間接に身軀の諸機關の諸作用に變形して顯るゝが如く、吾人は神の内心の意志に於ても之と同様に假定せざるを得ず、神の意志に於ても其動作を爲すや、必ず其無限絶体なる能力を、夥多の有限相對なる諸能力に變形せしめざる可からず、是等の能力は各相對的獨立を有す、(元子若しくは意志中心)而して各並等にして又相互の交叉運動の關係を有す、然れども彼等は一致共和して神の唯一なる意志の發現を成就する也、神の意志の動作は諸の相對的能力の交叉運動に依て成就す、固より神の意志は自ら其運動に混入し、相對者の交叉運動に於て彼等と共同する一部の動作を爲すものにあらず、俗間の所見たる絶對なる意志若しくは神の全能は、自ら一個特殊なる原因として、世界に働くといふが如きは、決して嚴密なる思想の許さざる所なり、凡動作は目的に向ひて發し、之に變化を興んと欲す、然れども

百六十二

彼等已に獨立の存在を有する限は、必然之によりて反動を惹起し、多少其反對を實驗せざるを得ず、故に一切の動作は若し之を嚴密に講究せば、皆悉く交叉運動たるや明なり、是に由て之を觀れば、總の運動の直接なる主動者は、必ず特殊の實在者にして他の獨立なる實在者と平等の位地を占めざるべからず、即ち相對的原因にして、絶對の如きは決して自ら働くものにあらず、寧ろ總の相對者の交叉運動の唯一なる基趾として存する也、今余輩が自己の内心の意志と自己の身軀の機關の作用との關係より推究して新に得たる結果は、既よ永久思想界に知了せられたる所、固より其景狀種々雜多にして、或は抽象的一元説と關係し、恰も神の意志は諸相對者の景狀及作用の中に消失し去りたるが如きもあり、或は是等相對者の景狀及作用は神の中に影の如く消散したるもあり、然れども若し能く余輩が從來使用し來れる自己の「エーゴ」(自我)より類推するの論法を固執するに於ては、再び此誤謬に陥るの患なかるべし、「エーゴ」は完全なる自覺を有し、始終其唯一及自個同一を保持する者なり、一方に於ては其複多なる作用を自己より明瞭に區分し、是等を以て單に其目的を達する方便たりと爲すあり、「エーゴ」は常に其觀念、慾望及動作の

中に存在し、又同時に彼等の上に位し、其彼此の間を區別し、或は之を自己の中に結合統一するもの也、又自己の生活中に身體諸機關の助動的作用を含有すれども、彼等をして其交叉運動を爲すに必要なる相對的獨立を失はしめざる也、斯の如く神の「エーゴ」は完全なる善、力及幸の中に自ら其獨立なる實在者たるを自覺す、然れども同時に交叉運動ある諸勢力の總軀、若しくは世界を以て自己の發現の爲に設けたる方便とし、之を自己より區別す、總て是等の相對的勢力の中に彼は自存すれども、亦同時に彼等一切の上に位し、彼等の間を彼此區別し、或は之を自己の中に結合統一するもの也、斯の如く神は同時に自存自立して自らを一切の相對者より區別する者、又萬物を自己中に有し、一物も自己以外に置がずして一切を網羅する總體なり、彼は世界の中において消失するものにあらず、又之より除却せらるべきものにもあらず、彼は即ち世界を以て自己の思想及能力の發現したる組織體として之を其中に網羅するもの也、これ即ち眞誠、完全なる唯一神論にして、夫の超然神論及凡神論の抽象を二ながら遙に超越したりと信ず、夫の人性てふ總念の如きは果して上述の神の性質に適用し得べきや否やは、各自此字句の用法により、其見解に

任じて可なり。實際に於てはかゝる總念を神に適用するものにして、神の萬物を網羅する絶對なるを傷け、若しくは他の人性と並等なる一個の特殊者(これ普通に神學者の陷る誤謬)と爲さず、又た斯の如き總念は神に適用すべきにあらずと主張するものにして、神の「エーゴ」たるを傷けず、彼をして全く空虚なるものとなし、實体なく性質なき茫漠たる凡神の幽靈(これ常に哲學者の陷る誤謬)と爲すに非ざれば、人性の適否は別に關する所に非ざる也。

上述神の總念に關する詳細の議論及其總念は、果して正當なりや否やは、世の神學者が稱して神の性質なり(若しくは屬性)といふ、諸の觀念を講論するの段に至り愈々明白なるを得べし。然り是等の屬性は元と神の性質に關する哲理上の思辨より發したるにあらず、却て神に關する宗教的意識より發せり。然れども哲學上の神と宗教上の神とは元と同一なるものにして、唯これを二個の側面より了得したるに過ぎざれば、神の總念に關する諸種の理論と、其性質に關する宗教上の主説とは、必ず之を和一ならしむるの道ありと信ず。理論に基く神の總念は、宗教心より發したる是等主説の正當なる基礎となるを得て、始て其誠なるを證明す、また神學上の主

説ハ嚴密なる理論的總念に照し、其中に含有する思想の正否を糺し、以て始て眞理に適ふに至る。

右の兩者は宗教心にありては相連環して離隔せられざるもの也。絶對至高の勢力として神に委頼するごと、自己と同性なる心靈的實在者として、神と交親せんことを望むは、これ則ち宗教心に於ける兩輪なり。神の屬性に關する宗教上の主説に依れば、一方に在ては神は世界を支配する自由の力にして、神自らハ世界の制限以外に在り。又た他方に於ては神は其智慧及意志の點に於ても完全なる靈也。第一の側面に於ける限定は、全能、永遠及遍在なり。神の力は遙に人類の上に位し、人類の如き制限を受くるものにあらずとは、これ世間一切の宗教に於て等しく唱導する神の特質也。往古幼稚なる宗教心に於ても、未だ眞誠の全能てふ總念を知らず、其自然神を以て尙相互に制限し、或は運命若しくは物質の如きを以て、制限せらるべきものと思惟したる時に於ても、神の力の遙に人類に超越する所あるは、彼等が信して疑はざる所也。右の如き自然的制限の殘物は、希臘の唯心的哲學に於ても、心靈及物質の二元對峙と變相して顯はれたり。固より物質の如きは如何に之を精粹すればと

て、尙非理的にして、神の力と決して和順すると能はず、獨リイスマエルの豫言者の信仰に至り、神は全能なりとの思想、全勝を占めたるか如き觀あり、彼等は神を以て唯一無限の勢力、万物悉く之より發生したりと信じ、神は何物にても其嗜好に従て創造し、一の材料もなく、一の機械をも要せずして、唯其意志と詞とにより宇宙を形造し、又其意に従ひて之を存在せしめ得ると信じたり、(詩篇第三十三篇第六節及第九節、第一百五篇第三節、第一百四篇第二十九節)斯る深遠高尚なる宗教的感情は、余輩が曩に論述せし神の總念と全く符合する所あるを見る、何となれば余輩は既に神の意志を以て原實體及衆實體の根原なるを主張せり、又此意志の容量たるや、神の觀念則ち其目的を顯はす詞たるに外ならず、而して此觀念は意志の容量をして、定限あるものとし、其意志は是等の觀念をして實現に至らしむるものと云へり、また神の意志は其儘直接に發現するにあらず、自ら設けたる諸相對的勢力により、間接に發現する也、故に各種の結果は其原因、相對的原動及反動の連環中にあり、而して此連環の原因は則ち神の意志に在りと主張せり、是等の思想は固より宗教心と疎隔したるものにあらず、詩人詩篇第一百四篇第四節歌ふて曰く、神は風を以て其使者と

爲し、炎を以て其役者と爲すと、かゝれば物質的勢力も亦悉く神の意志を實行する第二の原因たる也、夫れ然り、然れども直接なる宗教心は神の全能を實行する第二の原因に就きては深く注意することなく、寧ろ數々彼等を看過し、自ら實驗せる諸の結果を以て、直ちに神の直接なる業に歸せしめんとす、殊に其實驗する所にして著しく彼等の宗教心を煥發するが如きことあれば、彼等は神自ら直接に之を爲せりと信じて疑はざる也。

然れども宗教心は相對的、第二の原因に、特別なる注意を置かずといふは、既に其中に於て宗教心は彼等を明に否定するものに非ずとの意義を含有す、唯其主とする所は總の事物の基趾は皆悉く神の意志にあるを確知せんと欲するにあり、宗教は是等の事變果して相對的原因に由るや否やは、敢て自ら之を定むるを要せず、只神學上の理論に至りて其判斷を要するのみ、神學上の理論は宗教心の働を解釋してこれ即ち神の全能は或時は第二の原因に依り、或時ハ之に依らずして非常、無碍、絶對的に働くと云へり、然れども斯の如き區別を神の動作に附するは、必竟其不熟練なる思想の結果たるに過ぎず、何となれば神の全能の動作は、一方より之を見る時

百六十八

は絶對無限也。蓋し神は自己以外の事物には更に制限せらるゝ者にあらず、只其意志の力によりて世界の進行を統御するもの也。また他方より見れば神の全能の動作は有限相對的也。蓋し世界に於ける各種の結果は、諸の相對的原因の交叉運動の連環に制限せらるゝ所あればなりとは、已に説明を待たずして明白也。神の全能の動作に於ける自由と必然の區別も右と同様にして、神の動作は幾分か自由にして亦幾分か必然なりと思惟すべからず、却て神の動作は常に自由なり、蓋し其動作は神の獨り自ら限定する其意志の自動發現たれば也。然れども之と同時に神の動作は全く必然的なり、蓋し神の意志は不定、偶然、專恣なるものにあらず、却て其理性の想念に依て常に限定せらるべきものなれば也。神の理性の想念は全く合理的に相連環して一大組織を爲すものなれば、則ち永遠の眞理にして神も亦之を變易すること能はず、何となれば之を變易せんと欲するは、神に於る自家撞着たるを免れざれば也。神の全能なる意志は其全智なる理性によりて限定せらるゝなりとは、これ神に關する總の教義の要點たり、茲に到りて哲理と宗教心とを、全く符合するを得、蓋し宗教心は専ら合理的なるを悟れども、其主張する所に含蓄する結論を、正當に

百六十九

敷衍するの力を有せず、又之を爲すを欲せざる也。

宗教上に主張する神の永遠 (Eternity) たる總念には、神は時間の制限以外にあり、神は無始無終にして其完全なる本體には、一の變易あるものにあらずとの意を含有す。然れども時間は神に向ひて虚空なり、其意識には一の變化なしとの意義を含有するものにもあらず、然れども世には往々右の解釋を宗教上の神の永遠たる總念に下したる神學說なきにあらず、余輩は之を以て不當の解釋と思惟せざるを得ず。何となれば余輩は之に甚だ重大なる難問の纏綿するを見れば也。若し吾人の本體の同一不動に關する意識は、吾人の状態及動作の不斷なる變化の意識と相關して始て起るを得たりとせば、余輩は神に於ても其状態の變化の意識に關せずして、其永遠なる本體を自覺する力ありと思惟するを得ず。神の意識の容量は不變不易なりと假定するは、是れ豈に神の自覺の眞誠なるを大傷するものにあらず哉。加ふるに右の如き假定を爲す時は、余輩は神は時間中にある世界の進行に付て、活潑なる利害を感ずることありとは、容易に信ずるを得ず、これ豈に神は世界に就きて誠の意識をも有すること能ふものならん哉。世界に關する神の意識をして眞實ならし

めんとせば、彼は現世界の實際を知らざる可からず、現世界は時間の中に進行しつつあるもの也。故に過去の状態は神に於ても過去として知られ、其記憶に保存せられ、將來の状態は神に於ても將來として知られざるべからず。若し神に時間なしとせば、吾人は左の二個の中必ず其一を撰ばざるべからず。(一)神は時間中なる世界の生活に對しては、全^く痛痒を感ぜざると、「エヒキユロス」(Epicurus)の神に於けるが如し、然らば彼は既に宗教の神又は時間中に存する世界の生活の原因たる能はず。(二)時間は世界に於て眞實なるものにあらず、時間は唯吾人の視神經の欺罔にして、唯人類が事物を量るの一方式のみ、固より實際に斯の如きものあらずと。後者は現に批評哲學の主張せし所なり。然れども其主説に伴ふ難問頗る重大なれば、余輩は容易に之を正當なりと甘諾するを得ず、殊にカントの如きは時間の理想的なるを主張しつつ、尙意識の状態の連続よりして、外界の實躰なるを設けて憚らざりしを見れば、胸裡愈々疑懼の鎔けざるを覺ふ。固より時間は他に委託せずして存する眞誠なる實在者にあらず、時間は或る實在者に於ける状態の連続する形状に過ぎず。然れども已に此連続ありとすれば、其連続は眞誠なるものにして

單純なる假觀にあらず、蓋し諸の状態ハ明瞭に其間に區別あるものにして、之を同一に混亂すること能はず、又其發現は順を次て來る者なれば也。然れどもかゝる諸の状態の經過中に尙ほ其の主觀たる實在者の存するあり、而して是等の状態の經過は、其實在者に於ける變化の連續則ち状態の間斷なき變遷の景狀たり、余輩が稱して時間といふは、状態の繼續なる此形式を指すのみ、されば時間は造物者及被造物の生活の基礎を形造するもの也。然れども茲に大なる相違あり、被造物の生活にありては、各實在者の状態が、之と全く獨立なる他の實在者の状態と、互に相關し相倚りて以て進行するものなれば、各個實在者の時間は、通有時間と原由の關係を有す。故に各個實在者は時間の中に其制限を受る也。神の生活に在ては、則ち然らず、其諸の状態は神以外なる他の實在者と、並等並行するものにあらず、彼は自己中に相互の關係を有する、全實在者の状態を含抱す、是等は即ち神の不動なる實在の發動たり。彼は又是等の一切の状態を以て、其全躰運動の中心若しくは永遠の基礎たる自己中に結合するもの也。故に神ハ時間の中にあらず、時間は其中に包括する一切と共に神の中にあり、神は則ち永遠の主、永世の王也。神の永遠と時間とは、互に相容

れざるものと如く思惟するハこれ必竟抽象的思想たるに過ぎず、眞實なる具體的
思想に依れば、神の永遠は時間をも其中に含有し、之を支持し之を支配するもの也。
神の永遠なる實在は間斷なく進行する時間の不動なる基趾として、萬象變化の不
易なる理法に顯はる、神の實在は、現象流轉の不動なる心軸、一切の不變なる眞理及
世界秩序の永久を保險するもの也、故に宗教心は神の永遠を以て其忠實の基本な
りと思惟し、神に憑依し神に信任し、以て我信仰の岩石及隱所と爲すは、必竟此永遠
に基く也。

宗教心の直接に主張する神の偏在 (Omnipresence) は、其始め只神の働きは空間の制
限を受るものにあらずとの、消極的主説に過ぎざりしか、る主説は神を以て或る
一定の場所に置き、或は空間中に運動するとの思想と抵觸するものにあらず、古代
の素樸なる宗教心に在ては、神の存在及び運動を右の如く思惟せしは甚だ當然に
して、是れ夫の舊約書に於ても吾人が多く認る所の見解也、後世に至り反察力稍進
歩するに至て、始めて神は或る一定の場所に在るものにあらず、空間とは全く獨立
して、總ての場所に同時に同様に在すもの也、然れどもこれ其の形骸が空間の全部

に彌蔓するにあらずして、何の處を問はず各部に其全軀を有するなり、何となれば
孰れの邊孰れの處も神の中にあればなりと思惟せり、此思想は之を了解するに甚
だ困難なり、然れども其困難を除却するに最も容易なるの道は、全く空間の眞實な
るを否定するにあり、若しカントが教えし如く空間は、唯これ吾人が物件を視觀す
るの形式たりとせば、神の爲に空間なる者存するにあらざるや明也、然れども吾人
は斯の如き假定を爲すの權理あるや否や、固より空間の觀念が吾人の心中に發し
たるは、吾人自己の意識の作用により然るなり、意識は吾人の視覺及觸覺により、同
時に得たる諸種の繪畫を以て相互の外なる一雙の物件なりと思惟す、然れども一
且吾人の空間に關する觀念は、其起原斯の如く主觀的と許すも、吾人は之に依て空
間其物も亦純然たる主觀的と爲すを得る耶、幾何及求積學の理法、或は機械及天文
學に於ける空間運動の理法等は、其始は吾人自身に作爲したるの思想たるに過ぎ
ず、されば彼等も亦吾人の思想中に在て眞實なるのみ、現實の世界に在ては、かゝる
理法あるべきにあらずと爲し得る耶、夫の天文學者が空間の關係及運動の理法に
基き、測量したる天體の現象は、一秒時間をも違へずして、果然其豫測に的中するは

世人が熟知する所なり、是豈に空間は吾人が事物を觀する主觀的の景狀のみならず、また其物自身の現に存在するの形式たるを實驗上より證明するものに非ずして何ぞや、然れども余輩は空間を以て他に關係なく、自存獨立する實體なりといふものにあらざるや、時間に於けると同一也、空間は共立して互に交叉運動の關係ある實在者に於ける客觀的の關係也、空間は獨立なる各個の實在者の相互の關係の通有基趾の形式なり、人或は云はん、關係の形式は唯之を認る意識の中に存在するのみと、然り、然れども茲に觸起するの疑問は、其意識とは果して何物の意識なるや、總の實在者間に存する關係は、我意識の作用のみに基くにあらざるは、敢て言を俟たず、又各個實在の意識の作用にもあらざる也、蓋し是等の有する意識も、單に主觀的なるに過ぎず、然らば總の實在者の意識は、彼等が相互の間に於ける客觀的の關係の基礎を形成するといふを得べき乎、是等の關係は寧ろ外より彼等に授けられたるもの也、彼等は始より此關係中に立つものなれば、假令共同ありと雖も、豈に能く之を形成し得るものならん哉、故に空間の關係の形式の爲には、余輩ハ之を設け得るの意識を要する也、然るに斯の如きの意識は、各個實在者に之を發見するを得ずと

せば、余輩は空間の關係を設くる作用ハ、直ちに元エーゴ（即ち神の意識に歸するの外他に道あるを知らず、かく空間は吾人が物を觀する主觀的の形式なれども、同時に萬物の間に存する客觀的の關係なりとの謎語を解釋するに最も簡明の道は、空間を以て神が物を觀する原式、或は神の理性が相對的諸勢力或は意志中心を分別し或は結合する原式とするにあり、茲に余輩の記憶を要するものは、空間を稱して神の感受官(Sensorium Dei)と云ひしは、夫の偉人ニールワトン(Newton)に外ならざるの一事也、然れども空間は唯相對的實在者が並等並立する存在の關係なれば、彼等は空間の中にありといふべし、然れども神は空間の中にあらざる、また空間の外にもあらざる、彼れ自らは無空間なり、否、寧ろ自ら空間を設けたる也、即ち空間中の一切を互に相關係せしめ、又之を以て自己の中に組織的の總体に結合せるもの也、意識ある神の遍在(Omnipresence)て、總念には、已に遍通(Omniscience)をも包括す、蓋し前者は後者と伴ふにあらざれば、宗教上に於て更に其の用なし、無意識なるものは假令如何に世界に遍滿するも、宗教上に於て何の關係か之れあらん、而して宗教心は神の遍通を以て、單に其の知識の無限といふ意義に止まらず、其知識は直接な

るとの意をも含む。即ち神は反察力の媒介に頼らずして、萬端の事物を洞察し、又直接に知見するものなり。然れども普通に稱する如く、神を以て世界以外に立つ一個の實在者と見做す時は、余輩は神にかゝる遍通あるを認め得ざるべし、何となれば吾人が知る直接の智識には唯一個の形式あるのみ、即ち吾人の心中に存する「エーゴ」が我意識の容量を知るの形式のみなるは、吾人が拒否すること能はざるの事實なり。吾人以外の事物は、之れを直接に知る能はず、唯間接に吾人の意識に與へられたる、諸の記號を解釋する思想の作用より知るを得べし。是より推論するときは、若し普通の見解(抽象的有神論)に従ひ、神を以て天外に存する一個の實在者にして、世界の實在者と並等對峙すると思惟するときハ、神は世界中なる萬事物につき直接なる知識を有する能はず、吾人が自己以外の事物を知るが如く、反察力の媒介に依て、始て其知識を得るものなるや明白にして、異議を挾むの餘地なし。果して斯の如くんば被造物の内心の觀念及状態に關する神の知識は、是等に關する吾人の知識と等しく反察力(歸納法)に依て漸く得らるべきものなれば、吾人の知識と等しく、必ずしも之を以て無謬無缺といふを得ず。然れども神は世界を包括する總体な

り、彼の外には一物の存するなく、彼は相對者を自己の中に網羅し、彼と彼等との關係は苟も吾人の「エーゴ」と、吾人の意識中の種々なる容量との關係の如きものと假定するときハ、吾人は必らず總の世界は神の爲めに、其の直接なる直覺の目的たること、恰も吾人の意識の一小世界は、吾人が「エーゴ」の直知するが如しとの結論に至るを得べし。總て特殊なる作用、知覺、感情、動作は、相互に對しては各自獨立にして各自閉塞するものなれども、彼等を統一し、彼等一切の中に同時に全在する「エーゴ」に對しては、彼等は全く開放して知らるゝ也。斯の如く世界の相對者も相互に對しては各自獨立して閉塞するが故に相互の知識は間接にして不完全なりと雖ども、是等を自己の意識に統一する神の「エーゴ」に對しては、彼等は全く直接に開放して知らる。實に現象のみならず、彼等が心中の奥底に潜む思念願望も皆悉く神の直觀する所にして、一切の被造物の歎歎歎息は皆悉く神の心に通達す。彼は一切の心とともに感じ、一切の良心と共に知るものなり。吾人の良心は神と其の知識を共にするが故に、一種異様の權威と勢力とを以て或は慰藉し、或は譴責す。されば神に關する總の總念の眞偽を試むる道は即ち此の點に在り、若し其の總念にして

右に述べたる人心の最も深く、又は最も勢力ある實驗を説明すると能はずとせば、(超自然神論及凡神論に於ける神の總念は之を解説する力なし)これ則ち其の誤謬を自稱するものにはあらざる耶。余輩は前條説來るが如く、神は意識ある「エーゴ」なると、其萬物を網羅するの總念なるとを結合し得る、眞誠なる唯一神の神の總念は、此試定に適應するや明白なりと信ず。故に獨りかゝる總念のみを正當なる神の總念なりとす。假令哲學者は之を冷罵し、神學者は之を駁撃して止まざるも、これ唯霎時のみ、茲に提出したる神の總念は、早晚其光彩の陸離たるを見るに至らん。

神の遍通と其全智。(Perfect wisdom)との關係は、夫の萬の事物を思觀するの智慧と、其の達せんと欲する目的を畫するの智慧との關係に等し。固より、此兩者は同一にあらざ、蓋し神の遍通なる思觀の目的(惡も亦其中にあり)皆悉く其全智の畫する目的といふものあらん哉。神の全智の目的とするものハ、現實者の摸寫にして、時間の中なる彼等の變易と共に變易するものにあらず、却て方に現實たるべきもの、摸形及理法たり。故に其の目的は神の意識の不變なる容量に屬し、神の理性の永遠の眞理

を形成するもの也。彼等は神の意志に其様々なる容量を與ふれども、固より意志の爲に制限せらるゝものにも亦之に憑托するにもあらず。神に於ては其の實成せんと欲する目的を畫するは、決して專恣なる撰擇にあらず、神の意志ハ其理性に依て思念せられたる、永遠の目的を成就するの外は、他に何事をも爲し能はざる也。かく神の智慧により豫め思考せられたる所は世界秩序の理法、及摸形(生活の形式)中に顯はる、而して是等生活の形式には種様の階段あり、また其間には一定の組織ありて互に相連環す、且其究極は始より自然界に於ける生活の發達が常に進向したる所の終局なる人類に達するにあり。又歴史の目的は人類に賦與せられたる知識、感情、意志の如き諸能力を愈々完全に發達せしむるにあり。然り、人類の動作は漸次に合理的に趣き神と等しからんと、及彼と交親せんとを實際に成就しつゝある也。されば一方に於ては世界の最大目的は人類にあり、則ち神の完全なる本質の摸寫たる眞誠の人性を實成ならしむるにありと云ふを得れど、他方より見れば其目的は神にあり、而して神の榮光は其完全なる本質を人に顯はし、又は人に依て顯はすにあり。世界に於ける總の發達は始より此最大目的に向ひ、自然及歴史に於ける萬事

萬物は皆悉く此發達を間接又は直接に助成するもの、如し此の事實により世界に於ける神政は最も完全なる智慧に基ける事を顯はすもの也。夫れ神の智慧の完全なるは唯此一點にあり、神に於ては或る特殊の目的を達せん爲に、更に特殊の方便を設くる必要なし、蓋し世界の全體は宛然一個の有機體の如く、其中なる諸の交又運動的作用により、他の干渉を要せずして、自ら其目的に達するが如し、これ即ち神の智慧の完全なる所以、而して吾人は右に類する者を、吾人自己の小天地に於て見るを得るなり。

若し神の完全なる智慧は其理性が完全なる目的のみを思念するにありとせば、神の至聖(Holiness)彼の意志は是等の完全なる目的のみを成就するにありと謂つべし、神の理性は眞誠なる目的の知識に關し、更に疑惑する所なきが如く、彼の意志は是等の目的を成就するに於て更に動搖躊躇する所なし、各個の意志の個々特殊なる目的と、合理的世界秩序の總體の通有なる目的との間に於ける對峙、吾人の意志をして嗜慾と義務、自由と理法の間在て、常に煩悶せしむる對峙は、更に元「エーゴ」の意志に存せざるや、明々地なり、蓋し元「エーゴ」は他の許多の「エーゴ」と共に並

立する特殊物にあらず、神は即ち一切を網羅する總體、故に彼に於ては其の自己の目的と一般の目的とは全く相符合する也、斯の如く獨立自由なる意志の目的と、理性の通有なる目的と全く相符合し、其の間秋毫の差異を許さざる如きは、獨り神にして始めて然るなり、故に若し嚴密なる意味によりて之を云へば、神の外世に一の善あることなしとは、動かすべからざる眞理也、是等の點より考ふれば、善は神の意に適ふが故に之を善と爲す耶、或は善なるが故に神の意に愜ふとするかとの頗る喧囂なる煩瑣學派の大問題に答解を與ふるハ敢て難事にあらず、かゝる疑問は唯これ係蹄のみ、その基く所神の意志と善、則ち合理的通有なる目的との間には、眞誠に差違ありと假定せし誤謬にあるのみ、若し果して右の如くんば、善は神の意志の下に位せしめ、即ち善は單に神の惠恣なる限定に陥り、或は神の意は善の下に位し之を支配するの理法其上に存し得ざるに至らん、然れども斯の如き反對は唯これ神を以て一個の特殊なる意志にして、其私の目的と世界總體の目的とは、相異反したると思惟したる誤解より發したる也、右に述べたる煩瑣學の係蹄も、一旦神に於ては其の意志を善の上にも、善の下にも置くこと能はず、何となれば彼には善と異

なる意志なく、彼の意志の向ふ所は、只管に世界總體の合理的目的を成就するの外なく、而して其目的は即ち彼自身なるを覺悟せば、全く其贅辨なるを知らん、茲に至りて一般世に流傳せし難問、若し道義法を以て神の意志に基くとせば、是れ豈に人類の道理主權と抵觸し、即ち吾人が理性の自主權と支拮するに非ずやとの難問は始て正當なる解釋を得たりと信ず、必竟此難問は神の意志は其理性に反し又神の理性は吾人の理性と全く異なるもの、如く思惟する二個の假定に基けり、然れども前者の誤謬なるは、余輩既に之を辨述せり、後者に至りても其誤謬たるや更に前者と撰ぶ所なし、世界には諸種の理性あるにあらず、只唯一の理性則ち神の理性に關與するの程度に異殊あるのみ、理性の思念する永遠の眞理は、有ゆる實在者に於ける其實在の根法也、又過去、現在、未來を問はず、總て思想力を有する實在者に向ひ思想の根法たるもの也、若し吾人が理性中に管に論理の理法のみならず、道義の理法をも共に存在し、此兩者殊に道義の理法は吾人が理想及實際的行動の爲に、客觀的の規法たるを悟るに至らば、吾人は我理性の内心の律法に於て、神の合理的目的と其意志との結合の發現なるを認めざらんと欲するも得べからざる也、則ち吾人

の理性は神の至聖の發現也、此感覺は左の事實を覺知するに隨ひ、倍々其深きを覺ふ、吾人は管に一個人の中に於てかゝる規法の存するあるを認るのみならず、其の規法の動作により、社會に於て一般に通ずる道義法起り、苟も人性の正當に發達したる邦土に在ては、道義に基く諸種の律法及習慣等も漸次に發達するもの也、夫の諸國の民人が其の國法及習慣等を以て聖と認め之を神の權威及保護の下に置くが如きハ、これ實に眞理に基く行爲と云はざる可からず、固より其景狀に至りては誤失なきを保せず、彼等は之を以て神の直接なる奇跡的發現に出たりと誤想し、其心理的及歴史的段階を經、自然の方法により是等の慣習法律の興起發達したるを看過せり、然れども是等の看過は、之を夫の詭辨論者及懷疑學者が専ら重を自然的段階に置き、却て總て道義法には神性なる基礎あれば、其性質も神聖なるを非定したる、大なる誤謬に比すれば、九牛の一毛だに過ぎざる也。

神の至聖は道義的世界秩序の根本として顯はれ、神の至義(Righteousness)は其秩序を保存し、且つ各個人に對し其權威を認得せしむるものとして顯はる、抑有機體には其諸の動作と唯一なる靈との關係よりして、茲に一種の自保自療の力あり、其正當

なる作用を妨害し、或は阻遏する事物に反動し、以て其体内の不整頓を醫療せんと欲す。斯の如く道義的世界、秩序の中にも、諸の交叉運動ある意志と、神の唯一なる合理的意志との原由及結局原因的の關係に基き、各個人に於ける意志の不法なる傾向、即ち惡に對して反動する勢力を有す。此勢力は世界總体の通有なる目的則ち善の目的を護持するものにして、假令各個者の反對あるも、彼等に對し又は彼等に憑て其目的を達せんとするもの也。詳言せば神の意志は良心の聲となりて直接に各個人の道義性に顯はれ、彼等を判定するにより、人類は自己の中に己を呵責し己を分別するの苦痛あるを覺ふ。宗教心は此を以て人類の自己と神の自己との間に分隔を生じ、神と活潑なる交親を絶たれたるが如く思惟するは實に至當の事也。右に述べたる神の至義より發する内心の判定に加ふるに、總て惡なる意志に對する外形の反動あり、而して是等の反動は世界の自然的及社會的秩序より來る。自然を暴殄する時は、其暴殄せられたる局部を破毀せらるゝ事に於て罰を蒙り、他人を傷ふ時は社會慣習若くは律法の制裁を受く。惡人の企圖は到底其目的を達する能はず、却て互に之を打破し、以て善人の用具と變するは其常態也。蓋し世界に於て其生活

を全ふするものは、獨り生活の理法に和順し得るものに限られたれば也。故に惡は亡び善の榮ふるは、神の至義の世界に於て無碍的に成就せんと欲する所なり。人類は内心惡に従ひ不法の目的を成就せしめんと欲する限は、神の義は常に自己に反對し其責罰の反動は自己に歸するを感得す。彼れ等は又自ら常に其責罰の下に立つを感得す。固より其罰を認るもの、景狀は、各人各個異同なきを保せずと雖も、斯の如きは唯人類の主觀的想像に基くものにあらず、實に恐るべき客觀的の眞理たるや明也。然れども斯の如き惡の意志を責罰し、將た之を判定するの反動は決して終局的の目的にあらず、唯神の全智なる政治の唯一の目的たる善を成就する方便たるに過ぎざれば、神の責罰は罪人を亡さんが爲にはあらずして、其罪科を除かんが爲也。故に罪人にして一旦神の責罰を實驗し、自ら罪を脱し其意志の不法なる傾向を變ずれば、惡に對する神の至義は既に責罰判定の力を除かる、何となれば彼罪人已に神の義罰の目的たる罪科を有せざれば也。神の至義は始終無變なり、唯その變易する處は人類が之に對する關係也。彼等が惡を取捨する相違により、神と對する關係も亦自ら變易する處あり、余輩は後段に至り神人の關係に於る變易の事情につ

き論ずる所あるべし。茲に至り何が故に是を變易と稱し、或は公義と思惠との差異あるを見るに至るやを知るべし。然れども神の義は其本質より云へば神の愛若しくは恩惠と抵觸すべきものにあらず。何となれば神の至義は神の善なる目的則ち愛の律法を成就せんと欲する方便若しくは其機具たるに過ぎず。神の意志が善の意志たるは、嘗に吾人の意志に向ひて善を要求するの故にあらず。吾人をして其善に關與せしめ、以て吾人の生活の容量、吾人の「エーゴ」の力及善とならしめんと欲するにあり、これ神の愛(Love)てふ屬性に含有する所なり。余輩は之を稱して神に於ける完全の連鎖(Bond of Perfection)といふを得べし。而してかゝる觀念は始より宗教心の感識せし所なり。固より當初は其感覺茫遠たりしや明なり、然れども人若し神を以て己に幸すると思惟せずんば、争でが之れと交親し、且つ之と宗教上の關係を有するに至らん。最古の宗教に於ける感謝祈禱文等の中に於ても神は自然界に於ける諸の福祉を以て人に幸す、神は實に善なるものとの意義を含める字句あるに往々にして見る所也。使徒行傳第十四章第十七節、然れども自然界に於て此福祉と對峙する諸の惡あることも明白なる事實にして、吾人は之が正當

なる理由を講究せざるべからず。夫の自然宗教の見解上よりしては、到底之に向ひ満足なる解釋を加ふること難し。イヌラエルの道義的宗教に於ては、神の善なる意志の發現は、則ち其恩惠の確證ありと認められたり。然れども彼處に於ても神の恩惠を量るに、自然的福祉を以てするの慣行は永く夫の國民に存し、時に之が爲に大なる惑迷を生じたることもありき。加ふるに律法の儀文に於て、神の意志の發現を有すとの意識は、一方に於て人類の甚だ孱弱にして、全く其律法に服従すること能はず。又神に逆ひては何事をも爲し得ざるとの意識と相伴ひ、怒れる神前に在て常に恐怖の念を懷き、之が爲に神の愛に己を任放する信仰の生長を妨ぐることもある。は、これ自然の勢又歴史に照らすも照々乎として明なり。基督教に至り始めて神は愛なり天父なり、あらゆる好賜物を人類に與ふるのみならず、亦律法の儀文により其善の意志を顯はすのみならず、彼は自らを吾人に與へ、聖靈により善と聖とに達する力を與へ、彼に依り吾人と交通和合して其生活を共にせんと欲するものなりと明に教示せり。近頃神の愛てふ總念を解釋するに、神の愛は人類の目的を以て自己の目的と爲すにありと云ふものあり。此解釋は愛に含有するものを其だ不充分に概

念したるに基くのみならず、これ實に其正鵠を失したるもの也、何となれば此解釋は造物者たる神と被造物たる人類との關係を度外視したるが如き欠點あれば也、人類の目的(誠の目的)を云ふ、誤の目的は今茲に論するに及はず、神に對して、外形的に與へらるべきものにあらざ、神は之を以て自己の目的と爲すが如きものにあらず、却て之を人類の本性に賦與したるは神自身なり、去れば人類の目的は始より神自身の目的也、神豈に今に及びて特に之を我有と爲すが如きことあらん哉、寧ろ其順序を轉倒して下の如く言ふの勝れるに如かず、神の愛は自己の目的を以て吾人の目的と爲し、吾人の意志の容量と爲すにありと然れども之を要するに神は自己の目的を始より理性の力として吾人に與へ、其合理的衝動力即ち吾人が本性中に於ける神聖なる能力をして、吾人の思想、感情、意志を支配する原理とならしめんとするにあり、これ即ち心理上より觀察したる聖靈の本質なり、而して吾人が理性の能力の實成は常に進化の原理に由る、其原理は又た神の目的を設くる理法なれば、吾人が心に於て神聖なる理性(聖靈)勝を制するに至るは此れ神の業なりと云はざるべからず、神は人類の中に己に等しき生活を發揮し、以て其原始の目的を達し、又人類

をして自己の完全なる生活に關與せしむる也、茲に至りて始めて愛てふ總念を全ふしたりと謂つべし、蓋し愛は宗教上の關係に於ても、社會上の關係に於ても、等しくこれ其生活を共にせんと欲する意志也、かゝる與義的分子はグッチングンの「チヲカント」派の嗜好に適せざるや明にして、彼等は常に此觀念を目して異教の自然的與義論なりとして擯斥せり、然れども彼等が之を擯斥するは、同時に新約書の教示を擯斥するに等しきを記憶せざる可からず、今余輩が講述せしは新約の明示する所に外ならず、「ヨハネ」第一書第四章第十三節に曰く、かれ已に其靈をもて我儕に賜ふ、是に由て我儕の彼に居り、かれの我儕に居ことを知ると、舊約書に曰く、若し我爾を得ば、我は已に天地を望まざる也、(詩篇第七十三篇第二十五節)彼詩人が神に依て求むる所は、世界を管領せんと欲する方便にあらず、只誠心誠意神其者を求めつゝある也、乃ち彼を得て彼と其生活を共にせんと欲する也、若し全世界を以て之に比せば、彼の眼中には全世界も無價値たり、斯く神と交親せんことを希望し、是に依て自己の善福を得んと欲するものは、其希望神自ら彼に與へたるものなれば、決して空中に樓閣を望むが如き妄想にあらず、將た異教の迷信にもあらずして、頗る確實